
向日葵は太陽に魅せられて

立花 美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵は太陽に魅せられて

【Zコード】

Z7965V

【作者名】

立花 美月

【あらすじ】

結華はすべての責任と自分の人生を捨て祖父の別荘へ移り住んだ。ただ静かに、その日が来るのを待つだけの時間を黙々と過ごしていだ結華だが、ある日思いがけない訪問者が現れ動搖する。扉越しに「やっぱり、いるんだ」そう言つたのは紛れもなく「元」婚約者の貴史だった。***HPにて先行連載中作品の転載です。続きを読む知りたい方はそちらをどうぞ。***

花は美しいから見てもらえるのだ。

咲いていく過程と、咲き誇った後の姿は誰にも見られず、人知れずひつそりと枯れていく　まるで今の私のようにだと自虐的に笑つて空を眺めた。

ああ、この空をあと何度見ることができるものだろう。私はあの花のよう大きくなれることができたのだろうか。いや、もうそんなことはどうだつて構わない。私のすべては私が決めたのだから。

「結華さん、食事の用意ができました。起きてこられませんか？」

「いえ…食欲がありませんから…今は結構です」

「ですが…朝も…いえ、昨夜も何も召し上がってはいいでしょ？」少しでもいいので手をつけてくださいませんか？」

扉の向こうで遠慮がちに言つ、その言い回しが気に入らなくて私は部屋から出る気にすらなれなかつた。世話係として連れてこられたメイドの彼女は「私の心配」ではなく「私の世話ができない」とを気にしているのだ。

「気が向いたらいただきますので、置いておいてください」

おそらく私の心中など察していないだらう、ここに置いてますのでといふと早々と廊下へ消えていった。どうせ言われたとおりに作られた料理、そして言われたまま運んできたものに興味もなければ期待もしていない。

私は渋々ベッドから立ち上がり扉を開けて隣のリビングに出た。テーブルの上には何人前なのだ？と聞きたくなるような量の料理が並んでいた。

とても食べる気にはなれない、かと言つて処分するのも面倒だ。結局手付かずのそれはまた時間が来れば誰かが下げるだらうと、再びベッドルームに戻った。

祖父の別荘に来たのは今から一ヶ月ほど前になる。

私が両親に「行きたい」と頼むと、今は使つていなかダメだと断られた。それで諦められるはずもなく私は条件を出して無理やり承諾を得た。

これでひとりになれると思つたのにそんなに甘くはなかつた。両親はシエフとメイド、執事の三脚セットを用意して送り込んできた。おかげで私は一階から出る気にならず、リビング・書斎・ベッドルームが扉続きになつていて一番広い部屋に閉じこもる羽目になつた。

もともと外出する気はなかつたし別荘でひとり、何をするわけもなく過ごす予定だったのだ。それなのに誰かがいては監視されるようで気が休まらなかつた。

ベッドに横たわつても眠れそうにない私はバルコニーへ出て外の空気を吸いソファに座つた。

青い空を見ていると心が落ち着いた。
だが、同時にいろんなことが思い出されて結局のところ落ち込むことになるのだが。

彼はどうしているだらうかと、ふと気に入る。

私には彼のことを考える権利はない、彼から逃げ出したのは私のほうなのだから。

私は、私の責任をすべて投げ出してここに来たのだから、そんなことさら考えるのはお門違いだ。

彼と最初に会つたのもこの別荘だと覚えていた。まだ小さい頃だったが、その頃は祖父も生きていて毎年夏になると避暑と称して家族で集まつた。祖父は現役を引退していて会長職に退いていたが、慕つてくれる人が多く、家族の集まりと言つても結局は横の繋がりを求めて一族が集まつてしまふのだが。

その日立食パーティーが行われるといふことで庭焼きになつてゐる一階のリビングに顔を出した。私と同じ年頃の子どもは少なく、兄姉さえずいぶん大人に近かつた。

やつぱり退屈だ、そう思つていると見たことない少年　いや青年と言つたほうが正しいか　が目に入った。兄弟なのだろうか歳は近い感じだが雰囲気はまるで違つていた。

栗色の髪はクルンとカールしていて黒目が深い緑色でとても日本人には見えなかつた。彼らは祖父らしき人に連れられて私の両親と祖父母に挨拶をしていた。目が合つたとき微笑まれて思わず目を逸らした。それが出逢いだつた。

大人たちが会話しているとき、私は目の行き場に困つてそわそわしていた。ドキドキしててこんな気持ちは初めてだつた。もしやこれが初恋というものなのだろうか？　そう考えていると彼は私の前に歩み寄り自分の名前を名乗つた。そのとき私の想いは無残にもへし折られたのだ。

「はじめまして、くるすたかふみ来栖貴史です。よろしく、結華さん」

「え？　じゃあ貴方が私の…？」

誰も頼んでいないのに、生まれたときから決まつてゐる婚約者だつた。

梅雨が明けたからかバルコニーを通りしていく風が気持ちよく、いつの間にかうとうとしていたようだ。子供の頃、彼に出会った頃の夢を見ていた気がする。

ああ、あの頃はまだ良かつた。

何も知らないふりをしていればまだ救われたからだ。

ぼんやり空を眺めていると扉をノックする音が聞こえた。手をつけていない食事を取りに来たのだろうか、メイドと顔を合わせるのは億劫だと思つてベッドルームに入ろうとしたとき、扉越しに用件を伝えてきた。

「結華さん、お客様がお見えです」

え？ 客が来た？ 誰が、どうして？

ここに来ていることを知っているのは両親と兄姉、それとあの人だけだ。身内なら「客」とは言わないはずだ。ではあの人人が来たのだろうか？ いや、そんなはずはない。ここへ来るとき居場所は教えたが会わない約束をしたはずだ。

「入つていただいてよろしいですか？」

「え？ ちょっと待つて。そこにいるの？ 誰か訪ねてくるなんて聞いてないわよ」

焦つていた。そのことが声に出でいたのだろう。私の声を聞くなり「やっぱり、いるんだ」と言つて不躾に扉を開けた。それは聞き覚えのある声、見覚えのある顔。

どうしてここにいるのだろう？ それ以外のことは何も思い浮かばなかつた。涼しげな笑顔を向け立つていたのは紛れもなく「元婚約者」だった。

「どう…どうして、ここにいるんですかっ！？」

明らかに動搖していた。無理もない、彼はここに私がいることを知らないはずだから。両親が伝えたのだろうか、いやまさかそれはないだろう。婚約を破棄したのは私のほうで両親も彼には顔を合わせにくいはずだ。では、あの人…まさかそれはないと信じたい。

あれこれ考えている私を横目にすたすたとバルコニーへと足を運んだ。さも自分の部屋かのようにソファに座るとメイドに「お茶を頼むよ」とついて出て行くよう促した。

待て、ふたりきりにされても困る。今さら何も話すことなんてないのだ。だいたいこの人は何の用があつてこんな山奥まで足を運んだのだろう。

「久しぶりだね、結華さん」

「ええ、そうですね…」

もちろんその後の言葉は出でこない。彼はとりあえず座ればと会図する。当然の訪問にすっかり相手ペースだ。立っていても仕がないのでとりあえず正面に座る。何よりも立っているのが正直辛いのだ。

帰つて欲しいがそもそも言えずお互い黙つたまま。しばらくしてメイドが入ってきた。ティータイムのためかワゴンの上にはアーレグレイティーと焼き菓子が乗せられていた。今の私にはその強い香りが耐え難い。顔を背けテーブルの上と彼を見ないような姿勢になつた。

「わざわざ來たと言つて、その態度は冷たいんじゃないの？ 仮

にも元婚約者なんだし。もう少し嬉しそうな顔をしてくれてもバチはあたらないと思うなあ」

「私は、元婚約者に平然と会えるほど団太くはできていませんのでできない相談ですわ」

「こんな言い方しかできない。いや、こんな風にしかできなくなってしまったのは紛れもなく彼の所為だと思うのだが。彼もまた本心はまったく読めない。」

「それにお忙しいんじゃないんですか？ 貴史さんは役員になられたと聞きました。こんなところで油を売つてないで会社に戻られたほうが有意義に過ごせますよ」

一度口を開いたらもう止まらない。言つてはいけないと思つほど嫌味しか出でこない。それでも、どんな形でもいいから彼がここから立ち去つてくれれば私はそれでいい。

「僕のことなら気にしてもらわなくともいいよ。会社には言つてきてあるし、それに今は休暇中だ。僕がどこで何をしようが君にとやかく言われる筋合はないと思うけど、たまにはこんな静かなところでのんびりするのも悪くない。ああ、そうだ。部屋空いてるよね？ メイドに言つて用意させて、僕が泊まる部屋。とりあえずベッドルームがあればいいから」

あまりにもむちむちと言つので内容を理解するのに時間がかかった。

「え？ 泊まるつて？ ここに？」

私の頭は混乱していた。一秒でも早くいなくなつて欲しいのに彼は帰るつもりはないということか。ダメだと言つたら諦めてくれるだろうか。そう顔に出ていたのか彼はたたみかける。

「ああ、ダメとか言つても無駄だからね。ここに泊まることは許可

を得てるから。君に帰れという権利はないはずだよ？　ijiには君の持ち物じゃないんだからね。そういうことでよろしく

許可を得てる？　では祖母のことろへ行つたのだろうか。先ほどからほんとんど表情が変わらないため彼が何を考えているのかわからなかつた。とりあえず私に決定権はないようだ。観念して部屋を用意させることにした。

「大丈夫、もう婚約者じゃないから何もしないよ。安心して」「あ、当たり前ですっ！！！　そ、そもそも貴方が言い出したんですよっ！！！」

「ああ、のこと？　それは君だつて同じよつに思つていたはずだよ？」結華さん

図星をつかれてそれ以上反論することは拒まれたよつな気がした。

＊＊＊

小学校に上がつた頃だつただろうか、両親に連れ立たれて祖父母の家に向かつたのは、母の実家　父が婿養子なのでつまりは本家は地元でも有名な名家だ。母は四姉妹の長女で結局男子に恵まれなかつたため父が婿として跡を取つた。私には兄がいるから跡を継ぐことは回つてこない。幼心にそう思つた記憶がある。最初に男子が産まれて母はホッとしたことだろう。

兄姉とは十歳以上離れていた。このころもう兄は成人していて姉も大学生だつた氣がする。祖父母の家に行くときに兄妹が揃つたことはないが、この日は別の雰囲気を感じていた。

部屋に入ると「よく来たね」といつものよつな挨拶を交わしたが両親は違つていた。何か大切な話があるのだろうと察することは容易だつた。ここにいてはいけないのでないだろうか、そう思つた

が「今日は結華に話があるんだよ」と言われ驚いた。

「おじこさま、なんでしょう?」

「結華、学校は楽しいか? 何か困ったことはないか?」

そんなことを聞くためにわざわざ呼んだわけではないだろうと思つたが質問には答えた。

「とくにありません。先生もお友だちもよくしてくれます」

「そうか…家庭教師がいると思うが、そちらも問題ないか?」

「はい、とてもていねいに教えてくださいますので、だいじょうぶです」

この頃私には家庭教師がついていた。と、言つても一般的な勉強を教えるわけではない。この家、長谷家のすべてを教えられていた。古い歴史から現在まで。とても小学生に理解できるはずもないだろうが、物心ついたときから周りがいろいろ噂しているのを聞いてくるから漠然とわかる。

「どうか、ならわかるな? 結華にも決まつた相手がいることを理解しているな?」

黙つてコクツと頷いた。反論しても仕方がないことだ。古い歴史の中で嫁ぐ先は産まれる前から決まっていることを。自分に婚約者がいると言つ事實を、子供ながらに知らされたのだ。

特に驚きはなかった。

ようやくこの日が来たのだと実感しただけで、それ以外は何も変わらない。

実際、婚約者の存在は知られたが顔を合わしたわけでもないし、相手のことは何もわからない。ただ名前を聞かされて、どういう家に嫁ぐか、それだけは理解できた。

「相手は来栖家の次男、貴史君だ。我が家にとつて来栖家がどういう存在かはわかつているね？顔見せはまた機会を設けることにしよう。結華、お前も今までどおり長谷家人間として恥をかくことがないように気をつけるんだよ。わかつたね？」

それだけ伝えると私には用がないのか、両親と別室へと消えいった。仕方がないので庭に出て祖父が飼っているショットランド・シープドッグのレオンと遊ぶことにした。と、言つてもただ横に座つてぼんやり景色を眺めているだけなのだが。

婚約者か、と考えるだけで憂鬱だった。

自分の決めた人でなければ愛があるわけでもない。お互い家のために結婚するのだ。時代錯誤もいいところだと思うが誰も反論しないからその風習は変わらない。

昔は婚約の儀を幼少の頃に済ませ嫁ぐほうは相手の家に住み、そこから学校に通つたり稽古を習つっていたりしたそうだ。だから他の人と恋をする間もなく何も不思議に思わず夫婦となつたのだろう。

相手がどういう人かは興味がもてなかつた。

それはおそらくお互いまだらう。相手もこちらの家庭事情は把

握しているだろ？し私も同じだ。

来栖家は長谷家と同じく名家であるが本家ではない。時を重ねていくうちに幾らかの分家ができる、そのうちのひとつに過ぎない。ただ戦前までは華族の称号を受け継いでいたのでいまだにその名残が残る。

来栖家は医療系を得意とする家系で新規事業が好調らしく、うまく長谷家に取り入った形だ。こちらも土地や人材は豊富にあるから利害は一致する。それを確固たるものにするため婚姻を結ぶのだろう。

おまけに私は長谷家の次女で、ともすれば行き先が決まらない場合もある。両親から見れば早々に引き取り先が見つかって安心、といつたところだらう。所詮私は駒なのだ。

自分の育つた環境の所為か幾分冷めていて、立場を冷静に分析していた。だから自分は間違つても恋なるものに落ちるなど夢にも思つていなかつた。

* * *

「それにしても婚約破棄だなんて驚いたよ。まさかそれが聞き入れてもらえるなんてね。だつたら僕のほうからもつと早くに言えればよかつたよ、だつたらこんなに気分を害されることもなかつただろうし。君のほうはさぞかし気分爽快だらうね？ ああ嫌味を言つてるわけじやないよ。ただ想定外だつたもんだからね、僕の立場を考えて欲しかつたなあ……つてね」

ここは黙つておいたほうが身のためかもしれない。反論する気も言い訳する気もない、それよりも気分が悪いのだ。早くベッドルームに戻りたいがそう言つわけにもいかないだろ？

「私との婚約がなくなつて清々したんではないですか？ こちらの勝手でこうなつてしまつたけれどお互の為にはこのほうが良かつたんですから。 そうでしょう？」

「…それは結果論だろう？ 君には結局人を思いやる心がなかつた、つてことになるのかな？ 長谷家の人間ともあらう君がまさかそんな人だつたなんて、がっかりだよ？」

「そんな思つてもいいこと言つていただきなくて結構ですわ。貴方は最初から私には何の期待もしていなかつたでしょ？ ガッカリだ、なんておっしゃらないでください」

売り言葉に買い言葉もいいところだ。だが、お互いが婚約者だという立場で知り合つてからこれだけは変わらない。変えることができなかつた。

彼の本心はわからない。今言つていることが本音なのかもしれない、でもただの嫌味にも聞こえる。私の頭が都合よすぎるのだろうか？ たとえ気持ちがなくとも嫌われたくはないどこかで思つているのだろうか。いやそれはないと首を振る。私の想いは別のところにある。

「そうだね、僕は最初から君に期待なんにしていなかつた。そもそも親の決めた相手なんて僕は認めない、認められないんだから」

この男はまだ言うのか。

最初に紹介されたときも笑顔で同じことを言つてのけた。それは私だつて同じだと言おつとしたが、いつても始まらないと言葉を飲み込んだ。

あのときの彼の顔を今でも覚えている。なんて自分勝手な男だろうと内心腹が立つていた。幸い両親や祖父母はその台詞を聞いていなかつた。彼が聞こえないようにしたのだろう。ので、そのことを知つているのは私たちだけだ。

とはいって、婚約を解消した今となつてはどうでもいい話だ。これ以上言い合しても疲れるだけだと私は再び黙り込んだ。

「結華さん、そろそろお時間ですが…どうされますか？」

会話が途切れた頃メイドが入ってきた。いつもなら煩わしい彼女もこの状況だと味方に見える。そしていつもはこの時間が一番憂鬱なのに、ひとりになれるのかと思うと心が弾んだ。

「すみません、貴史さん。人が来ますので席を外していただけますか？　ああ、お泊りになるのは結構ですがいにく私はお相手できません。何かありましたら執事かメイドに申し付けください。それと田中は一階のリビングをお使いください。どうしても私に話があるときにはそちらで伺いますので」

滞在する」とは拒否できないが顔を合わせたくないと言えば彼も首を縦に振るだろう。そして興味のない顔をして「ああ、そう」とだけ返事をした。

まさか彼が一ヶ月もの長期休暇を取っていることなど、このときは知る由もなかつた。

「気分はいかがですか？ 何かありましたら言つてください。くれぐれも安静にお願いしますよ」

主治医は何度も念を押すように言つとベッドルームを出て行った。右手首の辺りに刺された針は傷みを感じていたがそれももう慣れだ。少しづつ落ちてくる点滴を見つめながら時間の長さを感じていた。

安静について…この状態でビーリングとい?

点滴が楽なのも最初のうちは一時間もすれば体がだるくなる。終わるまで軽く三時間はかかる。気分は落ち込むし次第に吐気が襲ってくるので憂鬱で仕方がなかつた。

だがこれを拒むわけにはいかない。

一ヶ月前、ここに来ることを許してもらいう条件の一つとして「治療すること」を提案された。それを拒めば家からは出せないと言われ渋々承諾した。

「えつ？ もう一度…お願いします」

「ええ、ですからがん細胞が見つかりました。結華さんの場合子宮体がんです。それもかなり進行が進んでいると考えていいでしきう。もう少し詳しく検査してみないとなんとも言えませんが…かなり悪化していると考えてください」

少し前から体調が良くないと思つていたため主治医に相談していた。

もともと生理不順だったため産婦人科にかかっていたのだが、最

近は問題なさそうだったので病院から足が遠のいていた。ところが月経にしては間隔が短いと思い始め、徐々に腰まわりが痛み出した。立ち上がるうとしたときなど激痛が走るので、これはいかがなものだろう? と再び来院した。

主治医は最初の診察のときに顔をしかめた。そして難しい顔で「詳しい検査をしましよう」と言つたのが一週間前。そして思いもよらない台詞を聞かされたのだ。

「来週、超音波とCT、MRIの検査を予約しておきますので詳しいことはその後で説明します。すべての結果が出ましたらご両親にも説明しますのでそのつもりで」

主治医の言葉は耳に入つてこなかつた。
まず気になつたのはがんの進行度よりも自分がこの先子供を産めるかどうかだつた。

手術はするだろう。それがどの程度のものかわからない。
仮に子供が産めない体になつたとしたら…おそらく婚約は白紙に戻るだろう。そして私は永遠に行き場を無くしてしまつ。そのことが急に恐くなつた。

だが、検査が終わつてみると考えていた以上に事態は最悪の方向へと向かつていた。

「思つて以上に進行が早いです。リンパ節への転移も確認されましたので、外科手術は困難な状態です。放射線と抗がん剤治療で様子を見ていくしかないと思われます」

「それは…もう治らない、と言つことですか?」

「完治は難しいと思います。治療の効果は人それぞれですのでなんとも言えませんが、最悪の場合も考えていてください」

「そうですか。では、私は…後どのくらい生きられるのでしょうか？」

間があつた。私の態度が冷静だからだろうか迷つてこようにも見える。せひとも教えて欲しいと、主治医の目をまつすぐ見た。

「…半年、といひところでしょうか」

気が付くと点滴は三分の一ほどになつていて、眠つていたなんて珍しい、よほど彼との一時が疲れを誘発していたのだらう。誰も来ない今の時間は痛みに反して幸せな時間だった。

しかしそれもすぐに主治医の登場で壊される。不意に溜め息が漏れた。

「なんですか？溜め息なんて吐いて。気分はどうですか？どうか気になることは？」

「…特には」

「そうですか、では針を抜きますね。そりいえば結華さん、食事されてないってシェフが嘆いてましたよ。せっかく作ってくれてるのだから食欲がなくても一口くらい食べないと失礼ですよ。みんな心配してますよ」

みんな、という言葉に引っかかった。誰が心配しているというのだろう。

ここにいるスタッフは父に言われ仕事だからと割り切つていて。祖母は何も知らないから仕方ないとして、両親は私がここに来てから一度も顔を出したことがない。使えない私に割く時間も興味もないのだ。唯一心配しているとすれば田の前の主治医だろうが、それは医師としての責任があるからだ。

「先生に心配していただかなくても結構です」

「そうもいかないですよ、『ご両親から任されているんだから。心配してましたよ？』まあ経過は私のほうから報告をせてもらってるのでいいんですけど、たまには連絡してあげてくださいよ」

「どうして、私から…そもそも心配だと言うのなら見舞いに来ればいいだけのことでしょう？ それをわざわざ先生から聞き出すなんて…なんとも思ってない証拠じゃないですか。放つておいてください」

ベッドに潜り込み早く帰れと意思表示した。だがそれくらいで引き下がるような人ではない。私の治療をしていてこんなことは日常茶飯事なのだから。

「そういえば今日は珍しくお密さまが来てましたね。なんでも結華さんの婚約者だとか？」いつやつて見舞いに来てくれるなんて優しい彼じやありませんか」

「かつ…彼は、元、婚約者ですっ！！！ それに優しくもありません！！！」

「そんなことないでしょ？ 私の顔を見て、先生結華がお世話になつてます、今日もよろしくお願ひします、って言われたんだから。気になつて仕方がないんですよ」

思わず主治医のことを凝視した。

何か聞き逃してはいけないことをさりげつてのけた気がしたからだ。

どうして彼はそんな風に言つたのだろう？

この人が主治医だと、私がここで治療していると、それを知つていたのだろうか。

彼の意図が読めない

私の頭は少々混乱気味だった。

その日の夕食は彼に付き合わされた。

と、言つても私は食欲がない。先ほどまでの点滴が効いてきてとてもそんな気分になれなかつた。それでも失礼があつてはいけないと吐氣止めだけは飲んでおいたが。

彼は黙つたまま食事をしていた。こんなことなら私を呼ばずひとりで食べればいいのに、食べようとしている顔色の悪い女を目の前に置いたところで気分を害すだけだろう。どうも彼の意図が読み取れない。

仕方なくスープを一口飲んでみたがやはりそれ以上は進まなかつた。

「そう言えば、おじさんほんとはここには来ていないんだってね？　まあ忙しいから無理もないのかなあ？　それにしても娘をこんなところに置いてても気にならないなんて…僕には信じられないなあ。それより結華さんはいつまでここにいるつもり？」

「ちつ…父は…仕事が一番ですから。それに、貴方には関係ないことでしよう？　私のことも私の家のことも放つておいてください」
では、と言つて席を立つた。これ以上同じ空間にいるのは息が詰まりそうで耐えられそうにない。それに一刻もひとりになりたかった。父のことを聞かされるのは、彼といふことよりも不愉快なことだつたからだ。

* * *

「結華、来栖家との縁談だが解消された。今後のこととは主治医と相談して決めるとしてよ。」「うう」と、結華はうなづいた。

治療計画が立てられる前、父に呼び出された私は結果だけを聞かされた。

私と彼のいないところで話し合ひがされたのだろうと容易に想像できた。婚約も解消もすべて本人たちの知らないところで交わされる。私たちの意志など何も取り上げられず、お互いの利害だけで動く人たち。わかつていただ腹立たしかった。

だからどうか、なぜか父に反論したくなつたのは。

「私…治療を受けるつもりはありません」

「何を言つてるんだ、結華。そんなわけにはいかないだろう？　ちゃんと治療してくれないと困る。それに治療せずにどうするんだ？　結華がゆっくりと治療できる病院は手配してある。少し狭いが特別室を用意してると、いやだと言うなら理由を聞かせてもらおう」
父の手回しの良さに驚いた。いや、私が悔つていただけでこの人ならこの程度の事は朝飯前なのだろう。私が治療しないと困るのは父のほうなのだ。もう私をこの家に置く気がない父は治療と称して私を引き取ってくれるところを探しただけなのだ。

父を納得させるだけの台詞は思い浮かばなかつた。それでも思い通りになるのも避けたい。そこで無理を承知で提案した。

「あの、お祖父さまの別荘で過ごしたいのです。お願ひします」「あそこはもう何年も使っていないし、使用人も今はいないからダメだ」

「病院へは行きません。でしたら私はこの家を出て行つてひとりで過ごします。今までありがとうございました」

「結華、待ちなさい。別荘で…そこで治療すると言つながら使えるようになります。このまま出て行くことは許せん。いいか？」

交渉と言つより半ば強制だ。それでも私は条件を飲んだ。

今まで父に何か頼んだことも反論したことなかった。最初で最

後の願いは聞き届けられることになるのだろうか。このときばかりは勝ち取った気がした。

ただ実際に別荘へ入る日程が決まったのは一ヶ月以上経つてからだった。おそらく父も私の気が変わることを期待していたのだろうが、私は譲る気はなかつた。

主治医と担当看護師が来ている以外はひとりで好きなように過ごせると思っていたのに使用人がいることで楽しみは半減してしまつた。それでも家にいるよりはずいぶん肩の荷が下りた気がしていた。婚約を解消することを知らない兄姉は「長い夏休みだ」と皮肉を込めて言つた。言い返す氣にもなれず大げさに笑顔を見せて家を後にした。

＊＊＊

気分が悪いと目が覚めたのは明け方、四時頃だった。

珍しく長く眠れたほうだと思つ。抗がん剤を点滴した夜は強い吐気に襲われてなかなか寝付けないし、仮にうとうとしてもすぐに痛みが私を苦しめる。

実際には何度も目を覚ましているのだろうが覚えていないだけだつたようだ。サイドテーブルに置かれていた水は半分ほど減つていた。途中私が飲んだ証拠だ。

真つ暗な部屋で体を起こそうとしたとき不意に気配を感じた。目が暗闇に慣れないためか顔がぼんやりとしか見えない。だが、使用人でないことだけはわかつた。と、すればひとりしかいない。

「…何してるんですか？ 貴史さん…」

「あれ、ばれちゃつた？ 結華さんって結構無用心だよね、部屋の鍵開いてたよ？ 眠れないからさ、話相手にでもなつてもらおうと

思つてね。ノックしたんだけど返事がないから戻らうとしたんだけど、扉が開いたからね。思わず入ったはいいけど寝てるもんだから起こすわけにいかないし、そのつち起きるかと思つてたんだけど…

ほんと、警戒心が薄いよね

「こんな状態でも軽口を叩ける彼が少々羨ましく思えてきた。

鍵をかけていないのは治療があつた日だけだ。夜中に何かあつても使用人がすぐに入れるようにするためだ。そもそも彼が来るまでは鍵の心配などしていなかつた。気にしなくて誰も入つてこないからだ。

「それで…ずっと起きて私のことを見てたんですか？ 結構悪趣味ですね。気が済んだのなら」自分の部屋に戻つてください

「まあ、言われなくともそうするよ。もういいみたいだし。じゃ、おやすみ」

結局何をしていたのかわからぬままだった。

彼が私のことを心配して様子を見ていたと知るのはもっと後になつてからだつた。

薬の副作用の所為か、彼に対する気疲れのためか、私は一週間ほど熱にうなされほとんど起き上がることができなかつた。昼間少し熱が下がり、また夜になると体調を崩すといった感じだ。

その間彼の顔を見ることがなかつたので帰つたものだと思つていた。気分も良くなり主治医も「もう大丈夫でしょう」と診断したので久しぶりにバルコニーへ出た。少しだが食欲が出てきたので軽食を持つつけてもらつことにした。

「来栖さまでしたら、まだいらつしゃいます。毎日午前中はお出かけされていますが、午後には戻つてお部屋で仕事をなさつているようです」

彼はいつ頃帰つたのかと尋ねると予想外の返事が返つてきて困惑した。

「まだここにいると言つのだ。しかも部屋で仕事をしている? やはり忙しいのだ、だつたら帰ればいいのにと思つ。その会話を聞いていたのかと思うほどタイミングよく彼は部屋に入ってきた。

「結華さん、気分が良くなつたんだつて? あ、そのサンドウイッチおいしそうだね、僕にもちょうどいい ああ、それとコーヒーいれてくれるかな? もちろんブラックでね」

「か、勝手に入つてこないでください!!!! そもそもどうしてまだここにいるんですか? つて、人の話を聞いてください!!!!」

彼は私の話を聞く気がないのか、コーヒーを持つてきたメイドと楽しげに話していた。ここへ来たときはメイドも難しい顔をして彼に接していたのにつの間に打ち解けたのだろう。

いや、私が寝込んでいる間はいくらでも時間があつただろう。それにしても私に対する態度とは大違ひだ、ふたりとも。私に対する嫌がらせなのだろうか。せつかくの食欲も失せてしまいそうだ。

思わず漏れた溜め息を聞き逃さなかつた彼はメイドに席を外すよう指示した。これでは誰が主人かわかつたものじゃない。

「…貴史さん、お仕事忙しいんでしょう？ そろそろお帰りになつてはいかがですか。部屋で仕事するくらいなら会社へ戻つたほうが都合がいいでしょう？」自身の会社のことが気にならないんですか？」

「君も意地悪な言い方をするね、僕は一役員であつて会社は「僕の会社ではないよ。それくらい知つてるだろ？ それに仕事をことを気にしてもらわなくともいいし、第一、あつちは兄さんがいるから僕はいてもいなくてもどちらでもいいわ。僕の役割なんてたかが知れてる」

兄の名前を出す羽目になつたからか、彼にしては投げやりな言一方をした。

彼が勤めている会社は来栖家が経営する医療系の会社だ。

彼には兄がいて次期社長候補として勤めている。それに対して貴史さんはこのまま役員でいるか子会社のひとつを任せられる程度だろうと噂で聞いたことがある。

ここへ来る前、兄の裕臣さん^{ひらくおみ}が専務に昇格したと聞かされた。しかも本人から。

そう、私はここへ来る前に裕臣さんに会つた。どうしてあの人にはだけは会つておきたかったから。

* * *

「久しぶりだね、結華ちゃん。ちょっと瘦せた？」

貴史さんとの婚約が解消され、来栖家に出入りしなくなつた私はおそれく半年振りくらいに裕臣さんの顔を見たように思つ。相変わらず優しい声で私を「結華ちゃん」と呼ぶ。それが心地よかつた。が、すぐに我に返る。今日は大事なことを伝えなければならぬ。そしてそれが何を意味するか、昨夜はそればかり考えていてほとんど眠れなかつた。

「裕臣さんこそ顔に疲れが出ていますよ？ 忙しいんじゃないんですか？ なのに来てもらつて…ありがとうございます」

「いいんだよ、たまには息抜きしないと参つちやうからね。それにすいぶん結華ちゃんが家に来れないから気になつてたんだ。貴史とはどう？ うまくいってる？」

やはり何も知らないんだと思つた。貴史さんも私との婚約が解消になつたことを話していないうらしい。もともと兄弟の仲が良いわけではないので当たり前と言えばそれまでだが。

まだ心の整理ができていない私は「まあ」とあいまいな返事をしただけで、裕臣さんの話に切り替えた。

「私たちより、裕臣さんはどうなんですか？ まだ結婚式はしないんですか？」

「そろそろ、とは思つてるけどなかなか忙しくてね。それに先月、僕が専務に昇格して今はそれどころじゃないかな。相手には待たせてしまつて申し訳ないと思つてるよ」

「え？ 専務に昇格されたんですか？ おめでとうございます、私つたら何も知らないで…」

「いや、今回の人事は役員会議で引継ぎだけして終わつたからね。会社の連中もいつの間に、つて驚いてたよ。彼女もその辺りの事情はわかつてゐるから、何も言つてこないし。まあ、それに僕が甘えてるんだけどね」

自分から振った話とはいえ、裕臣さんの相手の話は辛いものがあった。やはり無意識なのだろうが嫉妬に近い感情が沸いてくる。裕臣さんの相手が私だったら…と、ありもしない妄想を抱いてしまうのだ。

こんなに優しい人に愛される彼女とやらが羨ましくて仕方がなかつた。私が病気にならなければ義理の姉となる人だが、今となつてはそくななくて良かつたと思っている。

仮に「お義姉さん」と呼ばなければならなくなつても私は笑顔を向けられるか自信がなかつた。

私の初恋相手は裕臣さんだつた。

あの日、この人に心を奪われ、そして一瞬で叶わない想いだと突きつけられた。

婚約者の存在を知らされてからいざれ顔合わせがあるだろうと察していた。それもそう遠くない未来に。だからどうか、お祖父さまの別荘で関係者を集めてパーティーをすると聞かされたとき、もしかしてこの日がそうではないのかと思った。

案の定、そのほとんどが大人たちばかりで目の前に現れた青年が私の相手なのだろうとすぐにわかつた。だが予想外にも私の前に現れた青年は「ふたり」いた。

（なんてキレイな人なんだろ？…）

栗色の髪に深い緑色の瞳。

日本人とはかけ離れたその人を見たとき、私は初めて恋に落ちた。そして親が決めた縁談が、心無いものではなく愛しい人とのものであればどれほど幸せだろう、と淡い期待をよせた。

大人たちの意識がお祖父さまに向いたとき、そばにいたもうひとりの青年が私に声をかけようと近づいてきた。よく似ているが髪の色が少し黒い。そして瞳の色がさらに深い色をしていた。

そしてその名前を聞かされたとき、私の心は一瞬で闇へと落とされた。

「はじめまして、来栖貴史です。よろしく、結華さん」

「え？ ジャあ貴方が…？」

眩暈がしそうなほど息苦しかった。私が心を奪われた人は婚約者ではなかつた。

「…えつと、今お祖父さまと話してるかたは？ どなた？」

「ああ、あれは兄の裕臣だよ。何？ 兄さんが気になるの？」

「そ、そんなことはありませんっ」

明らかに動搖していた。だが、彼にそれを見せることは許されない。

婚約者である彼に、私がその兄のほうに気を取られたなど、知られていいはずがないのだから。

「それにしてもすごい人の数だね。さすが来栖家と長谷家の顔合わせの場つてかんじ？ 子供の婚約発表の場にしては大層だよね。ほんと、時代錯誤もほどほどにしてほしいっていうか。大人が考えてることなんてわからないね」

「…それでも、仕方ないことですから」

「へえ、結華さんはずいぶんものわかりがいいんだね？ そう教育されてきたから仕方がないのかな？ もうちょっと大人になれば同じような疑問を抱くよ」

このときすでに高校生となっていた彼にとつて私は子供であり、あからさまにこの顔合わせを嫌がつていることを匂わせた。私だってそこまで子供ではない。疑問を抱いても反論する機会はなく理解しているふりをしなければ余計に辛くなるだけだったのだ。

なのに、彼はそれをあつさり認めてしまう。

「だいたい、僕は親の決めた縁談なんて認めない」

軽口を叩いていたときは表情が違っていた。

私に対してもあるのだろうかと思うほど、秘めた怒りを感じ取れる瞳をしていた。

恐かった。

初めて会ったはずの彼のことが無性に恐くなつて、私はその場か

ら逃げ去った。

その背後で彼が静かに微笑んでいるよう、振り返ることもできなかつた。

どうして、彼なんだろう。

どうして、恋した相手が婚約者ではないんだろう。

そればかりが心を覆いつくし、私は一度と彼に心を開くことができなかつた。

その後何年かは彼と会う機会がなかつた。

だから私も裕臣さんへの恋心は消化できていると思い込んでいた。幼い頃の淡い思い出、一時的に大人に見えた彼へ憧れの気持ちを抱いただけだと。

ところが高校を卒業する頃になつて父が結納をする時期を持ち出してきた。

来栖家のほうもそろそろ、と考えているらしく私が口出しできるようなものではなかつた。結局いつも相談と持ちかけて事後報告なのだ。

そのとき初めて来栖家に足を踏み入れた。いくら抗つてもこれは変わりようのない事実で、ここが自分の嫁ぎ先なのだと敷居を超えた。

「結華ちゃん、久しぶりだね」

たまたま廊下で鉢合わせた裕臣さんに声をかけられて私はドキッとした。あの日焦がれた想いはまだ私の中でもぐすぶつっていた。そしてそれは彼に会つたことで徐々に燃えはじめていた。

そう、どうすることもできないのに。

恋すればするほど自分が辛くなるだけなのに。

義兄に想いを寄せて、愛のない婚約者と夫婦になる。

結納の儀、その最中私は彼の顔を直視できなかつた。初めて会つたときに私を認めないと言つた男。あれからあの言葉がどうしても許せなかつた。

自分たちが望んだ結婚ではないのだから、それだけは言つてはいけない一言。なのに自分の気持ちだけぶつけ、私の気持ちは僅かにも考えてくれなかつた彼をどうして許せよう。

彼のほうも終始不機嫌な顔をしていたと、後から耳にしたが当然だろうと思つた。

それから事あるごとに来栖家に呼ばれたが、貴史さんと話すことはほとんどなかつた。

代わりに裕臣さんがいろいろと気遣つてくれていたので、いつの間にか相談事を持ちかけるようになつていて。すると彼はいつも笑顔で返してくれた。

「貴史は結構頑固だからね、親父に似たのかな？　でもほんとはいい奴だから、結華ちゃんも気長に付き合つてあげて。僕はこんなに可愛い妹ができるの、楽しみにしてるんだから。貴史と仲良くしてやつて」

私の想いが届くことはなかつたが、それが小さくなることもなかつた。

日に日に募る想いをいつか断ち切らなければ、いつか裕臣さんに迷惑がかかる。そう思つていた矢先、私は残酷にも余命宣告された。

だから最後に、私の想いを消化させなければと、あの田あの人だけにはすべてを伝えた。

「裕臣さん、私…もう長くは生きられません。明日、祖父の別荘へ
移り住みます。そこで最期を迎えるつもりです。あそこは私の思
い出の場所ですから…裕臣さんと初めて出会った場所です。あの日か
ら…私はずっと貴方のことが好きでした。好きになつてはいけない
人なのに…でも私は貴方に会えて幸せでした。だから今日でお別れ
です、裕臣さん…ありがとう」

幸せになつてね、そう心の中で呟いた。

あの日、すべてを断ち切つたつもりだつたがそう簡単に切り替えられるものではなかつた。

いつか裕臣さんが私を訪ねてくるんじやないかと期待したりもした。だが、そのすべては私の願望であると同時に幻想でもあつたのだ。

だから貴史さんijiへ来たとき、一瞬彼を裕臣さんと勘違いした。ijiに私がいることを知つてるのは両親と裕臣さん。だからなぜ貴史さんなのを見当がつかなかつた。

「今日の夜は一緒に食事、できるよね？」さすがにこの一週間、ひとりで食事するのは寂しかつたなあ。よく結華さんは平氣だね？
慣れつてやつ？」

「…あいにく私は食欲がありませんので、おひとりでどうぞ。それに…お相手はできないと申したはずですが？ それが気に入らないと言つのなら帰られてはいかがですか。だいたいもう一週間もここにこらつしゃるでしょう？ 休暇にしては長すぎると思いますが」

「あれ？ 言つてなかつた？ 僕はとりあえず一ヶ月の休暇をもらつてるんだけど？ だからまだまだ帰るつもりはないから」

聞き間違えたかと思つた。

一ヶ月も休暇？ どんな理由でそれが通つたのだろう？

仕事の面では厳しいと噂がある裕臣さんでも、弟のわがままなら聞いてしまうということなのだろうか。もしくはijiへ来ることを知つているから承諾したのだろうか。

「えつ…聞いてません…！　そんなことつ…！」

「そう、じゃあ今言つた。それに僕は相手して欲しい、って言つた覚えはないけど。ただ食事は一緒にできるかつて確認しただけ。どうせ結華さんも食べるんだから、それなら同じ時間に食べたほうが作るほうも一度で済むんだし。別に黙つっていても僕はこいつに構わないよ?」

正面に座つてこるだけでここという彼の真意がわからなかつた。黙つて食事するくらいならひとりのほうが気が楽だと思つが、と言いかけて言葉を飲み込んだ。

実際のところ、私も一ヶ月にひとりでこるうちに寂しくなってきたのかもしれない。ずっとひとりならそう思わなかつたのかも知れないが、一度誰かといふことに慣れてしまつとやうもいかないらしい。だから彼に口では「帰れ」と言つてもこいつやって一緒に同じ時間を過ごしてしまつ。

婚約時代はこんなに会話しただらうかと疑問に思つ。あの頃はお互い目を合わせることも少なく、隣に座つていっても会話は最小限、彼の笑顔など見たこともなかつた。

それはおそらく彼もそうだと思うが、ふたりの間には常に見えない壁があるような気がして、お互い別の空間で生きている感覚だつたのだ。

ふたりきりで過ごす時間がもつと昔にあつたなら、私たちの関係は少しは違つっていたのだろうか。いや、私が裕臣さんに心惹かれている時点では無理な話だつたのだろうか。

ふと、彼はそんな私の行動や言動に気が付いていたのではないかと疑問が浮かんだ。今まで考えたこともなかつたが、知つていたとしても不思議ではない。とはいえたことはできないが。

「ところで貴史さん…私がここにいると、誰から聞いたんですか？」

「このことはごく僅かな人しか知らないはずですが」

「え？ ああ、それはまあ企業秘密ってことで。こう見えて僕は結構広いネットワーク持ってるんだよ？ あまり見くびらないで欲しいなあ」

「そうですか…近しい人から聞いたわけではないんですね？」

それに対しても返事はなかった。

無言の肯定、と言うべきか。信じたくないがが裕臣さんが彼に話したと考えるのが妥当なようだ。私としてはもう一言一言嫌味っぽい言葉が返ってくると身構えていたから、彼の態度に面食らった。それ以上この会話は続ける気がないと無言の圧を感じ、何も言えなくなってしまった。

いつもこうだ。一方的に会話を終了させてしまう。ほんの僅か、心の隙間を垣間見た気になつてもまたすぐに閉じられてしまう。いつまでたっても彼の心は読めないままだった。

それから何日か、本当に黙つて向き合つだけの食事の時間を過ごした。私が何か話し出すまで彼は黙つて食事をし、適当な時間に部屋に戻つていた。

しかしそれも時間が経つにつれ少しずつ変化してきた。彼のほうから話しかけてくれるようになつていていたし最初ほど嫌味っぽい言ひ方もしなくなつていた。食欲こそなかつたがイスに座つて彼の顔を正面から見ていると、今まで知らなかつた彼の一面が見えてきたような気がした。

「結華さん、散歩にでも出かけない？」

ある晴れた日の午後、彼が唐突に部屋に入ってきたかと思うと誘うような口ぶりで私を見た。

「いえ…さすがに散歩は無理かと…せつかく誘つていただいたのに、

すみません

「ええ？ 誰も歩けなんて言わないよ？ ほら、そこに車椅子があるからそれに乗って。僕が後ろを押していくから、それなら問題ないだろ」

車椅子は隠していたつもりだった。

彼の言葉に一瞬動搖したが、そういえば夜中寝ている間に何度も出入りすることを考えれば、その存在に気が付いていたとしてもおかしくはない。

半ば強引に私は外へ連れ出された。ここへ来て実に一ヶ月以上家の外に出ていないことを実感した。来た頃はまだ初夏の陽気で風もいくらか冷たく感じていたのに、今では少し汗ばむ陽気だ。

どこへ向かうとも告げず、彼は無言で車椅子を押し続けた。前にいる私は彼の顔を見る事もできない。たとえ見ることができても何を考えているのか読み取ることはできないだろうが。

別荘が立ち並ぶ舗装された道路から離れ、辺りは草原が広がりつつあった。横切る風が夏を乗せてくる。青い空の下黙々と歩きやがて民家が見えなくなつた頃、「着いたよ」と声をかけられた。

目深にかぶつていた帽子を上げると視界の先には、懐かしい景色が広がっていた。

『向日葵畠』

幼い頃ひとりでよく遊びに来ていた場所だった。

この日の向日葵畑はまだ茎が細く花も小さく咲いていただけだった。もう少し暑い日が続けば大きく、そして空へと向かう花が咲き乱れるだろう。

ただ、私としては懐かしい気持ちが溢れてきて花の状態は正直気にならなかつた。少しでもあの太陽に近づこうと必死に背伸びしている姿をじつと見ていた。

幼い日もこうやって黙つて見上げていた。向日葵の花は私になど興味がなくただただ青い空を求めていた。それが自分自身と重なつて同じように太陽を見つめていた。

兄姉と歳が離れている所為かほぼ一人っ子のような扱いを受けて育てられた。

身内に同世代の子供は少なく、小学生になるまでひとりで過ごす時間のほうが長かったような気がする。母はずいぶん私のことを可愛がつっていた。いや、今にして思えばあの可愛がりようは自分の子供に対するものではなく、新しいおもちゃを与えた少女のようだつたのかもしれない。

私に躊躇と言えるような行動をとることもなく、ただ自分の欲望をぶつけていただけだ。私は母の「お人形」だったのかもしれない。

母は言うなれば「専業主婦」であるため家で過ごすことが多い。おまけにその家には使用人が何人か住み込んでいる。そのため特にすることもなく時間を持て余している母はお祖父さまの別荘によく出入りしていた。そして私は当然のように頻繁に連れてこられた。兄姉が忙しいから私はちょうど良かつたのだと、母の口から聞いたことがある。

しかし最初こそ相手になつてくれるものの、次第に大人たちの会

話に入れなくなる。頃合を見計らつて私は誰に声をかけるわけでもなくその場を抜け出す。ここへ来た頃は物珍しいものがたくさんあり退屈もしなかつたが、回数を重ねるうちにすることもなくなる。そうしてあの日、はつきりとした目的はなかつたが外へと歩き出した。

＊＊＊

大人たちは集まるとすぐに近況を報告しあう。そしてお世辞を言いながらそれでも自分たちのほうが上なんだと言わんばかりに自慢する。子供の私には正直どうでもいい世界だった。

周りの大人们が私を見る目も何を意味するかわかつていたし、末妹になど興味が薄いだろうことも知っていた。だから私が姿を消してもすぐに気が付く者がいないことも納得できる。

「あー、たいいくつー！ー！ー！ 何かおもしろいことないかなあ」

別荘を抜け出し誰もいないことを確認すると大声で叫んでみた。これが案外気持ちよく、自分が今まで抑圧された空間で育つってきたことを実感した。

何か物珍しいものはないかと歩いていたが、舗装された道路脇に整然と並ぶ別荘が見えるだけで興味を惹くようなものはなかつた。それでも私には「帰る」という選択肢はなくどんどん進んだ。

やがて舗装された道路が途切れ、農道に変わり辺りは別荘どころか民家すら見えなくなつた。目の前に広がるのは青い空、緑の草原。山の上のほうでは鳥の鳴く声が響いている。

そうしてたどり着いたのが「向日葵畠」だった。

誰かの手入れがされてることは一目瞭然だつた。

雑草はキレイに取り除かれ、向日葵の花は一直線に並んでいた。中へ入ると茎に囲まれ花の先がどうなっているのか良く見えなかつた。思わず「わー、すごいっ！！！」と叫んだ。

大きな花びらは傘の役割を果たしていて、太陽は見えなかつた。それでもこんなに間近で見る向日葵の大きさに感動して空を眺めていた。

以前姉に読んでもらつた絵本に「ひまわりは太陽に恋をしている」というエピソードがあつた。そのときは良くわからなくて姉にどういうことか問い合わせた気がする。

でも今日の前で見ていると、その意味もなんとなくわかる気がする。すべての花が我先にと背伸びをしているのだ。恋しい太陽に少しでも届くように。

その姿が自分に似ていると思った。

両親や兄姉に認めてもらいたくて背伸びしている、でもあの人たちは私ひとりだけを見る事はない。多くの人にとつての太陽であるの人たちは私だけのものではないのだ。

今頃私がいることに誰か気が付いているだろうか。母は私がいなくなつて心配しているだろうか。そう思うと突然笑いがこみ上げてきた。なんて子供らしくない発想だろうか。

「あははははー」

次の瞬間、ガサガサッと花が揺れる音が聞こえてきた。誰かいたのだろうかと思つたが姿は見えなかつたので何かの動物でも迷い込んでいたのだろうと気に留めなかつた。

日が沈みかけた頃、遠くで私を呼ぶ声が聞こえてきた。

ようやく探し出すことができたようだ。最初に私の姿を確認した

のが誰なのかわからなかつたが、その集団の中に母の姿がないことだけはわかつた。結局、こんなときでも人任せなのだと諦めがついた。

別荘ではお祖父さまが心配していたよつで「無事でよかつた」と抱きしめられた。母は私に声をかけることもなくすつと不機嫌な顔をしていた。家に帰つてから怒られたのは母のほうだつたようだ。よほど気にいらなかつたのか、それ以来私を連れて出かけることはなくなつた。

「…キレイね」

「気に入つてくれた？ この間ちょっと散歩してたら見つけた、ずっと部屋にこもつて出てこない結華さんに見せたら喜ぶだらうと思つてね。驚いた？」

驚いた。

いや、ちょっと散歩で見つかるような場所ではないだらうし、そもそも私のため、とか言つ彼が気持ち悪い。昨夜何か変わつたものでも食べたのではないだらうかと疑つてしまつ。そうしていつものごとく心を読まれたようだ。

「今、気持ち悪いとか思つた？ 大丈夫、何も変なもん食べてないから。いたつて正常、いつもどおり。僕もここへ来てちょっと心が広くなつたみたいだよ？ やっぱり都会で人混みにまみれて暮らしてると性格歪むかもね。こんな田舎でのんびり過ごすのも悪くないかも。休暇の延期届け、出してみようかなあ」

「や、やめてください…」

「あはは、冗談だよ。気が済んだり言つて、連れて帰るから」

いつもと違うと調子が狂う。そんな風に笑わないで、それ以上顔を見ていることはできなかつた。

ただ向日葵の花だけを見ていた。その背後から感じる気配はまるで別人のようだった。

私の知っている貴史さんではないような気がする。そもそも私は彼のことをどれほど知っていたらどうか。彼が何を望み、何を欲しているのか。今まで知ろうとすらしなかつた自分。彼に拒絶されていた十数年、もしかしたら拒絶していたのは私のほうだったのかもしれない。

(こまわる、そんな顔しないで…)

優しく微笑まれると、まるで私が意地悪な人になつたような気分になる。いや、そんなことないと思いを改める。最初に攻撃を仕掛けってきたのは彼のほうなのだから。もしかしたら今さらそれを後悔してゐるのだろうか。それとも悪いことをしたと?

余命わずかな私にとってはそれすら、もうどうでもいいことのように思えた。何を聞かされても何をされても私の人生はもう変わらない。時すでに遅し、なのだ。

「…もう、いいわ」

さすがに炎天下の中、長時間いるのは厳しいのか、目の前がクラクラしてきた。このままでは脱水症状で倒れてしまふかもしだれない。一刻も早く部屋に戻らなければ…。

そこまでしか記憶はない。どうやらそのまま氣を失つてしまつたらしく、彼が私を呼ぶ声にも反応できなかつた。どうしようもなく不安な表情で私を見つめていたことを、知ることはできなかつた。

「ねえ、結華ちゃん。本当に家を出るの？ 何も別荘じゃなくても治療できるよね？ それに余命宣告されてからでも何年も生きてる人がいるって聞くし、やっぱり病院でちゃんと治療してもらつたほうがいいんじゃない？」

「…もう、決めたんです」

婚約が解消された今となつては、裕臣さんと私を繋ぐものは何もない、こうやって会つてることはあるべく不謹慎なのだと思つたが、これが最後だと自分に言い聞かせた。

私が裕臣さんに対する想いを告げたことについては深く追求されなかつた。そのことよりも「余命宣告された」という事実のほうが重く圧し掛かつたようで、あれこれと心配された。

「だいたい、そんなことで婚約解消なんて…人をなんだと思っているんだろ？ 貴史はこのこと知つてるの？ ちゃんと相談した？」

「いえ… じのことは両親と… 裕臣さんしか、知りません。貴史さんは婚約解消のこととは知らされたと思いますが理由までは知らないと思います。私も言つつもりはありませんし：彼だって知るつもりはないでしようから。私たちはずっと前から交わることのない道を歩いてたんですね。だからこうなつてよかつたのかもしれません。あのまま何事もなく婚姻が済んでも…きっと私たちはどこかで破綻していくでしようから。元々縁がなかつただけなんです」

「そんなことは…」

そう、すでに諦めていた関係。

修復すると言う以前に、原形すらなかつた私たちの関係は、結局最後まで形作ることはなかつた。

「今まで散々相談に乗つてもらつていたのに…すみません。すべて

は私が悪いんだと思います。もつとちゃんと貴史さんと向き合つていればここまで溝は深くなかったと思いますし… 裕臣さんの優しさに甘えて、彼に何も相談しなかったことも原因だとわかつてます。もつと話し合つていれば… 今になつて思います。もう遅いですけどね…」

裕臣さんはもう何も言わず、私の言つこと黙つて聞いていた。内心どう思つていたかはわからないが最後まで心配そつて、そして悲しい表情で私を見ていた。

貴史さんには言わないでください、と念を押そうと思ったがやめた。何か約束させるということは裕臣さんに負担をかけてしまうことになる。彼が知つたとしても、それは私がいなくなつた後になるだろうと思っていたからかもしれない。

* * *

「良かつた、目覚めた？」

首元がひんやり冷たいと目を開けると、貴史さんがベッド脇で私のことを覗き込んでいた。どうしてここにいるのかわからなかつたが、徐々に記憶が思い出されて何があつたのか整理した。

「…確かに、向田葵を見に出かけて…帰ろうとして、その後…覚えてないわ」

「いきなり意識失うもんだからびっくりしたよ。ちょっと無理させたかな？ 今度はもう少し涼しい時間に散歩しないとね。気をつけよ。じゃあ、僕は自分の部屋に戻つてるから、何かあつたら呼んで」

水を入れ替えていたメイドに声をかけると彼はベッドルームを出ようと腰を浮かせた。その一瞬の動作を見ていた私は、自分でも信じられないような行動に出た。

「…」「…」「…」

立ち上がった彼の腕をとつさに掴んだ。

彼は驚いた表情を見せたが、すぐに「いいよ」と優しく微笑んだ。

この数日間、彼がどうしても嫌なら離れることもできたのに、それでも私はここに居続けた。

彼と同じ空間で、同じ時間を過ごしたのはきっと後悔していたからだ。

拗ねた子供のように、彼に言われたことをずっと根に持つて、彼と歩み寄ろうとしなかつた私の行動に対して。もう遅いと思いながらも彼が何か起こしてくれるのはないかと、どこかで期待しているのかもしれない。悪いのは私？ それとも彼のほう？ もしかしたらそれは「悪いのは私じゃない」と自分の行動を正当化したいだけのことかもしれないけれど。

それでも彼の瞳に、私がどう映っているのか知りたいと思つたのも確かだった。たとえ残された時間が少なくて、私は彼のことをわからたいと思つてしまつたのだ。

ただそばにいるだけの時間が過ぎていった。呼び止めたものの、話すことはなく会話が始まつてもすぐに終わってしまう。質問して返事して終わり、逆も然りだ。今までなら一言も一言も多い嫌味の言い合いだが、それすら出てこないのが不思議だった。

本当は聞きたいことは数え切れないほどあったはずだ。どうしてここへ来たのか、私とことをどう思つて居るのか、私のことをどうまで知つて居るのか。そして貴方の本当の想いは…？

そのどれもが知りたいはずなのに、知つても仕方がないと思えるものばかりで結局何も言い出せないでいた。静かな空間で黙つて過ごすのも案外悪くないと思つていたから余計かもしれないが。

次の日から、私の体調を見ながら向日葵畑へ散歩に行くことになつた。

相変わらず貴史さんは午前中外出をしているのか、部屋で仕事をしているのか、私が遅めに起きていくと会えないことが多かつた。だが、午後にはふたりでアフタヌーンティーを楽しみ、日が沈みかけた頃出かける。夕食の後はふたり何をするわけでもなく、私が寝るまでそばにいてくれる彼。まるで長年そうしてきた夫婦のように自然で、周りから見れば婚約解消した者同士には見えないだろう。いつしか私の心は信じられないくらい穏やかで、何かに満たされていた。

「最近、顔色がいいですねえ。やっぱりそばで支えてくれる人がいると違うってことですか、食事もとれるようになつて良い状態が続いているので私も安心です」

「そうですか？ 私的には何も変わつてないと思いますけど？」

「いやいや、そんな風に」まかしてもダメですよ。貴史さんが来てからずいぶん変わりましたよ、結華さんは。やっぱり私が思ったとおり優しい人ですね」

認めたくはないが、確かに彼は優しくなった。

主治医はなぜか最初から彼に対して好印象を抱いている。最近特に彼を褒めるが、何を言われても受け流すだけだ。しかし私の彼に対する心情は筒抜けのようだ。決まって最後には「治療の効果が出てるから良いことだ」と付け加える。

今回の点滴はさほど苦しくなかつた。気分的なものか体が薬に慣れてしまつたのか、なんとも言えないと主治医は言つた。そもそも新しい薬に変更しようかと提案されたが、それがどうこうことなんか私にはわからなかつた。

「ねえ、先生？」

「何ですか？ 改まって…いつもの結華さんらしくないですねえ」

「…その一言はいらっしゃらないと思いますが。その…彼は私のことをどうの程度知つてるんでしょうか。病気のことといつか…私の寿命について

「そうですねえ、なんとも言えませんね。まったく何も知らないということはないと思いますけど、だからと言つて全部知つているかとなると、疑問ですね。結華さんが何も言わない限り彼も黙つてるんじゃないですか？ 私としても勝手に話すわけにはいかないので、本当のことを知りたければ結華さんが直接聞かないと。私に相談してる暇があつたら聞いてみればいいと思いますが」

そんなことは言われなくてもわかっている。

それができればわざわざ主治医に話したりしない。おそらく彼について知つていることがあるのだろうが話すつもりはないらしい。やはり自分のことは自分でしなければならないと言つことか。

話す機会がなかつたわけではない。きっかけが欲しいと言えばそれまでだが、ここへ来る前の父の言葉が引っかかっていたから余計に話せなかつたのかかもしれない。

* * *

「結華、別荘へ行く前にひとつ言つておくことがある。お前はもう来栖家とは縁の切れた人間だ、仮に貴史君が訪ねてきても眞実を言うことは許されない。彼には彼の人生があるのだから、お前はもうそこには踏み入ってはいけないのだ、わかるね？」

「…はい、わかつてます」

「主治医の言つことはちゃんと聞くよ。」。それと何かあつたら連絡してきなさい」

父が私を見る目に親としての愛情は感じられなかつた。實に事務的に機械を相手に話してゐるのではないかと思つほど無機質なものだつた。

父の頭にあるのは来栖家に迷惑をかけたのではないかという体裁のみ。実際には婚約解消後も両家の取引は問題ないらしい。それに私のことよりも彼のことを気にかけるなんてなんて薄情だらうと改めて思つた。

父に呼び出される前に裕臣さんに会つておいてよかつたと思つ。が、今改めて彼の名前を出したところを見るとそれもすでに知られているのかもしぬないと思つた。

父と会うのはこれが最後になるだろう、家を出たときにそれは感じていた。ここへ戻ることもない、家族と会うこともない、次に対面するとき私はもう動かなくなつてゐる時なのだ。

* * *

お祖父さまが亡くなつてからお祖母さまはすっかり元気がなくなつた。この別荘で雇つていた使用人全員に暇を出し、今では母屋の奥、離れて静かに過ごしている。

おそらく彼は直接離れに会いに行き、別荘へ泊まることの許可を得たのだろう。未だに父が何も言つてこないことを思うと、お祖母さまはこのことを言つていないということになる。だが、離れに人がいらない訳ではない。誰が見ているかわからない状態で、使用者の誰かがうつかり彼のことを口にしたら？ それこそ私はここから連れ出されるかもしれない。

病院になど行く気はない。どこにいてもひとりでいることに変わりないのなら、最期の場所くらい自分で決めたいと思う。今は彼がいるから余計にそつ思つてしまつのかもしれない。

「明日の朝、ここを出るから」

それは唐突だった。

持つっていたスプーンを思わず落としそうになり、慌ててテーブルに置いた。

夕方出かけたときは何も言つてなかつた。いつもと同じようにただ黙つて静かに向日葵の花を見つめていた。それなのになぜ？ いつからそのつもりだつたの？

「…そう、ですか」

そう答えるしかなかつた。

まだ何も話せていない、そう思つたがそれも言葉にはならなかつた。その後はふたりとも無言で、同じ空間にいることをえ苦痛で仕

方がなかつた。夢であつて欲しいといつ気持ちが心の片隅にある」とを、このとあは気付くことができなかつた。

何も考えられなかつた。
ひとりの時間がこんなにも長いなんて、思いもしなかつた。

朝日が覚めると、そこに彼の姿はなく「早々にお帰りになりまし
たよ」と言つたメイドが増らしかつた。元の生活に戻つただけだと
言い聞かせながらも、部屋に戻つてからは外を眺めてばかりいた。
後悔していた。これでもう会うことがないのかと思うと自分の愚
かさに腹が立つていた。どうして意地を張つて何も言わずにいたん
だろう。なぜ一言「もう長くない」と言えなかつたのだろう。言い
訳にしかならないと思つていた。今さら彼が本当のことを知つても
意味がないと決め付けていた。

それがどうだろう？ 彼がいなくなつて真つ先に思つのは「聞け
ばよかつたと」そのことだけ。

「…何してるんだろう？ 私…ばかみたい」

自分のことしか考えなかつた結果がこれなのだ。

傷つきたくなかったから、自分を守るために私は自ら殻の中に閉
じこもつてしまつたのだ。願わくばもう一度彼に会いたい。そして
今度こそ本心を聞いてみたい。しかしそれはもう叶わないだろうと
必死で想いを抑えた。

今頃彼は日常に戻つているだろう。彼にとつてここには非日常であ
り、本当に束の間の休息だつたのだ。それなのに、ずっと一緒にい
る間に錯覚を起こしてしまつた。あの時間が、永遠に続くものだと
思い込んでしまつたのだ。

なんて愚かなんだろう…と自分の浅はかさに思わず笑いがこぼれ

そうになった。

どこかで、ほんの少し好かれているのではないかと自惚れた。

今まで散々嫌味の言い合いをしてきてそれこそ都合のいい話かもしれないが、何かを感じていたことは確かだ。でもそれは思い過ぎだつたらしい。

彼は私のことを思つてここへ来たのではないかもしない。裕臣さんからたまたま話を聞いて、元婚約者を邪険に扱つたまま死なれたくないと思つたのかもしれない。

最期に私に優しくすることで、彼はほんの少しでも優越感に浸り自分は自分のできることをやつて見せたのだと思つたのかもしない。

そこまで思つて自分の性格の悪さに嫌気がさした。
自分を悲観するあまり彼を悪人にして、自分の身を守つとしている。最低の人間だ。

気分を変えようとバルコニーから空を眺めた。

憎らしいほど青い空は眩しいほど輝いていた。太陽の光が恋しいと思つたのはここへ来て初めてではないだろうか。

思わず手を伸ばす、届くはずもない太陽に向かつて。

「…届くわけないのに」

ふと脳裏にあの向日葵の花が浮かんだ。届くはずのない太陽に向かつて必死に伸びようとする花たち。子供の頃その花に自分を重ねたが、それ自体間違いだつたのではないかと思つた。

私は向日葵のように手を伸ばしたことがあるだろうか。最初からすべて諦めていた私は手を差し出すことすらしなかったのではないだろうか。

手に入らないから努力しない？ そもそもそれが私の愚かさの証かもしれない。

普段使いこなすのない呼び出しベルを使つと、慌てた様子のメイドが部屋に入ってきた。無理もない、今までどんなに気分が悪くても耐えて使わなかつたものだ。何があつたのだろうと思うのが普通だろ？ メイドの顔は今までに見たことのないような表情をしていた。

「今すぐ外出許可を取つて、時間がないの、早くっ……！」

「え？ 結華さん、急にどうされたんですか？ ど、とりあえず落ち着いてください、今先生を呼びますから」

普段無表情の彼女が狼狽していた。今はこいつして座つている時間すらもどかしい。

会いに行かなければ…彼に会つてすべて話そう。そして知りたかったことのすべてを聞こづ。もつと早くこいつしていれば、ここまで違うことはなかつたのに。

いくらでも修正する機会はあつたのに、自らそれを潰していく。恐かつたから、再び彼にはつきりと拒絕されるのが恐かつたから。でも今はもう何も失うものはない。すべてをさらけ出すことができるのである気がする。

「結華さん、急に外出したいなんてどうしたんですか？ 夕方の散歩なら許可を出しているでしきう？ それとも家に帰りたい…なんて言つんじやないでしきうね？」

「そうじやありません。行きたいところが…会いたい人がいるんですけど、先生、お願ひです。時間がないんですつ……！」

「その体でどこへ行くつもりですか？ 結華さんはひとりで動ける体じやないんですよ？ 長距離の移動は主治医として認められません。もしものことがあつたりどうするんですか」

「お願いです、ひとりがダメだというなら…誰か付き添いをつけてください。先生っ！…！」

私が何を言つても主治医は首を縦に振ることはしなかつた。夕方まで大人しくしていなさいと、鎮痛剤を打たれた。幸い強いものではなかつたため眠気は弱かつたが、それでも一瞬にして夢の世界に引き込まれた。

目が覚めたのは午後、まだ日が高い時間だった。

フラフラとした足つきでバルコニーへと出た。主治医が言つていた、私はもうひとりで歩くことすらま办らないのだ。手すりにつかり空を見上げながらどうにか立っていた。

「ちょっと、そこから飛び降り…なんてするなよ」

不意に声が聞こえてきて驚いた。振り返るとそこには帰ったはずの彼が扉にもたれかかり微笑んでいた。

夢でも見ているのかと思つた。

そこに立つてゐる彼の姿は昨日までと何ひとつ変わらない。ずっとここにいたような顔をして私のことを見ている。あまりに自然な態度が私を混乱させる。

「や、そんなことしませんっ！…… それより、帰つたんじゃないんですか？ どうしてここに…」

「ちょっと仕事でどうしても出て来いと言われたからね。思つてたより早く終わつて今着いたところだけど、ああ、ついでに休暇の延期届け出してきたからまだ当分ここで世話をなるよ…って、結華さん…？」

ヘタヘタと座り込んでしまった。

どうしてこの人はいつも人を驚かすんだろう。前もつて言つてくれればよさそうなものなのに。いつも言葉少なであいまいな伝え方をする。本人はそれでも悪気はないのだろうが。

「…だつたら、最初からそう言つてください。貴方はどうしてそういうですか？」

「え？ ああ、すぐに戻つてくるつもりだったから言わなかつたんだけど？」

特に悪びれた素振りも見せずさらりと言つてのけた。

いつもそうだった。結納が終わつてから来栖家に出入りするたび、彼の隣に座つていても表情からは何も読み取れなかつた。だからといつて口数が多くない彼は最低限のことしか言わない。

それを聞いて相手がどう解釈するか、きっとそこまでは気にしていないだろう。言わなくても伝わるだろう、もしかしたら私はそん

な風に思われていたのかも知れない。

「貴方はいつだってそうです、どうしていつも肝心なことは言つてくれないんですか？ なんでも勝手に自己完結してしまって…少しは私の気持ちも聞いてください」

「…」「めん」

「謝らないでください。そんなことが聞きたいんじゃないんです、貴方は何を考えてるんですか？ どう思つて、どんな思いでここへ来たんですか？ どうして何も言つてくれないんですか？ なぜいつも本心は隠したまま私の前に現れるんですか…それじゃあ、それだから私だつて本当のことが言えないんです。貴方に何も聞けないんじゃないですか！…！」

気がつけば涙を流していた。

いつもどんなに冷たくされても泣いたことなどなかつた。それはおそらく何も期待していなかつたからだろう。相手に感情をぶつけるほど何かを思つたことはないし、ふたりの間にどんな感情も生まれていなかつたからだ。

でも本当はその感情に気がつかないふりをしていただけなのだと思つ。あの頃の私は素直になれず優しい態度で接してくれる裕臣さんのところに逃げ込んでいたのだ。自分が誰かに好かれている、という安心感が欲しかつたのかもしれない。

だが、もう気付いてしまつた。自分の気持ちに、どうしたいのか、何を求めているのか。彼の本心が知りたい。今ならわかる、私が聞けば彼はちゃんと答えてくれたのだろう、と。本心を隠していたのは私も同じなのだ。

「貴史さん…どうしてここへ来たんですか？」

それは一番知りたいことだつた。

彼は黙つたまま私の顔をじっと見つめていた。言つことをためらつてゐる様にも見える。もしかして裕臣さんに頼まれて渋々来たのだろうか。そんな嫌な予感がよぎる。何を言われても取り乱さないようじようと思つたが、すでに私の心拍数は尋常ではないほどに跳ね上がっている。

無言で向き合つてゐる間、大きく深呼吸した。彼も同じように息を吐き口を開いた。

「そうだね…今さらこんな」と言つて囁々しいかもしれないけど、結華さんにどうしても会いたかったんだ。会つて謝りたかった。今まで僕がしてきたことのすべてを…でもなかなか言い出せなかつた。言つタイミングが見つけ出せなかつたって言えば都合がいい話かな。本当は恐かつたんだ、今さら何謝つてるの？って言われるのが。それに顔を合わせればついついいらぬいと喋つちやう」

謝りたい？

それは何に対してだろ？確かに初めて会つたときに拒絶されたが、そのことについてだろ？か。それ以降は会つてもたいした話はしていないから改めて謝らなければならぬほど悪いことはしないはずだ。どちらかといえば態度が悪かつたのは私のほうで貴史さんに落ち度はないと思う。

「それは…私を認めてない、と言つたことに對してですか？ それとも他にあるんですか？」

「その両方…かな。でも僕は「君のこと」を認めていないと言つた覚えはないよ。あくまで「親の決めた相手」を認めていないだけだ。まあ確かに誤解を招く言い方だよね」

「え？ でもあのときの貴方はそんな言い方では…だつて私は貴方に嫌われてるんだと…初めて会つたとき貴方のことが恐くて、それで逃げ出したんです。貴方は私のことを嫌つてたのではないんです

か？」

今でも忘れられない。

初めて憎しみのこもった表情を田の井当たりにしたからだ。あのとき確かに私は敵意を向けられた。今彼が言つたようなニコアンスでなかつたことだけはわかっているつもりだった。

「そうだね……まず、そこが違うんだ」

それは想定外の台詞だった。てっきり自分を否定されるか、別の優しい言葉をかけられるか、そのどちらかだと思つていたから。

違うって、何が？

貴史さんは「どこから話そつか」とためらいがちに話を始めた。この後私は呆然と彼の話を聞いていた。質問することも返事をすることも忘れて、聞かされたことを理解することに神経をとられた。彼の話が本当なら、私はどんでもない勘違いを起こしていたことになるのだから

自宅を出てから二時間以上経っているだろう。高速道路を下りて閑静な住宅街を抜け、人も疎らな山奥へと入つていった。この山道を抜けると別荘地が広がつている。もう何度も通つた道だ、迷うことないが目的地である「あの」別荘へまつすぐ向かつ氣にはなれなかつた。

おそらく自分は歓迎されないだろう。最悪顔を合わせてもらえない可能性だつてある。そのためにいろいろ保険はかけておいたが果たしてそれがどの程度効果を成すだろうか。

ひとまず叔父が所有する別荘へと向かつた。自分が計画した予定が狂わないことを祈るだけだ。

「貴史さま、待ちしておりました」

「急にお邪魔してすみません、叔父さんたちは今年もここを使つてしまつ? なるべく迷惑がかからないようになりますから」「いえ、お部屋なら十分用意できますし、旦那さまも気を遣われないよう仰つっていましたから。ああ、でもいらつしやるのは今日一日だけでしたね」

「そうだね、僕の予定が狂わなければ…だけだね」

玄関で立ち話もなんだと部屋へ案内された。ここに長く滞在するつもりはないので一番小さい部屋を用意してもらつていた。執事は「申し訳ないから」と言つて広めの部屋を勧めてきたが、それとなくやんわり断つておいた。

ここを使えるようにしておくのはあくまで保険だ。目的地へ行つて「泊められない」と言われたときのために。今日一泊するのも気分を落ちつけたかったからかもしねり。

兄さんに休暇を申し出るとあつたり認められた。おそらくあの話があつたときから自分がそう言い出すことは予想できていたようだ。休暇届を出し仕事を片付け急いで準備してここまで来たが、あれからもう一ヶ月も経っていた。最悪の事態に陥つていなことを祈るだけだ。

専務に昇格した兄さんと顔を合わせるのは久しぶりのことだった。自分の忙しさとは比べ物にならないほど走り回つていて、自己でもその姿を見ることはなかつた。一体、いつ休んでいるのだろうと思ふほどだ。

そんな兄さんが「話があるから」と予定を合わせてきたことに驚いた。自分のほうはビビついても都合がつべ、やつて貰えると翌日専務室へ呼び出された。

「専務室つて案外狭いんだね、まあ文句は言えないよね、ここにだつてすぐに別の人間が座ることになるんだらうし」

そう嫌味を言いながらソファに座つた。秘書が紅茶を持ってきたが兄さんは早々に追い出した。秘書に聞かれたくない話もあるのか？ だったら血で話せばいいのに。それとも何か？ 親にも聞かれたくないことができたのだろうか。

「忙しいといろすまないな、わざわざ来てもらつて」

「忙しいのはそつちだろ？ こつちは気にしてもらわなくて構わないわ。で？ 改まって話つて何？ 義姉さんとなんかあつた、とかじやないだろ？ 揉め事に引っ張られるのは勘弁してくれよ」

「ああ、まあ汐梨は関係ない。そうだな、お前は揉め事が苦手だつたな」

兄さんは言いにくそうに言葉を濁した。なかなか本題に入らうとしないことは見て取れた。義姉さんのことじゃないとすれば何だ？自分には見当がつかなかつた。

「お前…結華ちゃんと最後に会つたのは…いつだ？」

「はあ…？ なんで彼女の名前が出てくるんだよ、もうひとつくに縁切れただろ？」

「いつだ、と聞いてるんだ」

どうやら婚約解消したことを説教するつもりなのかとうござつした。あれに関してはこちら側から言い出したことじやない。自分としては被害者だと思つていた。

「いつつて…婚約破棄される前だから…結構経つてると思ひけど？ いつだつたか正確には覚えてない」

「そうか…」

「そりかって、何？ 説教でもする氣？ あれは向こうが言い出しこんだ、兄さんにとやかく言われる筋合いないと思つけど？」

兄さんは黙り込んでいた。何か言つてくれよ、と思つた矢先「実は」 と重い口調で話し始めた。

「先週結華ちゃんに呼び出されてね、てつきつお前のことと言われると思つていたよ。でも…彼女は別のこと伝えるために俺に会つたんだ。お前、婚約解消の本当の理由、聞いてないだり？」

「なんだよ、本当の理由つて…」

彼女兄さんに言い訳を言つたのかと思つと腹が立つていて。なぜいつも自分に言わないんだろう？ どうしていつも兄さんにばかり相談するのだら？ と。

「それをお前に言つ前にひとつ約束しろ、今から俺が言つことを誰にも言わないと。両親はもちろん、結華ちゃん本人にも、だ」

「…それは話次第だな。内容によつては彼女に会いに行くかもな」「まあいい、お前なら話さないだりつ。彼女なら今別荘にいる、お前も行ったことあるだろ？　叔父さんの別荘からそう遠くないとこにある、あれだ。先週、そこへ移り住むと言つてた」

自分との婚約を勝手に解消しておきながら、別荘暮らしなどといぶんお氣楽なものだ。それを許した両親の神経もいかがなものかと思う。

だが、その理由は自分が考えていたものとは大きく違つていた。

「…彼女は、そう長く生きられないらしい」

何かの「冗談かと思つた。

そんな嘘までついて自分から離れたかつたのかと思つたが、兄さんの顔はいたつて真剣だった。たちの悪い「冗談などではなく、それが真実なんだ」と思い知らされた。

詳しい様子を語つていたが、そのどれも自分の頭には入つてこなかつた。もう関係ないとつていた彼女のことを聞かされて、こんなにも落胆するなど思つてもいなかつたのだ。

まるで時間が止まっているかのような気がした。

兄さんはそう言つたきり何も喋らなくなつた。ここで自分から何も聞かなければ兄さんのほうも言う気がないのだろう。だが、すぐには聞けなかつた。たぶん、知りたいという気持ちともう関係ないという気持ちが入り混じつて、自分でどうしていいのかわからなかつたのだと思う。

時間にすれば数分がとてもなく長い時間に感じられた。

ベッドに横になつていたが気分が落ち着く気配はなかつた。

今頃彼女はどうしているだらうかと考えるが、まったく見当もつかない。医師と看護師が別荘に住み込みで看病していると聞かされたが、肝心の彼女の容態は兄さんも教えてくれなかつた。それだけは自分の目で確かめたほうがいいということなのだろう。

以前の彼女を思い浮かべる。が、思い出せるのはいつも自分を避けるような態度を取り笑わない彼女の顔。その瞳は自分のことなど見ていない、どこか寂しそうな目をしていた。

自分はずいぶん嫌われている、それが長い間心を支配していた。彼女は兄さんに何でも相談していた。それが好意を持っていると気がつくまでそう時間はからなかつた。兄さんと楽しそうに話す彼女を見て自分の存在が疎ましく感じたこともある。

自分の所為で彼女に悲しい想いをさせているのだ、と。だから自分の想いは気付かれてはいけない、だんだんそう考えるようになり彼女と距離を保つことで自分を抑えていた。

「…会えたならなんて言おう」

今さら。

どんな顔をして会いに行けばいいのだらう。

「貴史、婚約相手が決まりそうだつて？」

兄さんはおもしろい話題を持つてきてやつたぞと言わんばかりに話しかけてきた。もちろんそんなものに興味はない。相手がどうこうという問題ではない。小学生相手に縁談話なんてどうかしてると冷静に傍観していたからだ。

「まだわからないよ、何せ相手はまだ産まれてないんだから。そもそも僕はそんなことに興味はないし母さんがどんどん話を進めてるだけだよ」

「そろは言つても今回はかなり有力だろ？　お前もそろそろ覚悟したほうがいいぞ」

「あ、そう。他に用がないなら出て行つてよ、勉強の邪魔だよ」
もう少し話していたそうな兄さんを廊下へ追い出し、本の続きを楽しむこととした。だが、思つていた以上に動搖していたのか、内容は一切頭に入つてこなかつた。

自分への縁談相手は今まで何度も何度か持ち込まれていた。だがどれも実現することはなくそのたびに安堵していた。お互いの家のために婚姻を交わすのだ。肝心の家の状況が変われば話は百八十度違つてくる。そう簡単に相手など決まらないだらうと思つていた。

そんな中持ち込まれたのが今回の話だ。長谷夫人が身ごもつたと云つて、そのときから候補に挙がつていた。おかしな話だ、産

まれてくるかどうかもわからない子との縁談なんて。

だが、無事産まれそそうだと聞かされた母はいそいそと準備し始めた。これで産まってきた子が男の子ならいい笑い話だが、それでもその子が女の子だと言う可能性は高いと見ている。

長谷家は代々女系だ。かなり前から婿を迎えていたが、久しぶりに男の子が産まれたと聞いている。その後すぐに女の子ができたと聞いていたが、それから十年以上経つての懷妊だ。あの家にとつて男の子が産まるのは奇跡に近いものらしい。だから今度も女の子だろうと予想しているらしい。

そういうまくいくものか、と思つていたが後日女の子の誕生を聞かされいよいよかと覚悟した。

長谷結華。それが婚約者の名前だった。

自分から会いに行くつもりはなかつた。それに相手はまだ婚約者の存在を知らないと聞かされていたから勝手に話すわけにもいかない。彼女は産まる前から相手が決まつていると聞かされてどう思うだろうと考へた。自分はまだいい、少なくともこの歳まで好きに生きてこられたから。

ただ彼女は産まれたそのときから嫁ぐ家のことを優先され、教育されるのだ。そう思ふとまだ見ぬ彼女が不憫に思えてきた。きっと彼女も納得はしていないだろう。親の決めた縁談だからと話が勝手に進むなんて認められない、認めたくなかった。

しかし、初めての顔合わせの日彼女は自分の前から逃げ出した。よほど気に入らなかつたのだろう、それから結納まで一度も彼女と会つことはなかつた。

「ああ、貴史君。ずいぶん立派な青年になつたね。今日はよろしく頼むよ、結華は少し緊張してるみたいだからしつかりフォローして

やつてくれ

結納が行われるこの日が一度目の出会いだった。

当主の後ろに立っている彼女に挨拶をしようとしたとき、彼女は自分のことを見るなり無言で頭を下げ、すぐに田を背けた。

彼女からは「話しかけないで」オーラが漂っていて、隣に座つてもなぜか壁を作られているような気がしていた。話しかけると返事はするがそれ以上会話が広がることはなかつた。

「つたく…なんだよ、あの態度」

「珍しいな、貴史がそんなに怒つてゐるのつて」

「彼女だよ、長谷結華。気に入らないんだったら勝手に縁談決めた親に文句言えつての！！！」

「まあまあ、落ち着けって。そのうちあの子も自分の置かれてる立場を理解するだろ。この間まで高校生だった子だ、大目に見てやれよ」

「よ

* * *

今思えば、あの頃兄さんのように寛大な態度がとれれば良かつたのだろう。だがそんな器用なことができるはずもなく会うたびに溝が深くなっていることだけはわかつた。どこかで修正しないと取り返しのつかないことになるとわかつても、自分からは行動できなかつた。

このまま結婚することなんて考へられない、そう思つていた矢先、予想していなかつた台詞を聞かされた。自分を呼び出した父は唐突に、「長谷家との縁談は白紙になつた」とだけ伝えた。

父から理由は聞かされなかつた。ただ事実だけを伝えられ、自分の消化しきれない気持ちをどこにぶつけていいのかわからなく

なっていた。

彼女は承諾したのだろうか。自分との繋がりは切れてしまったのだろうか。会つてもう一度それを確かめたかった。

「じゃあ、また来ます。お邪魔しました
 「いえ、いらっしゃったおもてなしができず…申し訳ありません」

朝食をとつた後車に乗り込み別荘を後にした。昨夜は昔の夢でも見ていたのかあまり眠れなかつた気がする。距離はそう離れていい、寝不足気味の目をこすりながら車を走らせた。

彼女が滞在しているという別荘が見えてきた。人がいるかどうかはわからない。もし誰もいなければ自分は間に合わなかつた、ということになる。

わき道に車を停めて建物を眺めた。しばらくするとバルコニーに人が出てくるのを確認した。それが彼女だとわかるまでそう時間はからなかつた。

思わず笑みがこぼれる。とりあえず第一段階はクリア、といふことになるのだ。すぐに車に乗り込み駐車場へいれると扉のベルを鳴らした。

「来栖さま、お待ちしておりました」

意表をつかれた。

まさか執事が自分のことを知つてるとも思わなかつたし、ここへ来ることも連絡済だと考へてもいなかつたからだ。あの祖母さんも食えないところがある。まさか彼女にそれが伝わつていらないだろうかと質問すると「結華さんは何も知りません」と返ってきた。

兄さんから話を聞かされて真っ先に思ったのは、一刻も早く彼女に会いに行つて誤解を解かなければということだった。

今さら遅いのかもしれないがそれでは自分の気が治まらない。彼女にどう思われても自分が今までしてきたことを謝りたいと思った。そしてずっと後悔していたことを伝えたかった。

そのためにはまず彼女に会いに行かなれば。病院で治療はしないといふ、別荘にいるということは緩和ケアを受けている可能性が高い。早くしなければ自分は一生彼女と会えなくなってしまう。「あらまあ、よく来てくれたわね。ごめんなさいね、皆出払つていて今はわたくししかいないのよ」「いえいえ、お祖母さまにお会いしたくて来たんですから。お構いなく」「ではお茶をたてるわね、こちらへどうぞ」「茶室へ通された。

この日、長谷家には先代の妻である佐夜子夫人だけが残されていた。実はそれを事前に調べ知っていたからわざわざこの田に足を運んだのだが。他の人間がいれば自分が離れに立ち寄ることも夫人と話すこともできないだろう。

目的は世間話をするわけでもなく、お茶を楽しむためでもない。

「ところでお祖母さま、結華さんがおひとりで別荘にいるんですけど……僕もそちらにお邪魔してもいいでしょうか？」できれば彼女を驚かせたいので、このことは誰にも言わないで欲しいんですが」「あら、わざわざわたくしに許可を得なくてもいいのですよ。もう他人ではないのだから遠慮なさらないで。結華もきっと驚くわね」その光景を思い浮かべたのか、夫人はうふふ、と笑った。

ありがとうございます、と頭を下げて長谷家を後にした。どうやら

ら夫人は彼女が病に侵されていることも自分たちの婚約が解消されたことも知らないようだ。そのおかげであつさりと約束を取り付けることができたといえばそれまでだが。

念のため承諾を得たという書類をお願いしたとき怪訝な表情を見せていたが、まだ婚姻前ですものねとあつさりサインしてくれた。

「結華さんでしたらお部屋でお休みになつてると想います」

「ふーん、行つても大丈夫かなあ？」

「…一応、お声はかけますが」

メイドは彼女と相当折り合いが悪いとみた。といつか、無関心といつたほうが正しいかもしない。おそらく期間限定で急ぎよこへ連れてこられたといったところだろう。

「ちょっと待つて。彼女の部屋は後で案内して」

何よりも早く彼女の部屋に向かいたが玄関を入つていく人影が見えたので後回しにすることにした。メイドの表情はさほど変わらなかつたため何を考えているのかわからなかつた。

「先生」

背後から声をかけられたことに驚いたのか返事まで間があつた。無理もない、彼は自分のことを初めて見るだらうしそもそもその存在すら聞かされていないはずだ。

につっこりと笑つて相手の警戒心を解き、ゆつくりと話しかけた。

「…ああ、不躾に呼び止めてすみません。はじめまして、結華の婚約者で来栖と申します。いつも彼女がお世話になつてます、今日もこれからですか？ よろしくお願ひしますね」

「え？ ああ、はい。こちらこそすみません、何も知らないで…失礼しました。そうでしたか、結華さんの婚約者で…ではお見舞いに

？」

初めて見る自分が珍しかったのかじろじろと眺めている、その目は何かを詮索しているようだった。その視線をさらりとかわし「まあ、そんなところです」とその場を去つた。

詳しい病状を知らない自分としては余計なことを言つて墓穴を掘つてはいけない。最小限の言葉にとどめていればあの医師から彼女へそれとなく伝わるだろう。自分のほうから根掘り葉掘り聞き出すのはいかがなものかと思つてはいるだけに彼は何かと役に立つてくれそうだ。

さて、今日一番の正念場はここからだ。

「こいつをうまく乗り切らなければ自分がしてきたことはすべて泡と消える。気を取り直してメイドの後をついていった。何度も扉をノックしているが中から返事はない。仕方ないのでその場で用件を伝えてもらつことにした。その分拒絕される可能性が高くなるがそのときは強行突破しかない。

「結華さん、お客様がお見えです。入つていただいてよろしいですか？」

次の瞬間、中から彼女の声が聞こえてきた。困惑しているように聞こえたがここは気にしている場合ではない。会いたかった、という言葉を飲み込み無理やり扉を開けて部屋の中へ入つていった。

『どうだ？ 結華ちゃんとはちゃんと会えたか？』

「ああ…無事別荘に泊まることができたよ」

『なんだ？ その返事は…まさか、また余計なこと言つたんじゃないだろ？ つたく、それじゃあ何のために行つたのかわからぬいだろ。ほんと手が焼けるな、お前は』

夜になつて兄さんから連絡があつた。

案の定、彼女の顔を見るなり散々嫌味を言つてしまつた。反省してももう遅い、明日以降追い出されないよう気をつけなければいけない。

自分が思い描いていた予定は、あつさりと自分の言動で崩れてしまった。本当ならさりげなく病状のことを聞きだし、婚約解消になつたことも気にしてないと伝え、今までの非礼を謝るつもりだった。だが、彼女のあまりの困惑っぷりに自分が「招かれざる客」だと思い知られつい、売り言葉に買い言葉で終始終わってしまった。

『とりあえず…お前には時間をやる。好きだけそこにいればいい。ただし、ちゃんと仕事はしてもらつさ。資料はメールで送つておいたから。結華ちゃんも体調が優れないだろうから、お前のペースに合わせるなよ』

『…言わぬくてもわかつてゐる。それより…本当のこと、言つていののか？ 兄さんの立場が悪くなるだけなのに…』

『それはもう決めたことだらう？ 今さら何言つてるんだ、俺のことは気にしなくていい。ちゃんと話して、お前のことをわかつてもらえ。いいな』

そう言つと一方的に電話を切つた。兄さんもこのことばかりに時

間を割けないので。一日でも早く彼女に本当のことを話して報告したい。それが自分の、兄さんのためになるのだから。

「長く生きられないって…どういうことだよ」

彼女のことは何も知らされていなかつた。婚約が解消されたことも母から言われ、理由を聞いたが教えてはくれなかつた。この縁談に一番乗り気だつた母の態度の変わりように驚きもした。

「ガンだそうだよ、しかもかなり進行が早く手術はできない状態だそうだ。別荘でゆっくり治療するつもりなんだ」

「そんな…」

今さら事実を知つて何になるのだろうと思つた。

兄さんの意図もわからぬ。このことを自分に告げたからと言つて何か変わるとでも思つているのだろうか？ 最初から自分たちには縁がなかつたのだ。病気になつたのはきっかけで、どんな形でもいずれ破談になつていたと思つ。

「彼女は…兄さんには相談するんだな。結局、彼女にとつて必要なのは兄さんだけだつたんだ。ほんとずいぶん嫌われたもんだよ。まあ、婚約解消の理由がわかつて清々したよ。あのまま何も知らされてなかつたら一方的に断られたと思って、腹立てただろうし。これですつきりしたよ」

それなら仕方がないと思えてきた。恋人同士でお互いが望んでいる結婚ならともかく、家同士で決めた話だ。相手側から断りの話がなくても彼女の病氣が明るみになたところで断るだろ。幼い頃から何度も聞かされた「今回は縁がなかつた」と、話は片付けられてしまうのだ。

母のあの態度の変化も納得だ。今頃代わりの相手を躍起になつて

探していくことだろう。せいぜい困ればいい、たまには思つよつてならないことがあると知つても罰は当たらない。

「待て、貴史。まだ話は終わっていない」

部屋を出て行こうとしたところ呼び止められた。自分としてはもう用はないものと思っていただけに驚いた。これ以上何を話すことがあるのでだろう？ 理由を聞けば自分としては彼女のことば一田も早く忘れててしまいたい。形だけの婚約者、彼女だってそんな過去は思い出したくもないだろう。

兄さんの呼び止めに応じず、乱暴に扉を閉めて部屋を出た。エレベーターに乗っている間も仕事に戻つてからも彼女のことが頭から離れなかつたが、無理やり追い出し忘れようと違うことに没頭した。

* * *

寝ようと思つてベッドに入つてみたが、眠気が襲つてくる気配がなく時間を持て余していた。昼間治療をした彼女の様子が気になつて仕方がないこともあるだろう。

こんな夜遅くに訪ねねばまた嫌な顔をされるかもしねり、そう思いながらも足は自然と彼女の部屋に向かつていた。

何度も扉をノックしてみたが中から返事はなかつた。もう寝ているのだろうかとドアノブに手をかけるとあっさり開いた。いけないとは思いつつもなぜか引き返すことができなかつた。

(…へタすりや、訴えられるな)

ベッドルームからは僅かな光が漏れていた。そこでも念のためノックしてみたがやはり反応がない。こうなると湧きあがつてくるのは不安と焦りだ。勢いで部屋の中へ入つた。

目に映つた光景は彼女の寝顔だつた。だがホッとしたのもつかの間、彼女は突然起き上がりベッド脇に頭を下げた。苦しそうな嗚咽が漏れたかと思うと、そばにあつた水に手を伸ばし一口一口飲んだ後再びベッドに潜りこんだ。

どうやら自分がいることに気が付いていないらしい。おそらく気分が優れないためそれどころではないのだろう。一人掛け用のイスを寄せて彼女の顔を覗き込むようにして座つた。

苦しいのだろうか、息遣いが荒い氣がする。灯りが小さいため顔色まではわからないがかなり辛そうに見える。何度も寝返りをする彼女の髪をそっと撫で、タオルでその顔を拭つていった。弱々しく呼吸をする彼女のことが愛しく感じた。

もつと早く、こうしていれば…そんな後悔ばかりが募り、できることならやり直したいと考えていた。今こうして手を握っている間はそれが可能なのではないかという錯覚に陥つっていた。

翌日、彼女にどう顔を会わせようか迷っていたがどうやら取り越し苦労のようだった。朝食はひとりで、と言わされたので仕方なく従つたが昼食の席にも彼女は現れなかつた。

「結華さんなら、気分が優れないとかで…今主治医の方に診てもらつています」

容態が悪化したのかと思われたが、実はそうではないらしい。薬の副作用で熱を出し寝込んでいるだけのようだ。しかもこれはいつも引き起こす副作用のようで、メイドはいたつて平然とした表情で「それが何か?」と言わんばかりの態度だつた。

一日もすれば良くなるだるうと聞かされたので、とりあえずは安心した。が、それまで彼女と会うことはできない。今のうちにできるだけ仕事を片付けてしまおうと用意された自分の部屋に戻つた。
「来栖さま、お食事の用意ができました」

「これが片付いたら行きます」

扉の外にいるはずのメイドから返事はなかつた。どうやらよほど嫌われているらしい。もしかしたら自分は思つてはいる以上に女性に好かれないのでだろうか。

彼女の誤解を解く前に、使用人と打ち解けるほうが先なのではないか。ここには長くいる予定だ。あまり険悪な状態は好ましくないだろう。

「よかつたら一緒に食事しない?」

扉を開けメイドの後姿に声をかけた。驚いたのか無言で自分の顔をじつと見てはいた。だがすぐに「禁止されていますので」と短く答えて廊下から立ち去つとした。

「じゃあ、ここに持つてきて。あんな広いダイニングでひとり食事

するには嫌だからね、頼んだよ」

「…かしこまりました」

手のかかる男だと思われただろう。無表情だがそれくらいは読み取れた。正直、佐夜子夫人の人選ミスだなと思つた。あれでは世話をしてもうつっている彼女がかわいそうだ。

部屋はとりあえずベッドルームがあればいいと伝えておいたが「そういうわけにはいきません」と執事が気を利かしてくれた。そのおかげで仕事をしたり食事をすることができるのだが。

「食後のコーヒーはブラックで入れてくるかな」

あまり気が進まなかつたが、メイドを部屋に残したまま食事をすることにした。途中何か話しかけられたりするだらうかと待つていたが、食器を片付けたり水を入れたりと、仕事に徹底していた。

態度はいかがなものかと思うが、まあ仕事はできるらしい。終始無言で部屋は食器の音だけが響いていた。やはり自分から話さなければ何も変わらないようだ。

「君、名前なんていつの?」
「この仕事は初めて? 以前はどうこ勤めてたの?」

よくよく考えれば不躾な質問だ。こたえる気がなければ黙つているだらうと思ったが、予想に反してメイドは口を開いた。

「澤村真帆さわむらまほとあります。この仕事はここが初めてです。なにかお気に召さないことがありますか? 不手際がありましたらおっしゃつてください」

「いや、そんなことは言つてないよ。そりが、初めてなんだね。仕事はちゃんとできるし問題ないんじやないかな? ちょっと冷たい気がするけど」

「冷たい? 私が? どなたに対してもうしあつてるのですか?」

どうやら自覚はないらしい。メイドの仕事が初めてで、おまけに

結華さんと面識がないのだからあの態度も仕方がないのか。彼女は仕事と割り切つて、ただ言われたことをそのまま実行しているだけなのだ。

佐夜子夫人はあえてそういう人物を選んだのだろうか？　いや夫人は結華さんの病気のことを知らないはずだ。では彼女を雇つた人物は当主の宗仁社長か。だとすればこの人選にも納得がいく。おそらくここに集められた人間は結華さんの最期を看取るために集められたのだ。

そのため情にほだされやすい人間はふるい落とされたのだろう。彼女の苦しむ姿を見ても「自分の仕事はここまで」と割り切つていなければ体がもたない。

「僕に対してもうちょっと自然に接してくれていいんだよ？　君の雇い主は長谷家の当主であつて僕ではないからね。結華さんが寝込んでいる間はすることも少ないんじょ？　だったら話し相手にくらいなつてもらつても構わないよね？」

「…」

「とりあえず結華さんの体調が戻るまで食事はここに持つてきもらつていいかな？　で、君は僕の話し相手になる。ああ、それと。食後はコーヒーをブラックで、後夜食の用意をしてもらつても構わないかな？　メニューはシェフに任せると

「…かしこまりました」

渋々といった感じではあつたがメイドは了承した。

まだ明日も彼女の容態は変わらないだろう。担当の看護師に一応聞いてみたが熱が下がらない限り起き上がりがないだろうし、抵抗力が落ちるためしばらくは安静にしておいたほうがいいと言われた。

今のうちにしておかなければならぬことがある。ここへ来た目的はもうひとつある。明日の午前中はそれに時間を費やすことにしよう。午後からはまた会社から会議報告や資料が送り込まれてくる。

周辺の地図を見ながら明日の予定とルートを確認した。

「昼食は用意してもらわなくともいいです。外で済ませてきますから」

車に乗り込み昨夜見た地図を再確認した。徒歩で行けない距離ではないが、どこへ行っているのか勘ぐられないようにするため、あえて車を走らせた。

目的地に着くとすでに先方は待っていた。急いで車を下りると「お待たせしてすみません」と頭を下げた。日に焼けた老人は実年齢より若く見えた。

「そろそろお見えになる頃だと聞いていましたので。なんとか間に合いそうです」

「そうですか、兄が無理を言つたのではありませんか？」突然言い出したと聞きましたから

「いや、こちらもできないうことは引き受けませんよ。では案内いたしましょう」

老人は岩城^{いわじ}と言つ。この辺りの地主で別荘が立ち並ぶ以前から住んでいる。歩きながら「この辺りも昔とは変わってしまって」と思い出話を聞かせてくれた。高度経済成長期には今の倍以上の別荘があつたという。時代の流れで無人の別荘が増え、それに伴い人口も減り老人ばかりが残つてしまつたと、自分たちの状況を自嘲氣味に話した。

「ひまわり畑？」

「ああ、そうだ」

彼女の別荘へ行くと決まってから兄さんに呼び出された。また説教されるのかと思って来てみれば聞いたことのない場所を聞かされた。あの辺りにそんな場所あつただろうかと記憶を巡らす。だが特に思い当たることはなかつた。それでも兄さんは当然知つてゐるかのように話を進める。

「場所はこの地図でわかるだろう。結華ちゃんの体調を見て連れて行つてやれ、お前が行く頃にはちょうど良い頃合だろうからな」「ちょ、ちょっと待つてよ、兄さん。なんでいきなりひまわり畑なんだよ？ そんなとこに連れて行つて何があるのかよ」

そこまで言つて知らなかつたのか、と改めて説明された。自分の知らないことでも兄さんは知つてゐる。相変わらずだなと思う反面、自分との差がどこにあるのか腹立たしいときもある。だが、それも育てられ方の違いの所為だらう。兄さんは立場上、知らないことがあつてはいけないので。

「別荘地の奥に岩城家が管理する土地があるのは知つてゐるな？ その一角に向日葵畑があつたんだ。昔は花祭りとかで季節ごとにいろんな花を育て、観光客を呼んでしたらしい。俺たちが子供の頃はその祭りがまだ残つていたはずだ。時代とともに下火になつて今では趣味程度に花を育てているそうだ」

「で、そこに何の意味があるんだよ」

「……話は最後まで聞け。結華ちゃんは子供の頃、その向日葵畑に行つてゐる。偶然見つけたものだらうが、相当気に入つてたようだ。あの別荘に出入りしなくなつてからは見てないだらうから、連れていつてやれば喜ぶだらう。きっと今は治療の毎日だらうから、気分転換くらいにはなるだらう？」

そう語る兄さんは自分のことなど見ていないようだつた。本当に彼女のことcoli想い可愛がつてきた証拠だ。義姉さんがこれを聞いた

うどう思うだらうかと心配するが、兄さんのことだからいつまく立ち回るのだろう。

どうして彼女の相手が兄さんではなかつたのだろうと考えるときがある。そうであれば最初から誰も傷つかなくともよかつたと思う。彼女が悲しい想いをすることもなかつただらう。

「でも今は趣味程度つて…思い出と違つてがっかりするかもしだいだろ?」

「ああ、だから岩城氏には連絡してある。今年だけは当時の向日葵畑を再現してくれるよう頼んであるからまあ心配ないだらう。念のため一度下見には行つて欲しいけどな」

どこまでも準備は完璧だ。自分が心配する隙など微塵も見せない。結局自分は兄さんの描いた道をただ歩くだけなのだろうか。彼女に会いに行つて何かが変わるのだろうか。

自分には自信がなかつた。

彼女に会いたいと思う気持ちが強くなればなるほど、拒絶されたときのことを考えてしまい前に進めない。ただ今行かなければ確実に後悔することだけはわかっている。

だから行つてからのことはすべて自分で決めたかった。だが彼女のことを何もわかつていらない自分にできることは少なく結局兄さんに頼ることになつてしまつ。一度だつて彼女と向き合つていない証拠だ。

「これが当時の写真だ」

広大な敷地には一面、鮮やかな黄色のひまわりが咲いていた。これが彼女は幼い日に見ていたのか。その風景と小さな彼女が重なり、心が洗われるような気がした。

「兄さんは行ったことあるの？」

「…ああ、一度だけ行ったことがある。初めて結華ちゃんを見た場所だ」

岩城氏は歩きなれた様子で前をどんどん進んでいた。

さすがに外になれない自分には少々きつい。降り注ぐ太陽の熱で汗ばんでいるのがわかる。たまには運動でもしておかないとまずいなと思った。

時間にしてみればそう長くはない。車を降りて十分、十五分といふところだろう。別荘から歩いたとしても三十分程度とみている。午前中は気温が上がる一方のため彼女を連れてくるわけにはいかない。やはり一度下見に来ていて良かつた。

「着きましたよ」

そう言われて顔を上げた。

広い田畠の真ん中に突如現れた黄色いひまわり。これから太陽の光を思う存分浴び大輪の花を咲かせるのだろう。兄さんに見せてもらつた写真と何ひとつ変わらない風景が広がつていた。

それを見たときの彼女の姿を想像してみた。たぶんそのときに初めて彼女の喜ぶ顔を見ることになるのだろうと思うとなぜだか嬉しくなつた。

自然の花をこんなにも見たことは今まで一度もなかつたようだと思つ。会社や自宅に飾られている花を横目に見ることはあつてもじつくりと鑑賞したことはない。多くは造花であり美しいものではあるのだろうが、それ以上は何も感じない。

だが、今は違う。田の前の花には生命力を感じるし力強さと優しさを感じ取ることができる。彼女に早く見せたいと思う。自分だけが見ているなどもつたいないと思つてしまふほど惹かれた。

「一週間も経てば見頃になるでしょう。一ヶ月程度は楽しめると思いますよ」

今はまだ満開ではないといつ。これでも十分キレイだと思うが育ててている本人が言うのだからそつなのだろう。できれば一番きれいな状態を見せてやりたい。

岩城氏に礼を言つてその場を後にした。車の中でどうやって彼女を誘おうか考へてゐる自分が可笑しかつた。今まで考えもしなかつたことだ、考へる必要がなかつたからと言つたほうが正しいかもしない。

自分の意思で会いたいと思つたのは一度だけ、最初の顔合わせのときだ。それ以降は個人の意思で会う、ということはなかつたようだ。必要だから会う、家に来てもらうといつことがほとんどだつたのだ。婚約していくにも関わらずふたりでどこかに出かけたことはないし、誘つたことももちろんない。恋人同士ではなかつた関係、それが何よりも問題だつたのだ。

別荘に帰つてすぐに彼女のことを尋ねたがまだ部屋で休んでいる

と言われた。熱は少し下がつたらしいがまだ安静にしているほうがいいと、主治医が判断したそうだ。

ああ、そうだ。彼女を誘う前に断りを入れなければならぬのだ。

「真帆さん、先生は部屋にいるのかな？ ちょっと話があるんだけど」

「今製薬会社のかたがお見えでするのでお会いになるのは無理だと思います。伝言はしておきますので時間が決まりましたらお知らせいたします」

「…そう、ありがと」

部屋の窓から外を眺めると見覚えのある会社名が印字された車が止まっていた。来栖グループの傘下にある製薬会社だ。薬の補充に来ただけかと思ったが、その社用車の横に見慣れない車が止まっているのが見えた。担当の営業が来ているだけではないのか？

様子を伺うように覗き込んでいると外に出てくる人の気配を感じた。じつと見てみると営業担当と見られる小柄な男といかにもエリートといった風の男が出てきた。その後ろから出てきた姿を見て一瞬戸惑つた。が、先に体が動いていて気が付くと一階まで下りていった。

「…由紀恵、どうしてここに…？」

呼び止められて彼女はゆっくりと振り返った。

同行していたふたりの男に「先に行って」と言つてこりと笑いながら自分に近づいてきた。そして久しぶり、と頭を下げた。

「ずいぶん驚いた顔してるわね。あたしがここにいるのがそんなに不思議？」これでも一応社員なのよ

「ああ、そつなんだけど…現場を回るような立場じゃないだろ？」

「失礼な言い方ね、外に出るのだけて時と場合によるわ。今回は特別かしら？ 大事なクライアントが長谷家のお嬢様ですもの、他人に任せることにはいかないでしょ？」

言いながら一階の窓を眺めた。今はまだ休んでいる結華の部屋だ。立ち話もどうかと思い部屋に案内した。向かい合わせに座ると不思議な感じがする。まさかこんなところで再会するなど思つてもみなかつたことだ。

滝澤由紀恵は幼なじみもあり、結華との婚約が決まるまでは彼女が候補に上がっていた。当時タキザワ製薬は国内でもトップメーカーであり業績も好調だった。だが、バブル崩壊と同時に負債が膨らみ、来栖グループが救済を申し出た。

立て直しには成功したものの、来栖グループの傘下に入ることになつた滝澤家との縁談が進むわけもなく、彼女は候補から消えていた。子供心に「大人の事情」というものを知つてしまつたのだ。

「で、あなたはどうしてこんなところにいるのかしら？ 婚約は白紙になつた、って聞いたけど？ 今さら彼女のお見舞い？ 何も知らなかつたというのにずいぶん思い切つた行動に出たわね」

「…いいだろ、別に」

「そう？ まさしきめ裕臣さんの入れ知恵つてどこかしら。それで？ 彼女にはもう会つたの？ 部屋まで用意されてるんだから会つてるわよね。それにしてもあなたもずいぶん身勝手な人ね、少しは相手の気持ちを考えてみたらどうなの？」

その笑顔をほうりはらに嫌な言い方をする。どうやら自分の状況は筒抜けのようだ。仕事上兄さんとよく会つているからそのときにも聞いたのだろう。こちらから「うー」とは何もない、彼女は知つていながらそんな言い方をするのだ。

「僕だつて勢いで来たわけじゃないか、ちやんと考かんえてる。彼女の体調が良くなつたらいろいろ話はなすと思おもってるし、しばらくは休みをもらつてるからこここにいるつもりだ」

「ここへ来るまでかなり時間を要した。その間に気持ちが変わることもなかつたし、時間が経てば経つほど会いたくて仕方がなかつた。だから他人にとやかく言いわれる筋合あねあわせいはないと思おもっていた。だが、彼女からは溜め息と一緒に落胆おちでんしたような言葉ごんばが出てきた。

「その程度なら、今すぐ帰かつたほうがいいわ」

彼女の表情から笑顔は消えていた。まますぐに自分を見つめる視線しじんがなぜか痛いたいほど突つき刺さつた。

夜になつてまた彼女は熱を出したと聞かされた。仕方なくひとりで食事をしているとメイドの真帆が珍しく話しかけてきた。

「昼間の方とはお知り合いなのですか？」

「え？　ああ、幼なじみなんだよ。とは言つても会うのは久しぶりだつたんだけどね。まさかこんなところで会つとは思つてなかつたから驚いたけど…それがどうかした？」

「いえ、初めて来られた方なのでどういう方なのか思いまして」

彼女の言葉に引っかかった。由紀恵は「大切なクライアントだから他人に任せられない」と言つていたはずだ。だが、今まで一度も顔を出していくないとなると話が違つてくる。やはりわざわざここへ来たのだ、自分のいるときに。でもどうしてだろう？

昼間の話を思い出していた。彼女はわざわざここへ結華のことを言いに来たのだ。それも自分の意思ではないだらう。誰かに指示されて、となればひとりしかいない。

「由紀恵にそんなこと言われる筋合い、ないと思うけど？」

「そうかしら？　あなたも医療に従事するものならもつと考えてもいいはずよ？　とは言つても無理かしらね、書類ばかり相手にして肝心の人の事は他人任せですのもね」

反論はできなかつた。確かに彼女の言つとおり自分は医療に携わつてゐるという実感がない。いつも目にするのは書類のみ。企画書と数字の羅列を見比べる日々だ。製薬会社の人間はまだ大学や病院を回つたりする分人と接しているといえるだろう。それに患者を目

の当たりにすることも多々ある。

「あなたは自分の都合だけを考えてここにいるのよ。彼女の気持ちなんて考えないでね。自己満足のためだけに来たのだったら今うちに帰つたほうがお互い傷つかないで済むの。だつてそうでしょう？ 彼女の命は限られてるのよ。中途半端に優しくしてどうするの？ それあなたは気が済んだら帰るの？」

ハツとした。

確かに休暇は取つた。だがそれも一ヶ月程度だ。彼女に自分の気持ちをぶつけて満足した後、どうするつもりだつたのだろう。実際そこまでのことは考えていなかつた。由紀恵に言われたとおりだ。彼女には残された時間が少ない。ここで静かに穏やかに過ごそうとしている彼女に波風を立てたのは自分だ。

「…厳しいこと言つようだけど、彼女を最期まで見る覚悟がないならここへ来るべきではないのよ」

* * *

翌朝、やはり結華の容態はよくならなかつた。

改めて自分の考えの浅はかさに気付かされた。彼女の病状を軽く考えていたわけではないが、元気な彼女の姿を見たためかどこかで「すぐに良くなるだろう」と思つていたのかもしれない。

仕事はまだかなり残つていた。朝メールを開くと兄さんからの指示はいつも以上に入つていたし資料の添付も多かつた。だがどうにも手につかない。朝食を済ませ車に乗り込んだ。

なぜか急に見たくなつたのだ。大きく咲くひまわりの花を。

車を止めシートを倒し窓の外に見える花を見ていた。とても静かだ、聞こえてくるのはせみの鳴き声と風の音。世間から切り離されたような空間で自分自身と向き合っていた。

由紀恵はおそらく兄さんに頼まれてここへ来たのだらう。自分が一ヶ月程度しか休暇を取らなかつたことに対して不満を漏らしていた。その時点で兄さんは自分の考えの甘さに気が付いていたのだろう。もっと長く休んでもいいと言われたが仕事を理由に断つた。それが妥当な選択だと思い込んでいたのだ。

ところがどうだらう。自分の選択は間違つていたことに気が付いた。このままではいけない、何も変わらない。もう一度と彼女を苦しめたくないと思つて来たのに、自分はどうも成長していない。

覚悟が必要だつた。

すべてを背負つ覚悟が。大切なものを一度と手離さないために。

ひまわりの花と同じように空を眺めた。自分の手には届かないと諦めていた彼女。今もなおその手は遠い。それでも、自分もあるのひまわりと同じように背伸びをしようと思つ。

彼女を最期まで守るために。届くことはなくともせめて近くまでいけるように。やつ胸に刻んでその場を後にした。

「ああ、先生？ ちよづき良かつた。今お時間よろしくですか？」

車を下りて玄関を入るつとしたところ主治医に偶然出くわした。どこかへ出かけるのだろうか、いつも白衣姿ではなく普段着だ。帰つてくるのがもう少し遅ければ入れ違いになつていただろう。

「これからランチにでかけようと思つてたんですが… よければ一緒にどうですか？ 無理にとは言いませんが」

「そうですね、それもいいですね。先生に話したいことがあります
たし、ここより外のほうが都合がいいかもしませんからね」

彼女のことは診ていなくて大丈夫なのだろうかと思つたが、聞く
より早く「今は状態が落ち着いてますので」と特に心配はいらない
ようだつた。看護師がそばについているから何かあれば連絡が入る
ようになつてゐるらしい。そのためそつ遠くには行けませんが、と
付け加えられた。

自分の車に乗り込もうとしたとき「乗りますか?」と言われた
がやんわり断つた。だが駐車場が広くないだの、一台のまづがいい
だの言われ仕方なく助手席に座ることになつた。

「それで、私に話つて何でしちゃう? 質問によつてはお答えできな
いこともありますが」

彼女の病状については一切答えないという意味だつ。兄さんか
らある程度聞いていたためわざわざ質問する必要はない。話とい
うよりお願ひといったほうが正しいかもしれないと言つて、主治医は
予想していなかつたのか首を傾げた。

彼女を連れて行きたいところがある、そう切り出すと主治医は一瞬表情を曇らせた。どうやら自分は難題をふっかけたらしい。慌てて言い直した。

「連れて行きたいと言つても散歩程度です。そうですね、歩いて三十分ぐらいなんですが。何も今すぐに、とは言いません。容態が落ち着いてる時だけでいいんです。どうでしょつか？」

「…そうですか。来栖さん、あなたは結華さんの病状をどのよつて理解していらっしゃるのですか？」

自分が質問したのに、逆に質問で返されて困惑した。

余命短いことは知つている。だが、それ以外に自分は何を知つているのだろう？　ふと夜中に苦しむ彼女の姿が思い出された。最初ここへ来たときに会つた彼女とは別人のように弱々しい姿。今もなおベッドから出られない彼女の容態が落ち着くなんて有り得るのだろうか。

黙つているとそれが返事だと思つたのか、主治医は小さな溜め息を漏らしながら話を続けた。

「結華さんには、ひとりで歩いてどこかへ行けるほどの体力は残されていません。三十分の散歩も彼女にとっては相当負担がかかります。ただ…車椅子が部屋に置いてありますので、それに乗つてとうなら承諾しても構いません。しかしそれでも大丈夫だという保障はありません。もし結華さんが倒れたり容態が悪くなつたとき、あなたには正しい対処をしてもらわなければならないんです。そこまで責任を持てますか？　彼女を守る自信がありますか？」

昨日、由紀恵に言われたことがフラッシュバックした。

主治医が言つていいことはもつともで、ここでも自分の覚悟が試されているのだと思った。でももう迷いはない。主治医の顔をまつすぐ見て「覚悟はできています」と短く答えた。

自分の気持ちが伝わったのだろうか、後で看護師に説明させますと言つたきりその話題は終わった。承諾を得られた安心感が心を満たしていた。

だが、当の彼女は一向に良くなることがなく自分でも苛立つているのがわかつた。もう間もなく見頃を迎えるであろうひまわりの花。早く見せてあげたいと焦るばかりだ。だからと言ってただ待つているだけでは何も変わらない。彼女と一緒にいられない時間は仕事と看護についての勉強をした。

「え？ 本当に？」

夜食を持って来た真帆が何気なく発した言葉に反応した。メイドは最近になってようやく自分から話し出すようになり、こちらが何も聞かなくても彼女の情報を教えてくれるようになった。

「ええ、今日先生がおしゃつてましたから。明日ぐらにから食事ができるようになるだらシーフに伝えておいてと言われました。そろそろ落ち着いてくる頃ではないですか。以前も熱を出したことがありましたがそのときと同じことを聞かされましたから」

今夜は熱が出ていないといつ。主治医によればこのままいけば大丈夫だろうという見解だそうだ。どうやら血液検査の結果も問題無しとしているらしい。

長かつたがようやく彼女と再度対面できる日が来るのだ。今度こそ失敗はできない。どんなに迷惑がられても一緒に過ごすことから始めなければ。嫌な顔をされても無言でもいい、ただ彼女と同じ空

間にいたい。前のような壁は作らずに。

翌日、彼女が寝室から出られるようになつたと聞き仕事もそこそこに部屋を飛び出した。気持ちが抑えられる自信がなかつたが、彼女の部屋に向かう足取りは軽かつた。

視界に入った彼女はまだ顔色が優れなかつたが、食事をしているのを見て安堵した。自分がまだいることに驚いているようだつたが構いはしない。一ヶ月の休暇をもらつてているということも伝えたが、今すぐ帰れとは言われなかつた。だが、やはり兄さんことを気にしているらしい。

おそらく自分がここにいるといふことが誰から聞かされたのか考へてゐるはずだつた。だがいくら考えても兄さんしか出てこないはずだ。信頼していたからこそ彼女は病気のことを打ち明けただろうに、それが弟である自分の耳に入つたのは予想外だつただろう。

「ところで貴史さん…私がここにいると、誰から聞いたんですか？このことはごく僅かな人しか知らないはずですが」

「え？ ああ、それはまあ企業秘密ってことで。こう見えて僕は結構広いネットワーク持つてるんだよ？ あまり見くびらないで欲しいなあ」

「そうですか…近しい人から聞いたわけではないんですね？」

これに対しては肯定も否定もしなかつた。

彼女は知つていてあえてこんな風に聞いたのだ。自分に話した兄さんのことをどう思つているのだろうか。それとも自分が無理に聞き出した、と思つてゐるのではないか。

まだ本当のことを言つには時期が早い。彼女の心を開き打ち解けてから出ないと否定されて終わつてしまつ。それだけはどうしても避けたい。

* * *

「…兄さん、今何て言つた？」

一瞬聞き間違えたかと思うほどの衝撃を受けた。まさかそんなはずないと信じたい自分がいる。だが兄さんは淡々と話を進めた。

「結華ちゃんを初めて見たとき、言葉にはできない感情が生まれたよ。こんな一目惚れみたいなのが存在するなんて思いもしなかったよ。俺にはもう汐梨という決まった相手がいた、だから誰かを好きになつても変えられることはできなかつたんだ。でも自分の気持ちに嘘はつけない。叶うことはなくともそつと彼女のことを持つて過ごう」と決めたんだ」

自分の田には仲睦まじい兄さんと義姉さん。自分もあんな風になつて誰かを幸せにしたいと思っていた。理想のふたりだと思っていた。だが、当の兄さんは心に別の人を想つていたんだ。それが自分の元婚約者だなんて笑い話にもならない。

運命はなんて残酷なんだらう。

想い合っている同士が一緒にいられないなんて、いや実際自分と彼女が婚姻を済ませていたらもつと残酷な日常が待っていたに違いない。だが、兄さんは自分が考えていることとは違うことを話し始めた。

「俺は…本当は結華ちゃんから愛情をもらひべき人間ではなかつたんだ。それなのに彼女から十分すぎるほどの気持ちをもらつた。本來ならお前が受けるべき愛情を、な」

愛情をもらひべきでない？

どういつ意味かわからなかつた。彼女が誰を想うかは自由なはずだし、それを喜んでこそ申し訳なく思うのはお門違いだと思つた。よほど自分は不思議そうな顔をしていたのだろう、兄さんは小さく笑うと「あの日」のことを静かに話し始めた。

* * *

その日の夜、彼女と無理に食事を一緒ことなる約束はしたもの、何を話していくのかわからず終始黙つたままだつた。このままではいけないと思いながらも会話が見つからない。まさか体調のことを聞くわけにもいかず黙々と食べ続けた。

彼女のほうはそう食欲もなくつまらなさそうな表情で俯いてた。だが、自分が食べ終わるまで席を立つことはなかつたので、完全に拒絶されているわけではないんだなどどこかで安心していた。

「…」の食事はお口に合いますか？

「え？ ああ、とてもおいしく頂いているよ。みみつと味付けが薄い気がするけど、結華さんのついでに作ってもらってるからね、贅沢は言えないよ」

「いえ、それならシーフに伝えさせます。遠慮なさらないでください」

気にかけてもらえていたと思つた嬉しかった。だがどう返事していいのかわからず黙つていると執事を呼び寄せ何か話していた。なぜ一言「ありがとう」が言えなかつたのか、この日寝るまで後悔していました。

彼女の夜は早い。食欲がないためか長時間起きていることが辛いのだろう。仕事が片付き少し話し相手になつてもうおとと部屋を訪ねても返事がないことがほとんどだつた。

ベッドに横たわる彼女の顔をもう何度見ただらう。

こんなに近くにいるのに何も知らない。何もわかり合えていない。会話の糸口が見えず黙つて食事をしているときも彼女のまづから話しかけられた。慎重になればなるほど言葉が出ない。

本心をさらけ出すのが恐いのだろうか。自分はずつと壁を作つて彼女と接してきた。その内側を見せて彼女はどう反應するだらう？

「結華さん、僕はここにいていいんですか…？」

返事が返つてくるはずもなく、眠つている彼女の手を握りながら自問自答した。

ひまわり畑に彼女を連れて行くことに主治医は許可を出さなかつた。まだ抵抗力が落ちている時期なので次の血液検査まで待つて欲しいと言われ保留になつたままだつた。

仕方なくひとりで出かけ、戻ってきてから部屋で仕事をしていた。

だが、これでは彼女とすれ違いの日々が続いてしまう。そう思い仕事を午前中に片付け、彼女が寝室から出でてくる昼食から寝るまで、なるべく一緒にいるよつ心がけた。

嫌な顔をされるかと思っていたが、最初ほど同じ部屋にいることを拒めなくなっていた。とは言つても無言の時間のほうが長い。聞きたいことは数え切れないほどあるのに、どれも切り出すことができず当たり障りのない質問になってしまふ。

そんな些細なことでも初めて知ることが多かつた。これまで長い間彼女と顔を合わせてきたたといつに一度も知らうとしなかつたことが浮き彫りになつた。そう、自分は彼女の好きな食べ物も気に入つた映画も知らなかつた。学生時代どんな風に過ごしていたのかもここで初めて聞いた。

彼女からの質問は思つていたより少なかつた。自分に興味がないということなのかもしれない。そう考えると気分は落ち込むが沈んでいる場合ではない。彼女はまだ自分の後ろにいる兄さんのことが気になつて仕方がないのだろうから。

「結華さんは花が好きなんだね」

「」の日は体調がいいのか昼食後に花を生けていた。華道、というよりアレンジフラワーといった感じだろうか。小さな籠にいろんな種類の花を挿してはバランスを見ていた。

「好きといつよつ…子供の頃からひとりでできること以外は無理でしたから」

「へえ、でもピアノとか踊りも習つてたんだよね？ それはやめちゃつたの？」

「…他の習い事は先生が来てくださつたときはいいけれど…ひと

りになると誰も聴いてくれないし観てくれませんから、かえって寂しくなるんです」

初めて知ったかもしない。

彼女が寂しい思いをしていたなど考えたことがあつただろうか？生まれたときから自分という婚約者が決まっていて不憫だと同情したことはあつた。だが、それだけだ。裕福な家庭、両親と兄姉がいて可愛がってくれる祖父母がいて、周りから見れば恵まれた環境にいた彼女は、人知れず哀しんでたのだ。

本当なら自分がそれを分かち、埋めていかなければならぬといふのに。ひとりで彼女は何を思ったのだろうか。自分はなんて気楽で無力なんだろうか。

「それ、もうつてもいい？」

彼女の手で生けられた花籠。自分のために活けたわけでもなければ目的があつて作られたものでもない。ただ彼女の息吹が感じられるその花をそばに置いておきたいと思い申し出た。

予想していなかつた言葉に驚いたようだつたが「こんなものでよければ」と差し出してくれた。

数日後、主治医から血液検査の結果を聞かされ容態が安定していることを確認するとさつそく彼女の部屋を訪れた。この日は昼食もそれなりに食べられたようで見ていて安心した。

夕方に近づくにつれ畳のとなつていたので予定を早めることにじた。さて、どう切り出そう？ 連れて行きたいところがある、こう言うと身構えてしまうだろう。外へ出かけよう、ビニールと返事されそうだ。

「結華さん、散歩にでも出かけない？」

突然何を言い出すのだろう、といった表情でじっと見つめていた。

案の定、彼女からは断られたがそれで諦めるわけにはいかない。隠してあるつもりだろうが寝室の一角には車椅子が置いてある。それを指して自分が押すというと驚いた様子で黙ってしまった。

「大丈夫、先生にも許可をとつてあるから。いい気分転換になるとと思うよ？僕がここに来てから結華さんが外に出かけるの見たことないからね」

ほらほら、と言いながら強引に車椅子に座らせた。隣の部屋では真帆が外出の準備を始め彼女は渋々頷いた。面白くなさそうな表情をしていたがそれも今だけだと自分に言い聞かせて玄関を出た。

外は思つていたよりも暑く彼女の体調が心配になつた。

帽子を深くかぶり俯いた彼女はどこへ向かつているのかまったくわかつていないうだろう。早く見せてあげたいと気は焦つていたが、車椅子は思つているより振動を拾う。彼女に負担がかからないよう気を配り慎重に歩いた。

道中は無言だった。何度か水分を補給させるために話しかけたがそれだけで会話らしいものはなかつた。外へ出ることがかえつて体の負担になつていないうかと気になつていたが、顔色をうかがうこともできなかつた。

「着いたよ」

ゆつくりと車椅子を止めて声をかけると彼女は顔を上げた。

今、その瞳にどう映つているのだろう。懐かしいひまわり畑、しばらく黙つてその花を見つめていた。

本当なら見頃を迎えていて大きな花を咲かせているはずだったが、連日の天候不良に気温が上がりず写真のような風景は広がつていなかつた。岩城氏は申し訳なさそうに謝つていたがそればかりはどうしようもない。

もう少し待つてから連れてこようかとも思ったが、いつまた彼女の容態が変わるとも知れない毎日の中でもそれも難しい話だった。

黙っていたので気に入らなかつたのだろうかと顔を見ると表情が少し緩んでいた。過去の思い出に浸つてているのだろうか。嫌な思いをしていないことだけは確かのようでホッとした。

そのうち彼女が「キレイね」と呟いたので慌てて取り繕つた。だがあまりに不自然だったのだろう。彼女の表情から「何、気持ち悪いこと言つてるの?」と読み取れて茶化してその場をやり過ごした。

「休暇の延長届け、出してみよつかなあ

「や、やめてください……」

「あはは、冗談だよ。気が済んだら言つて、連れて帰るから

本心だったが「冗談だと思われたようだつた。

ここへ来る前には休暇を一ヶ月として受理してもらつた。だが、それではずっと彼女のそばにいられない。延長届けを出すことは簡単だらう、だが、受理してもらえるかとなると話は別だ。

自分の実家に経営者がいるとはいえ自分は一社員だ。普通なら一ヶ月の休暇すら通らないだらう。現に自分はここで仕事をしているから実質、休暇扱いにはなつていないと思つ。兄さんがどう立ち回つているのかわからないが、親が何も言つてこないことをみると自分は出張扱いにでもなつてているのだろうか。

そんなことを考えていると彼女の息遣いが荒くなつてくるのを感じた。弱々しく「もう、いいわ」と言つとそのまま目を閉じた。

「結華さんー？ しつかりしてーーー。」

そう声をかけたが彼女から反応はなかつた。

暑さの所為か、外出の所為か、彼女の体力は自分が思つてゐる以上に消耗していたようだ。看護師に聞かされたとおり処置をして急いで連れて帰つた。万が一のことを考えてひまわり畑のそばに車を待機させていた。後部座席に寝かせ、その手をじっと握つていた。

「先生、お願ひしますーーー。」

「結華さんをすぐにベッドへ連れて行つて。それと点滴を用意してあるから、すぐに採血するよ。急いでーーー。」

別荘へ戻ると連絡を聞いた主治医は看護師に指示を出していた。

酸素マスクを取り付け、彼女の細い腕に針を刺し点滴を始めると同時に採血した。寝室ではいくつかのモニターが用意されており血圧、心電図と順番に映し出された。

自分は何もできなかつた。

ただ見ているだけでそれすらも辛くなつていて。由紀恵の言葉が思い出される。覚悟しているはずだったのに実際に氣を失つた彼女を見ると手が震えた。動搖してここへ連れて帰ることだけで精一杯だつた。

処置が行われてゐる間、隣の部屋で待つことしかできなかつた。時間が長く感じられる。立つたり座つたりと落ち着かない行動をとつてみると、主治医が寝室から出てきた。

「軽い貧血と熱中症を引き起こしたようです。落ち着いてきたのもう大丈夫でしょう。点滴が終わる頃には田を覚ますと思ひますよ

礼を言い、頭を下げるとき寝室へ向かった。

先ほどまでのよがな酸素マスクやモニターは外されていて静かに眠る彼女の腕を通る点滴だけが残されていた。ベッド脇に座つて彼女の手を握る。その温かさに触れてると平常心が戻ってきた。よかつた、彼女の意識が戻つたら今まで以上にそばにいよう。そしてもうともうといろんな話をしよう。いや、その前に今日のことを謝らなければいけない。

そんなことを考えていると彼女が目を覚ました。思わず「よかつた」と口に出た。どうやら記憶があいまいなようで何か思い出そうとしている。ひまわり畑から帰ろうとしたところまで思い出して口ごもつた。気を失つたことを伝え今度からはもう少し涼しい時間に散歩に出かけようと提案したが返事はなかった。

「じゃあ、僕は自分の部屋に戻つてから、何かあつたら呼んで」

そう言つてイスから立ち上がつた瞬間腕を掴まれた。

一瞬、何が起こったのか把握できなかつたが、すぐに彼女に掴まれたのだとわかつた。こんなことは初めてだ。何を言われるのだろうかと身構えていると彼女は俯きながら口を開いた。

「い、い……いでござい」

驚きを隠せなかつた。

動搖していたがそれを隠し笑顔らしい表情で「いいよ」と答えた。顔が引きつつていなかつたが気になつたが彼女は自分の顔を見ていなかつた。彼女を寝かせ、その手を握つたまま自分はイスに座りなおした。

思いもしていなかつた彼女から呼び止められて嬉しくなつたが、それをどう表現していいのかわからなかつた。何か気の利いた言葉でも言えればいいのだがそんな器用なことが自分にできるはずもなく。こんなときに兄さんなりどつするだらうと想える。その時点で自分は自分の不甲斐なさを痛感する。

いい加減、兄離れをしなければならない。今までどれだけ甘えて育つてきたか、そんなことを考へることもなく好き勝手生きてきた。自分は変わらなければいけない。でも変われるのだろうか？

「…貴史さん、あの…向日葵畑には、前にも行つたことが？」
「いや、今回ここへ来て初めて行つたんだけど、どうかした？」
「いえ…なんでもないです」

彼女は何か言いたそうな表情をしていたが口を開くことはなかつた。

偶然見つけた、という言葉はやはり嘘つぽかつたのだろうか。だが、自分はあの場所を知らず今回初めて行つたことは嘘ではない。ただ本当のことを言つたということは兄さんの名前を出すことになる。まだ、それは隠しておきたかった。

「結華さんは？」
「え？」
「行つたことあるの？ あのひまわり畑に」

知つていながら聞いた。だが彼女は「いえ」と小さく答えただけで肯定とも否定とも受け取れる返事をした。知られたくないことなのだろうか。幼い頃訪れていたということらしきがそれ以外に何か

思い入れがあるのだろうか。

気になるのになぜか聞く」とはできなかつた。大切な思い出に十足で踏み入るような真似はしたくなかった。彼女の過去を気安く聞ける立場ではないのだと思い込んでいた。

その後無言の時間が続いた。それでも彼女は部屋から出て行けどは言わず、自分が手を握っていても振り払おうとはしなかつた。もう何年もこうして過ごしている夫婦のような錯覚に陥つて、心地よい温かさに悪い気はしなかつた。

「来栖さん、ちょっとよろしいですか？」

数日後、製薬会社の車が止まっているなど外を眺めていると、珍しく主治医が訪問してきた。

ここにこの毎日のようにひまわり畑へ散歩に出かけている。そのことで何か話があるのだろうか、それとも彼女の身に何かあったのだろうか？ どちらにしても自分には良くない知らせだ。仕事の手を止めて主治医を招きいれた。お茶でもと真帆を呼ぼうとしたが「すぐに終わるので」とやんわり断られた。どうやら見られたくないらしい。

「何ですか？ 改まって僕に話なんて」

「結華さんのこと以外にありませんよ。彼女が気にしていました、あなたがどの程度知っているのかと。まあ私が言えることはないと濁しておきましたが」

「…それで？」

そんなことを言つにわざわざ来たわけではないだろう。遠まわしに言葉を繋ぐくらになら单刀直入に言われたほうがいい。

「あなたはすべて知っているんでしょう？　それを前提でお話します」

「……」

「最近の結華さんは体調が良いよつて思えます。ですがそれは薬の副作用が軽減されているせいだと思われます。薬を切り替える時期はとつぐに過ぎてますが…このことの意味がわかりますよね？」

最近投薬の後でも気分が悪くならないよう安心していただが、どうたら見当違ひだったようだ。

抗がん剤はある程度投与すると抗体ができ効き目が弱くなる。そのため定期的に薬を変えるのだが新しい薬が体に合うとは限らない。おそらく次の薬に切り替えたいのだろうが、この言ひ方からするとそう簡単な問題ではないのかもしない。

「…使える薬がないかもしれない、ということですか？」

「さすがに飲み込みが早いですね。かなり難しい状況です。いくつか試してみてはいるのですが結華さんの体が受け付けないらしく副作用が酷いです。彼女のほうもそれほど治療に熱心ではないので、副作用が強く出ると途端に拒絶してしまうんです」

わからないことはない。よく会社で患者の体験談など記載した社報など読むが、副作用は相当辛く何度もやめたくなると、多くの人が思うらしい。何より治る見込みがあればこそ耐えられるのだろうが、余命僅かな彼女にしてみればそこまでして何の意味があるので、うううと思つても不思議ではない。

自分に何ができるのだろうかと考えた。まさか説得したといひで応じることもないだらう。少しでも長く生きて欲しい、そういうのは自分のH'G'なのだらうか。

「…幸い、今はあなたのおかげで結華さんもがんばれるよつですよよ」

「え？」

「自覚はないようですね、まあそれは結華さんも同じみたいですが。無意識かもしだせませんが、彼女は確かに変わりましたよ。何に対しても投げやりでどこか排他的だったのに、少し前向きになりました。だから…あなたにはここにいてもらわないと困るんです」

主治医の言葉を聞いて驚いた。彼女がそこまで心を開いてくれて、いるとは思つてもいなかつたからだ。前のような壁はなくなつて、ると思つようになつていたが、それすら自惚れかもしぬないと首を振つた。

こんな自分でも彼女の治療の励みになるのであれば力になりたい。それが自己満足だと言われても自分のエゴだと思われても。一日でも長く彼女と一緒にいたい。

そう思つた矢先、予想外の電話が鳴つた。

相手は兄さんだからてつきり仕事の話でもあるのだろうかと気楽に通話ボタンを押した。だが第一声で自分の浅はかさに思わず舌打ちした。

『急用だ、明日戻つて来い』

理由を聞ける状態ではなかつた。兄さんは無言の圧力がかかつていて従つほかなかつた。

彼女にどう伝えようか悩んだが結局要点だけ話した。用が済んだら戻つてくると言おうと思ったがやめた。主治医の言い分では自分は決して嫌われているわけではないのだろうが、そこまで自信が持てなかつた。戻つてくる、と伝えて嫌な顔をされたらどうしようかと考えるととても言い出す気分にはなれなかつた。

早朝、彼女の顔を見ずに別荘を後にした。

高速道路を下りて会社へ向かおうとしたとき電話が鳴った。相手は兄さんだ。後一、三十分で会社に着くと言つと「家に戻つて来い」といつもとは違つた言い方だった。

家といつことは仕事のことで呼び出されたのではないといつことだ。嫌な予感がよぎつたが今さらどういつでも始まらない。とりあえずは事の成り行きを見守るしかない。

「ただいま戻りました」

久しぶりに踏み入る家はどことなく緊張の糸が張り詰めているようと思えた。無理もない、普段ならこの時間いない父がいるだけで使用者の様子も落ち着かないようだ。

どうやら自分は待たれていたようで、両親と兄さんは席に着いていた。視線で「さつさと座れ」と合図され両親と向かい合つ、兄さんの斜め横の席に座つた。

「貴史、私は何も聞いてないぞ」

挨拶や世間話といった前置きなく父はいきなり本題に入った。

やはり自分が長谷家の別荘へ行つていることが耳に入つたらしい。兄さんがここにいるということはこのことに兄さんが絡んでいることも知つているのだらう。

下手に言い訳するのはしないほうがよもやだと判断し、自分も兄さんも黙つたまま父の顔を見ていた。

「貴史、長谷家との縁談は白紙に戻つた、と言つただらう。先方はお前のこと気にかけてくれてはいるがそれはお前個人のことを思

つて、ではない。両家の関係はうまくいっている。今さら長谷の娘に会う必要はない、それくらいのことは理解できるだひつ

「…はい」

「少しほは自分の立場とこいつものを理解してもらわないと困る。裕臣、お前がついていながらどうじつことだ。弟だからと特別扱いしているとそこからひびが入る。ゆくゆくは自分の首を絞めることになるところ」と覚えておけ

兄さんは返事をすることなく黙つて聞いていた。何か反論するのだろうかと思つていたが、さすがに父に反抗するほど愚かではないらしい。兄さんにしてはうまく立ち回れなかつたのだなと意外に思つた。

本題はこいつからだ。おやぢへ長谷家の別荘へ行くことを禁止されるだひつ。だが、今さら後には引けない。彼女の最期を見ると決めたのだ。たとえ父でもそれだけは邪魔されたくない。

話はそれだけなのだひつ。父は黙つたまま自分たちを見ていた。こちから話さなければこのまま解散、となつてしまつ。

「…では、許可をください」

「許可をもらいますか？」

少し間があつたといつのに、兄さんとほほ同じタイミングで同じようなことを口にした。だが自分のほうは顔色をうかがう聞き方だ。こんなときまで兄さんより劣つてしまつ自分が情けなかつた。

父は黙つたままで肯定も否定もしない。自分がそう提案することは承知の上だつたのだろうか、表情すら変わらず何を考えているのかわからなかつた。

きつと自分はこいつといつが父親似なのだと思つ。兄さんも内面は決して見せないが人当たりが良く当てに隙を作らせる。そこは母親似で加えて社交的だ。目の前の父を見ていて何も話せなくなる、

ふと彼女も自分に対してもうだつたのではないかと改めて思った。

「…条件がある」

鋭く、冷静に話を切り出した父に反論する隙があるはずもなく、自分はその「条件」を呑むことでひと時の自由を手に入れた。後から思えばこれが仕組まれたことだとわかるはずなのに、このときは無意識に気が付かないようにしていたのかかもしれない。

予定では午前中に別荘へ戻るつもりだった。

だが、仕事ではない呼び出しがそう簡単に終わるわけもなく、加えて気持ちの切り替えに時間がかかり高速道路を下りた頃、太陽は自分の頭上にあり暑さと眩しさが視界を埋め尽くしていた。

もう彼女は起きてきて昼食をとっている頃だらう。きっと自分がいないことに気が付いているだらう。朝黙つて出来たことを怒っているだらうか。そもそも再び戻つて嫌な顔をされたりはしないだらうか。

急に不安な感情がこみ上げてきてアクセルを踏む足を緩めた。そして行き先を変更し別荘地を通り抜けた。

ひまわりの花は満開だった。

青い空をひたすら目指し、あの太陽に少しでも近づこうと必死になつてゐる。

手を伸ばせば拒絶されるかもしだれない。恋焦がれるほど失つたときにはひどく傷つくのかもしない。でも…それでも今の自分には彼女しかいない。

決心を固め車に乗り込むと別荘へと走らせた。

玄関を入つたときいつもに増して静寂に包まれてゐることに違和

感を抱いた。呼び鈴に気が付いた執事が出て迎えてくれたが、その表情はいつもより曇っている。何かあつたのだろうかと首を傾げると

「実は」と今朝の出来事を話してくれた。

聞き終わると同時に主治医の部屋に向かつた。相手の返事も確認せずに扉を開けると、たいして驚きもない表情で座っている主治医と目が合つた。

「…どうこう、ことなんですか？」

「ずいぶん早いお帰りでしたね、今朝のことならもう耳に入つたのでしょうか？ そのまま、それが事実ですよ。私のところに来られても同じ話をするだけですが？」

彼女は今朝、会いたい人がいると外出を願い出た。それが誰だかは言わなかつた。もしかして兄さんに会いたくなつたのだろうか。会つて自分が来たことを聞きたくなつたのだろうか。

ほんの少し心を開いてくれていると思っていた。好かれるとまではいかなくとも、自分は彼女のそばにいていいのだと思い込んでいた。しかしそれはただの自惚れでしかなかつたのだろうか。

「…まったく、手のかかる人たちですね」

黙つたままの自分に、溜め息交じりで主治医が口を開いた。

「どうしてすぐに戻ると、結華さんに伝えてあげなかつたんですか？」

「それは…」

答えられなかつた。

自信がなかつたといえどそれまでだが、仮に言わなくとも伝わるだろう、という自分の悪い癖が原因だ。彼女に自分の気持ちを察してもらおうなど図々しいにも程がある。

「昨夜でも、今朝でもちゃんと結華さんに伝えていれば、あんなに取り乱すことはなかつたんですよ？ キツとあなたがもう一度どこへ戻つてこないと想い込み、あんなことを言い出したんでしょうから。私は言いましたよね？ 結華さんが治療をがんばれるのはあなたがいるからだ、と」

念を押すように言われた。

あの時、その言葉をもつと素直に信じることができればこんなことにならなかつたのかもしれない。彼女が「どう思うか」ではなく自分が「どう思つて欲しいか」を優先すればよかつただけのことなのに。

「…僕は、ここにいていいんでしようか」

「それは私ではなく、結華さんにおっしゃつてください。ちゃんと言葉にしないと伝わらないんですよ、人の気持ちなんて

言わぬくてもわかっている、とは反論できなかつた。そう気が付いたのはつい最近で、未だに行動に表せない。いや、今日こそ彼

女に本当の気持ちを話そうと戻ってきたのに、今朝の事態を聞いてまた決心が鈍りそうになっていた。

「彼女は、今どうしてますか？」

「結華さんなら鎮痛剤を投与したので今は部屋で眠っているでしょう。弱めのものを打つておいたので夕方までには目を覚ますと思いますよ。午前中は看護師がそばで見ていましたが落ち着いているようなので心配はないと思います」

そう聞くと部屋を出て一階へと駆け上がった。

リビングから寝室へ続く扉は開いていた。まだ眠っているだろうと足音を消して中へ入ると、ベッドに彼女の姿はなかつた。驚いて辺りを見渡すとバルコニーへ出る扉が開いていることに気が付いた。ソファに座つて空でも眺めているのだろうかと近づくと、手すりに寄りかかり今にも下に落しそうな体制で立っていた。

「ちょっと、そこから飛び降り……なんてするなよ

「冗談にならないが今はこうして声をかけることしかできなかつた。彼女は驚いた表情で自分を見ると手すりにつかまり「そんなことしません」と力強く反論した。その声を聞いてホッとしたのも束の間、休暇の延長届けを出してきたと告げるとその場に座り込んでしまつた。

「…だったら、最初からそう言つてください。貴方はどうしてそうなんですか？」

「え？ ああ、すぐに戻つてくるつもりだったから言わなかつたんだけど…」

そう、すぐに戻るつもりで、そして彼女に断られるのが恐くて黙

つて帰つた。

そして彼女の言葉を聞いて自分の選択が間違つていたことに気が付いた。昨夜「仕事で少しだけ戻る」という言い方をすれば彼女を惑わすこともなかつたかもしない。

言葉が足りないのも、言い方が悪いのも自分の悪い癖で、それがいくつもの勘違いを生む。彼女に嫌われるようなことはしていないと、初めて会つたときから思つていたが、もしかすると無意識のうちに彼女を傷つけていたのかもしれない。

自分は嫌われていると思い込みずっと彼女を避けてきた。だから自分の気持ちをぶつけるなど考えたこともなかつた。だが、彼女はそうではなかつた。もつと聞いてくださいと、初めて彼女の本心を聞かされた。

そんな想いを聞かされて出た言葉は「ごめん」だった。謝つて欲しくないと言われるのは当然で、それでも他に思い浮かぶ言葉は見当たらず、黙つたまま彼女の言い分を聞いていた。

冷静だと思つていた彼女が涙を流していた。

驚いた、という言葉では足りないほど自分の心は揺さぶられた。こんな風に気持ちをぶつけられたことは今までない。いや、彼女はずつと言いたかったに違いない。自分が聞こうとしただけだ。そう、自分には何も言つてくれないだろうとこつ思い込みだ。

「貴史さん……どうしてここへ来たんですか？」

ずつと聞きたかったことなのだと思つ。

本当なら聞かれる前に自分から話さなければいけなかつたのに、恐くてできなかつた。彼女のためなどと言いながら結局は自分が傷つくなのが嫌だつただけなのだ。だが、もつ話をないわけにはいかない。

「そうだね…今さらこんなこと言つて困々しいかもしれないけど、結華さんにどうしても会いたかったんだ。会つて謝りたかった。今まで僕がしてきたことのすべてを…でもなかなか言い出せなかつた。言つタインニングが見つけ出せなかつたつて言えれば都合がいい話かな。本当は恐かつたんだ、今さら何謝つてるの？って言われるのが、それに顔を合わせればついついらぬ」と喋つちやうじ

彼女は不思議そうな表情で聞いていた。無理もない、自分が今何に対しても謝つているのかわからないだろう。でも「本当のこと」を話す前に一言誤つておきたかった。許してもらおうとかそういう感情はもうない。

「それは…私を認めてない、と言つたことに對してですか？ それとも他にあるんですか？」

「その両方…かな。でも僕は「君のこと」を認めていないと言つた覚えはないよ。あくまで「親の決めた相手」を認めていないだけだ。まあ確かに誤解を招く言い方だよね」

「え？ でもあのときの貴方はそんな言い方では…だつて私は貴方に嫌われてるんだと…初めて会つたとき貴方のことが恐くて、それで逃げ出したんです。貴方は私のことを嫌つてたのではないんですか？」

やはり話はそこへ戻るのだ。

そう、最初から自分は彼女のことを見ていなかつた。あの日からふたりは別の方向を向いてしまつた。それが自分たちの意思でないことに気が付かないまま。

もうすべてを話さなければいけないだらう。彼女がどう思つつか、どう判断するかは自分の考えることではない。彼女に気付かれないよう小さく息を吐いて決心を固めた。

「せうだね……まず、そこが違つんだ
つまく語せる自信はなかつた。それでもやつべつと「あの日」の
ことを話し始めた。

彼女の表情はあまり見てていられなかつた。
どう伝えれば誤解を招かずに事実を知らせることができるのだろう、そればかり考えていてうまく喋れているかも不安だつた。しかもその「事実」は自分だつて聞いた話だ。

「初めてここに会つたときから、僕たちはすれ違つていたんだよ。祖父に連れられてこの別荘へ来て君を見たけど、挨拶をする前にいなくなつてしまつたからね。あの後いくら探ししても結華さんは見つからなかつた。結局自己紹介もできず困つていたんだ。祖父はまた機会があるだろから気にするなと言つてた。でも次に来栖の家で君にあつたとき、すでに僕は避けられてたよ。思い当たることがなくてね、ずいぶん嫌われたもんだと驚いたな」

自分が認識している「事実」を語ると、案の定彼女は困惑した表情を見せた。そんなはずはない、と言いたそうにしている。無理もない、今言つたことは彼女の中の「事実」と違つているだろから。

「…何言つてるんですか？　ここで貴方は名前を…」

続きを言いかけて彼女は口を噤んだ。後の言葉は聞かなくともわかる、想像することは容易だ。兄さんから聞かされたことをそのまま話そつと、彼女言葉を否定した。

「あれは、僕じゃなかつたんだ」

* * *

話は終わつていないと、兄さんから散々呼び出しを食らつた。

彼女が自分との婚約を破棄した理由以外に何を話すことがあるのだろうかと、疑問に思いながらもたいした話はないと決め込んでいた。

だが、仕事と称して無理やり専務室に呼び出されたときにはそういう思い知らされた。

「は？ 何言つてるんだよ、兄さん」

「だから、結華ちゃんは俺のことをお前だと思つてゐる、と言つたんだ」

ヒツヤには理解できなかつた。

兄さんが自分で、自分が兄さん？ 言葉遊びのよつないたゞらな台詞が混乱を招いていることは確かに何かの冗談だと思つた。

「何、訳わかんない」と言つてゐるんだよ。そんなことありえないだろ？」「

「いや、確かに結華ちゃんの中では俺とお前が入れ替わつてゐる。と、言つても結華ちゃんに自覚はないだらうけどな」

「冗談を言つてゐるよつには聞こえなかつた。だが、にわかに信じ難い。

自分と兄さんはよく似た兄弟だと、小さい頃からよく言われた。子供の頃は背丈もさほど変わらなかつたため双子と間違われることもしばしばあつたほどだ。だが、よく見れば大きく違う点がふたつ。まずは髪の色、そして瞳の色だ。

ふたりとも色素が薄く、日本人には珍しいタイプの瞳の色をしている。初めて見た人は必ず第一声で「珍しい色をしてゐる」と言つほど興味を惹くらしい。

特に兄さんのほうが淡い色をしていて遠めに見てもわかるほどだつた。だが、大人になるにつれてその色も徐々に濃くなり、最近で

はふたりとも同じような色合いで。

髪と瞳の色に差がなくなると、今度は一人の纏う雰囲気に違いが出てきた。だから今は「よく似た兄弟」という台詞も聞かなくなつた。

彼女はどこで自分と兄さんの認識を誤つたと言つのだらうか。そもそも「入れ替わつてゐる」といつ台詞 자체がピンとこない。自分が知つてゐる限り、彼女は自分を「来栖貴史」として接してきましたはずだ。そして、いつからかは定かでないが彼女は兄さんに好意を持つていた。

「わかるように説明してくれよ」

「そうか…やつぱり、お前は気が付いていなかつたんだな。まあ疑問に思つたことくらいはあるだろ?」など結局確かめなかつたから今まで発覚しなかつたってことか」

ひとりで頷きながら話す兄さんに「ひとりで納得しないでくれ」と言つと、謝りながら話を戻した。そして子供の頃にひまわり畑で彼女を見た兄さんは、初めて一目惚れというものを体験し彼女のことが頭から離れなくなつたと語つた。

はつきり言って兄さんが誰かに心を開くなど思つてもいなかつたことで正直驚いた。義姉さんのことも家のために仕方なく結婚するんだと思つていたし、仲良也會うに見えて本当の姿を見せていないとこの印象を受けていた。

そんな兄さんがよりにもよつて義姉さんではなく自分の元婚約者に心を奪われるなんて信じられなかつた。だが、その話と入れ替わりのことがどう繋がつているのか、不思議に思つてると「俺は愛情をもらひべきではなかつた」と切り出した。

「…俺は、あの向日葵畑で見た結華ちゃんのことは一生心に留めて

生きていいと決めた、はずだった。でもお前の婚約者と顔合わせをすると長谷家の別荘へ行つたとき、俺の決心はことじりとく崩れ去つたよ」

そうだ。

あの日、自分は初めて婚約者を紹介されると知つて兄さんについて欲しいと願い出た。父は仕事で外せないとふたりを連れていったのは祖父だった。一緒に行動しているつもりだった兄さんは途中でどこかへ行つてしまつた。彼女の姿も見当たらないと探していくとき、兄さんに遭遇したが「何も知らない」と言われた。実はそりではなかつたのだろうか。

「向日葵畑で見たのが長谷結華だと知つていたら、先に理性が働いて彼女のことを氣にも留めなかつたかもしれない。だからあの別荘で彼女を見たとき、正直どうしていいのか戸惑つたよ」

そうか、兄さんはどこの誰かもわからないひとりの少女に恋をしたのだ。

それが弟の婚約者だと知つて複雑な心境になつただろう。想いは通じないのに一番近くで見ていなければならぬなんて、残酷すぎる。そんな自分の境遇をどう思つただろうか、と考えたところで思考が変わつた。

兄さんは、自分に対してもう思つたのだろうか。

自分が想いを寄せる相手の婚約者が弟。その弟に対して何の敵意も持たなかつたのだろうか？

「兄さん、僕のこと…憎いと思つた？」

「…どうだらうな、ただ理性がどこかへ飛んだことだけは認める」

「ここまで本気か読み取れないほど兄さんの表情は変わらなかつた。ただ漠然と、自分は兄さんに敵意までとはいかない、好ましくない感情をぶつけられていただろうと想像できた。それでもそんな感情が自分に直接向けられるとはなかつたが。

いや、だからこそその「行動」だったのだろう。自分に向けられた悪意を形にするために。

「無意識のうちに結華ちゃんに近づいていたよ。自分で制止できなかつた、理性というものが完全に欠如していたんだろうな。俺はお前に対する「羨ましい」という感情をすり替え「どうして俺じゃないんだ」と憤りを感じて結華ちゃんの前に立つた。そして…「来栖貴史」だと名乗つたんだ」

「…え？」

「それも極めて冷静に、悪意を込めて」

* * *

一旦話を止めた。

彼女は突然の告白に思考がついてきていよいよ、何度も瞬きをし首を傾げながら聞いていた。自分の記憶と照らし合わせているのだろう。だが、納得いかないようだ。

「そ、そんなはずは…そもそも裕臣さんがそんなことをして何にあるんですか？ 私が貴史さんを嫌つたところで婚約解消になるわけでもないし…それに、今までたくさん相談に乗つてもらいました。あれは…あの優しさは、全部嘘だつたんですか？」

「嘘…ではないと思うよ。それに婚約解消させるための行動でもな

い。兄さんは…結華さんが僕に想いを寄せることを阻止したんだ。自分のものにならないのなら、誰のものにもなってほしくなくて

そう、そして自分と彼女はお互いに「嫌われている」と思い込み、お互いを避けるようになった。

兄さんから話を聞いたとき、自分があれほど避けられている理由がわかり妙に納得した。彼女の中では最初に攻撃したのは自分のほうで、自分という存在がずっと恐かったはずだ。

もつと早くに避けられている理由を聞いていれば誤解を解く機会もあつたはず。兄さんが言つた、自分はそれだけ鈍感で無関心だったということだ。

「子供の頃はね、よく僕の名前を使つていたよ。外見が双子かつていうほど似てたしまわりも気が付かなかつた。どれも些細なことで僕が責められることがなかつたから、兄さんから聞かされるまで知らなかつたけどね。今思えば、兄さんは来栖家の跡取りとして育てられ教育されてきたわけだから相当ストレスが溜まつてたんだと思う。だから僕の名前を使うこと気晴らししてたんだろ?」

「そんな…」

彼女はそのまま黙つてしまつた。

何かを考えているのだろうか、それとも何も考えたくないのだろうか。そんな彼女の表情を見ていふことに話をして本当に良かつたのだろうかと不安になつた。

* * *

「それが事実なのはわかつたけど…なんで今さら? 僕にどうしろつて?」

なんとなく釈然としない。

自分のことなのだが、どうにも他人のことを見かされているような感覚だ。それにあの日の事実がそうであっても、彼女が兄さんに惹かれていたこととは関係ない気がする。最初のきっかけがそうでなくとも自分のことを良く想わない可能性だってある。

「結華ちゃんに、その事実を伝えて欲しい」

「なんで？ 兄さんから言えればいいだろ？」

「俺が言つたんじゃ意味がないんだ。いい加減、自覺しろ」

何を？ と聞ひつとして口を噤んだ。兄さんは自分の言い分など聞く気がないと言ひたげにこちらを見ていた。おそらく何を言つても通らないだろ？ 黙つて兄さんの言い分を聞くことにした。

「いくら最初に俺がお前の名前を語つたからといって、普通まつたく気が付かないことはないだろ？ 俺は結華ちゃんと接するたびに、いつかこの違和感に気が付くんじゃないかって思つていた。自覚はないだろ？ が結華ちゃんはうすうす感づいている感じだつた。だからといって俺が話しても、到底信じてもらえないんだよ」

自分が話したほうがもつと信じてもらえないんじゃないかと思つた。だが兄さんは「何も会つてすぐに話せとは言つてない」と付け加えた。

「でもこのこと話したら彼女が悲しむかもしれないだろ？ わざわざ言つ必要ないんじやないの？」

「結華ちゃんに… 最期までお前に嫌われていたと思わせたくないんだ。彼女は親の決めた相手と無理やり結婚させられるんじやなくて、ちゃんと自分たちの意思で一緒にいたつて思つて欲しいんだ。お前だつて結華ちゃんに誤解されたままなんて嫌だろ？」

「僕は別に……」

「お前もむちゅんと自分の気持ちと向き合ひや。俺はふたりのことを見てきたからわかる。お互に嫌われたくないから壁を作つて距離を保つてきたんだろ？ もつその必要はないと言つてるんだ。今度こそお前のことを見てもうらえ。そして結華むちゅんを受け止めてやれ」

そう言つて兄さんは自分をこの別荘へと送り出した。

自分では隠してきたつもりだった。彼女のことを持つても叶わないと決め付けていたから何も言えなかつた。好きになつても叶えないのならせめて嫌われればいい、無関心ほど辛いものはない。

それでも兄さんにはバレていたようだ。だからこそ徐々に罪悪感に苛まれ事実を打ち明けることになつたのだろうが。

ずっと黙つたまま俯いていた彼女が不意に自分を見た。

責められるのだろうかと思つて身構えたが、彼女は唇を震わせながら優しい言葉を発した。

驚いた、とうつよりも腑に落ちた、といったほうが正しいかもしない。

かなり前から違和感を感じていた。誰に、と自問自答してもわからない。でも心のどこかが歪んだ事実を修正しようとしていたのかかもしれない。

貴史さんの告白は理解するのに時間がかかった。でも「まさかそんなはずはない」という否定的な感情はさほど大きくなかった。

貴史さんにはずっと嫌われていると思っていた。だから自分の気持ちを認めるのが恐かった。完全に拒否されたら、それでもそばにいなければいけないのに、辛くなるだけだから。

どんなに嫌われていても、何があつても婚姻は交わされるだろうし、それだったらわざわざ辛い想いをしなくてもいいと思つて封印した。

裕臣さんに相談しているうちに自覚させられた。私がかなり前から貴史さんに想いを寄せていたことを。だからこの別荘へ着てからもずっと彼のことが気になっていた。

余命が短いと知つて真つ先に後悔した。

と、同時にすべてを諦めた。それなのに彼が現れて心が揺らいだ。

でも、今言わなければもっと後悔する。そつ思つて顔を上げると彼は相変わらずの無表情でこちらを見ていた。声が震えそうになるのを押さえて静かに口を動かした。

「…ありがとうございます、本日のことをお話してくれて」

私の言葉は以外だつたようで、彼は少し驚いた様子で何度も瞬きをした。そして胸ポケットを探ると一枚の写真を取り出しテーブルの上に置いた。

「…これは？」

「いや、こんなにあつさり信じてもらえるなんて思つてなかつたら…一応昔の写真を持ってきてたんだ。ってこんなものが証明になるかどうかはわからないけどね」

見てもいいですかと尋ねると、どうぞと手を差し出された。

渡された写真をよく見ると自分の記憶と重なつて行くのがわかつた。あの日私は初めて「恋」を知つた。ずっと見ていても叶わなかつた人。

写真を裏返すと撮つた日付だろうか、それと一緒に名前が記されていた。貴史、十四歳。この別荘で初めて会つたときと同じ栗色の髪と淡い緑色をした少年がそこには映つていた。

初めて会つたときから惹かれて、ずっと会いたいと思つていた。しかしそれが兄の裕臣さんだと思つていたから会うこと避けた。これ以上想いを寄せて辛くなるだけだから。

結納の前にも何度か来栖家に行く機会はあつた。それでも何かと理由をつけては断つっていた。もつと早くに会つていたら自分の記憶が思い込みだつたことに気が付いていたかもしれないのに。

「…あの時、あの場にいればこんな誤解は生まれなかつたんですね」「仕方ないよ、僕がもつと早くに違和感に気が付いていればよかつただけの話しだし。本当に悪かったと思つてる」

「いえ、お互いま…だと思いますから。どちらが悪いとかそういう問題ではないとわかつてます」

あの、と言いかけて言葉を飲み込んだ。

事実は聞かされてわかつたが、今の貴史さんはどう思つてゐるのだろう。このことを伝えてしばらくすると帰つてしまふのだろうか。休暇は延長してきたと言つていたがそれはいつまでなのだろう。黙つても解決されないことはわかつてゐる。頭ではわかつていてもすんなり聞くことができない。

「あの…お茶でもいれてもらいましょうか」

バルコニーでひとり外を眺めているときに突然彼が現れたため、そのままになつてゐた。本当は別のことと言つつもりだつたが、一息入れたほうが聞きやすくなるかもしれないと提案した。

ふらふらと立ち上ると彼に制された。無理しないで、と声をかけられ彼は呼び鈴を鳴らしメイドを呼びつけた。こんなこともできなくなつてゐるのかと実感すると、急に恐くなつた。

事実は聞けた。

これ以上、私は何を望むことがあるのだろう。

そう長くない人生の中での、これ以上彼を縛り付ける権利が私にあるのだろうか。

「結華さん、どうかした？ 気分でも悪いの？」

「え？ いえ、そんなことないです…ちょっとと考え事してたので」

「そう、だつたらいいけど。気分が悪くないのなら、後で散歩に行きたいけど…先生、許してくれるかなあ？ 真帆さん、後で聞いてきてくれる？」

彼がそういうとメイドは頭を下げて部屋を出て行つた。

ふたりきりになるとまた息が詰まりそうになる。たぶん話が戻るかもしけないとつてゐるからだ。聞きたいことを口にしてみよう

と思つほど、鼓動ばかりが早くなつてしまふ喋れない。

しばらく沈黙が続いた。

前だつたらこんなことは当たり前で、彼が何を考えているのか勘ぐることもしなかつた。でも今は気になつて仕方がない。その読み取れない表情の奥に何が潜んでいるのか。

意を決して口を開こうとしたとき、ドアをノックする音が聞こえてきた。相手はメイドと主治医だ。

「聞きましたよ、散歩に出かけたいとか？ 結華さん、ちょっと診察しますのでベッドへ移動してもらいますか？ 来栖さんはここでお待ちいただいて結構ですよ」

主治医の診察は簡単なものだつた。わざわざ看る必要があつたのだろうかといつぽどに。鎮痛剤の後遺症は残つてゐるようだつたが、たいして氣にはならなかつた。

「…もう大丈夫ですね。結華さん、さつき私に言いましたよね？ どうしても会いたい人がいるつて。その気持ちを今度こそちゃんとぶつけてきてくださいね。迷つていては何も得られませんよ」

見透かしているかのように主治医は語つた。

「…そうだ、もう会えないと思つたとき、どうしても伝えたいと思つたのだ。それをちゃんと言葉にしよう。自分の気持ちに嘘をつかないよ」

夕方になつて向日葵畑に散歩へ出かけた。

いつもと同じように車椅子に乗つて、後ろから彼に押してもらつて。それでも昨日までとは何かが違う。会話らしいものはなかつたが、彼に押してもらつているという安心感が私を包んでいた。

夕日に照らされた向日葵の花を見て決心が固まつた。途中、どう言おうか散々迷つていたが、遠まわしな言い方をせずにまっすぐ自分の気持ちを伝えようと、太陽を目指す向日葵に教えられた気がした。

「大丈夫？ 疲れてない？」

「はい。あの…貴史さん」

私を気遣つて顔を覗き込んだ彼はすぐ隣にしゃがんじつとこちらを見ていた。その瞳に吸い寄せられるように、目が離せなくなつていた。

「私…貴史さんのことが、好き、です」

ようやく言えた。

この一言を言うためにかなりの遠回りをしたと思う。あんなに恐かったのに、言つてしまえばなんてことはない。彼に聞こえるのではと思つほど心臓の鼓動は大きいが、なぜか気分はすつきりしていた。

彼は驚いているのだろうか。何も言わず目も逸らさずに硬直していた。あの、と言いかけたとき彼の表情が崩れた。今まで見たこともないような、少年のような笑顔だ。

「うれしいよ、結華さん。でも、参ったな…僕が先に言おうと決めてたのに先越されちゃうなんて」

「え？ それって…まさか…」

「結華さん、僕も君のことが大好きだよ。ずっと前から。この一言が言えずにずっと苦しんでいたんだけどね。まずは君に謝りたかった。そして自分の気持ちを告げようと、そう決めてここへ来たんだ」

そう言つと車椅子に座つたままの私を抱き寄せた。一瞬の出来事で何が起つたのか把握するまでに少し間があつたが、彼の腕の中の心地よさに浸り田を開じた。

「結華さん、愛してる。だから…」

もう一度と離れないで そう言われて我に返つた。

「で、でも…私は、もう…」「わかってる。それでも結華さんと一緒にいたいんだ」「だって、私は…もう長くは生きられないんですよ？ それなのに貴史さんにそばにいてもらつて、私は何も返せないのに。貴方の時間を奪うだけなのに…？」

本当はそばにいて欲しい。

でも、今の私にそれを望む権利はないと思っている。そう遠くないうまに私は永遠の眠りにつく。ひとりでそのときを迎えるのだと思つていた。それなのに。

「私は…それを望んでもいいんですか？」

瞳から溢れる涙を感じ取つた。

ひとりでいることが、本当は不安で仕方なかつたと今さらながら気が付いた。彼は私の涙を拭いながらそつと抱きしめてくれた。

「僕のほうこそ、結華さんのそばにいていいのかつて何度も聞きたかつた。でも今は違うから。結華さんがどんなに嫌がつても、離れる気なんてないから。だからずっと一緒にいよ」

「…はい」

夢を見ているのかと思つほど貴史さんの腕の中は居心地が良かつた。彼は抱きしめていた腕の力を緩めると私の顔をじつと見つめ頬に手を当てた。

夕日が照らす向日葵の前でそつと目を閉じると、彼の優しい想いを乗せた唇がそつと触れた。初めてのキスは私の心を静かに、確實に動かしていた。

部屋に戻ると珍しく主治医が待機していた。

朝のことがあるから今日はいつも以上に気に留めてくるのだろう。もう大丈夫なのに、そつとおもひ出したが有無を言わさず寝室へと促された。

「いかがでしたか？」

「もう大丈夫ですよ、気分も悪くなりませんでしたし夕食も入ると思ひます」

それは良かったと言わんばかりに満足そうな顔をして聞いていた。主治医としては患者の体調が一番気になるところだろう。私の容態が落ち着いていることが何より安心なのだと想つ。

でも、気になることがひとつだけあった。それは今使用している薬のことだ。

酷い副作用が嫌だからと、慣れた薬ばかり使用してきた。それが良くないということを再三主治医に忠告されてきたにも関わらず。

この間、製薬会社の人々が来ているときに社で発行している雑誌を置いていった。そこには私と同じように投薬治療を行っている患者の声と称してコラムが掲載されていた。

副作用が酷く何度も止めようと思つたがそれを乗り越えて克服した人もいるという。私といえば告知されたときにすでに諦めて、主治医の勧める薬も断つてきた。ちゃんと治療していれば、もしかすると長く生きられたかもしないのに。

「…先生、私…今さらながら後悔しています。もっと先生の言つこと、聞いていればよかつたつて。今になつて氣付いても、もう遅いですね」

私はいつだつて後悔ばかりだ。

落ち込んでいる私に、主治医は意外な言葉をかけてくれた。

「気が付いたときから前に進めますよ。今からでも遅くはないです、結華さんがその気になれば私は最善を尽くすだけです。どのくらい効果があるのかわかりません。でもしないよりしたほうが後悔も少なく済むでしょう?きっと来栖さんも支えになつてくれますよ」

「私ももう少しだけ、がんばってみます」

そばで支えてくれる彼のために、もう少しだけ時間が欲しい。それはたぶん、生まれて初めて何かを望んだ瞬間だった。

「僕も協力するから何でも言つてね」

部屋着に着替えリビングへ行くとすでに主治医が話していたようで、彼は笑顔でそう言つてくれた。彼は医師ではないが医療従事者だ。私の選択がどういう意味を持つか考えるまでもないのだろう。彼の言葉が嬉しかった。向日葵畑から帰つてきてから、私はまだ夢の中にいるようなふわふわした感覚の上に立つている。言葉ひとつ足しただけで、世界はこうも変わるのだろうかと思つほど不思議な気持ちだった。

「じゃあ結華さん、治療方針が決まつたらまた知らせますね。今日はさすがに疲れたでしょう？ ゆっくり休むことをお薦めしますよ、では」

確かに、ソファに座つているだけでも体がだるい。

それでも今すぐ眠れるほど、ぼんやりとはしていない。いや、逆に冴えているくらいだ。そんな私の状況に気が付いたのか彼は私を抱きかかえて寝室へと運んだ。

「ちょ、ちょっと貴史さん！？」

軽々と抱きかかえたと思つたらあつという間にベッドへ下ろされた。あっけにとられるほど一瞬の出来事で思わず彼の顔を凝視した。彼は特に表情を変えずベッド脇のイスに腰かけた。

「眠れないのはわかるけど、先生もああ言つてたことだし。大人しくベッドについて。また無理させて倒れてほしくないからね

「だからって、何も抱きかかえなくても…」

「そのほうが早いでしょ？ 言つても結華さん、聞いてくれなさそうだし。それにこのまづがゆつくり話ができるから」

横たわった私の髪をそっと撫でると優しく手を握ってくれた。その行動ひとつひとつが照れくさい。自分でも高揚しているのがわかるがよつやく好きだと認識できたばかりで、まだ頭では整理できていない。手が触れるだけでもドキドキしてこのに自然に振舞う彼が不思議で、少しだけ羨ましかった。

何か話したいことでもあるのだろうかと黙っていたが、彼は一向に口を開かない。穏やかな表情で私のことをじつと見ている。もしかしたら私が何か言い出すのを待っているのだろうか。

聞きたいことを口に出してみようか、と思つたとき彼が「結華さん」と私のことを呼んだ。彼に神経がいつていたためかすぐに「いい」と返事をすることができた。

「僕にして欲しいことがあつたら何でも言つてね。何でもするしどこへだつて連れて行くから。でもこれだけは約束して。絶対に無理しない、って。何があつても自分の体調を優先して」

「…貴史さん？」

「僕はただ、いつも横たわっている結華さんのそばに囲はられるだけで幸せなんだよ。それだけは信じてる」

それは、すなわち。

誰かのためにではなく、自分のために生きて欲しいということ。

残された人生をどう生きていこうかなど考えたこともなかつた。ただ命の灯が消えるのを待つだけの毎日。明日、その日が来ても後悔などしないと思い込んでいた。

それが今は少しでも長く彼と一緒にいたいと願っている。主治医に告知されたときですら思わなかつた恐怖が、ここへきて初めて私の心を覆いつくしている。死ぬことが恐い、だけど私はまだ彼に本心を伝えていない。それだけでなく想いを告げただけでこれからのことを見くことすらできない。

私はわがままを言つてもいいのだろうか。彼と共に時間を使うことを許されるのだろうか。

「…貴史さん、こつまで…こつまでここにいてくれるんですか？」
休暇を取つてこる彼がどのくらい滞在できるのか、それが一番気になつていた。

本当はずつとそばにいて欲しい、でもそばは言えなかつた。彼のそばにいたいと望んでこるので、だからこんな風に質問するにとかできない。

恐る恐る質問をした私とは対照的に、彼は不思議そうな表情で何か考えていた。やはり聞いてはいけないことだったのだろうかと思つていると笑顔を向けてくれた。

「ああ、そつか。僕は肝心ことが言えてなかつたんだね。休暇届の延長してきたなんて言つたからちゃんと伝わらなかつたんだ。厳密に言つと今休暇中つていうより停職中、つて言つたほうが正しいかな。だから特に期限はないんだ」

「え？ じゃあ会社は…？ 部屋で仕事をされてたんじや…」

「昨日まではね。仕事をする条件でここに来ることを許してもらつてたから。でも状況が変わつたというか…僕の気の済むまでここにいてもいこになつたから。だから結華さん、僕はもうずっと君のそばにいるから安心して」

信じ難い話だった。

彼の立場からしてそう簡単に通る話でないことにくらい私もわかる。彼が抜けことで少なからず影響のでる部署だつてあるだろつ。それでも彼は貫き通したということなのだろうか。そつ渺つと彼の優しさと安堵の気持ちから涙が流れてきた。

「結華さん、泣かないで…」

「『めんなさい、なんだかホッとしたやつて…まさかそんなこと言われると思ってなくて…私、貴史さんが来るまではひとりでも構わないって思つてました。でも今は…ひとりになるのが恐いんです。だから…』

「わかつてゐる、わかつてゐるよ

泣きながらだつたためかうまく喋れなかつた。それでも彼は頬を

伝う涙を拭いながら何度も頷いてくれた。その優しい手を握つてい

ると彼の唇が私に触れた。それがあまりに激しくて息苦しくなる。

その息苦しさから開放されると彼は「愛してこる」と小さく彼をやいた。そして。

「結華さん…抱いてもいい？」

声を出さずに頷くと彼はもう一度私にキスをした。何度も愛してゐる、とささやかれながら触れる彼の腕に抱かれて、私はひと時の幸せを手に入れた気がした。

生まれて初めて身も心も結ばれ、彼と過ぐす穂やかな日々が永遠に続けばいいこと願つた。それが叶わないことに気が付いたが打ち消すことはできなかつた。

今はただ、愛しい人のそばで眠ることができればそれでいい。夢に沈むように目を閉じた。

数日後、体調が良くなつた私は久しぶりに外出できた。

彼と想いを分かち合つた次の日、気が緩んだのか熱を出し寝込んでしまつた。幸いたいしたことはなく安静にしていればいいと言われ、退屈だつたが寝室で過ごした。

もちろんその間も彼が私のそばを離れることはなく、これが夢ではないんだと実感した。

「結華さん、この道で合つてる？ セツキからずっと同じ風景が続いているようだけど」

「大丈夫ですよ、もうちょっと行けば目的地が見えてくると思いますから」

そう。

今日はいつもの向日葵畑に散歩へ出かけてるのではない。
主治医の許可を得てちょっととしたドライブに出ている。とは言つても目的地を知っているのは私のほうだ。彼は行つたことがないのか記憶がないだけなのか、先ほどから不安そうな表情で運転している。

無理もない、別荘を出てただひたすら山道を走つている。右を見ても左を見ても同じ風景で変わり映えしない。この先に何かあるのだろうかと不思議に思つても仕方ない。

寝込んでいる間、彼は私にいろいろ質問を投げかけてきた。

今までお互いのことを知らなかつたのだから時間はいくらあっても足りなくて、だからこそ安静にと寝室から出なくては退屈はしなかつた。

その会話の中で、幼い頃によくお祖父さまに連れて行ってもらつた

ていた場所の話になつた。母がこの別荘へ連れてこなくなつてからも足を運んだ。思い出の場所と言つても過言ではないかもしない。

体調が良くなつたら行つてみたい、と言つたのは彼のほうで私は驚いた。まさかこんな場所に興味を持つなんて思いも寄らなかつたからだ。

私との思い出を共有したいと言われ照れくさかつたが、話しているうちに私も行きたくなつたので合意した。

しばらく走ると湖が見えてきた。懐かしい記憶が徐々によみがえつてくる。窓の外を見ていると路肩に車を止めてくれた。

彼の休憩を兼ねて、ということもあつたと思つがどうやら私の思いを察してくれたほうが大きかったようだ。助手席から車椅子に移動させると湖の周りを歩き出した。

「よく、わかりましたね」

「結華さんはすぐ表情に出るからわかりやすいよ。ちょっと散歩してみたって思つたでしょ？ それに長時間車に乗つてるのは良くないかもしねないからね。気分転換だよ」

「…貴史さんには敵わないですね」

褒めたつもりはなかつたが彼は嬉しそうな表情で私を見つめた。まだ暑い日が続いてたがさすがに高地になると気温が下がつている。吹き抜ける風はどことなく秋の気配を感じさせていた。

車椅子を押してもらつことが当たり前になつてしまつたが、できることなら隣を歩いてみたい。そして彼と同じ目線で同じ風景を見てみたい。彼を見上げる私は本当に向日葵の花になつたような錯覚に陥つた。

「ここも思い出の場所なの？」

「そうですね、よくお祖父さまに連れてきてもらいました。目的の場所ももうすぐそこなんですよ。たぶん歩いていつても行けそうなほどだったと思います。あ、ほらあの桟橋からボートに乗せてもらつたんです。懐かしい…」

桟橋の近くに一軒家と小屋が建つていた。昔はこの湖を遊覧するボートが出ていたが今はどうだろ？か。仮に営業していくも乗ること是不可能かもしれないが。

近づいてみたが人の気配はなかつた。手入れされている様子がないことからずいぶん前に閉鎖されたのだろう。少しがつかりしてしまつた。

何の確認もせずにここへ来たのを後悔し始めていた。

この先の目的地も私の記憶と違うかもしれない。もう人もいなくて荒れているかもしない。そんなところに彼を連れて行ってもいいのだろうか。

「結華さん、ここでの思い出をもつと聞かせて。今の姿は僕には関係ないよ、ここが結華さんにとって大切な場所なら僕もそれを大切にしたい」

どうしてこの人は私を喜ばせることばかり言つのだろう。

そんな風に優しくされたらどう返していいのかわからなくなる。黙つていると彼は隣にしゃがみ私の顔を覗き込んだ。一瞬泣きそうになつたのを誤魔化して子供の頃の話をした。

自分のことながら話していく嬉しかつた。自分にもこんな楽しい過去があつたんだと改めて認識できたからかもしれない。

最初はボートに乗るのが恐かつたこと、あの一軒家に住んでいた家族とのバーベキュー・パーティーや花火大会、初めて螢を見たことなど今となつては記憶も曖昧なところが多いが、それでも楽しかつ

たことだけははつきりと覚えていた。

湖から離れて先へ進むと目的の建物が見えてきた。突然現れた建物に彼も意表をつかれたようで思わず立ち止まつた。
石畳の先に立つ白い建造物。屋根の上には大きな鐘と十字架がありその存在感を表していた。

「結華さん、ここが言つてた教会なんだね？」

朽ち果てているかと思っていた教会は今もなお威儀を保つていた。
そして私たちが来るのを待つていたかのように鐘が鳴り響くと彼はゆっくりと車椅子を押し歩き始めた。階段横のスロープを上ると木製の重厚な扉が私たちを出迎えてくれた。

その扉が開かれると、高い天井に備え付けられたステンドグラスから優しい光が射し込んで私たちを包み込んでくれた。

懐かしい教会の中は、まるで時間が逆戻りしたかのようだ私の記憶と同じだった。

幼い頃の記憶だったためどのくらい覚えているか定かでなかったが、こうして来てみるとあの頃見た情景がよみがえってくる。お祖父さまとの大切な思い出だ。

「どう？ 久しぶり来たんでしょう？」

「ええ…最後に来たのは確か、初等部に上がる前だったと思いますから。でも、あまり変わってないと思います。外もきれいに手入れされたので神父さまがいらっしゃると思うんですけど。勝手に入つてよかつたんでしょうか」

「教会なんだし入っちゃいけない、なんてことないでしょ？ 神父さまには後で挨拶に行こう」

そう言つと彼はゆっくりと車椅子を押し、祭壇前で止まつた。車椅子のブレーキをかけその隣のイスに座つた彼はじつとマリア像を見つめた。

つられるように私の視線もマリア像に向いた。優しい表情ですべてを包み込んでくれるような温かい存在。教会という神聖な場所は心が落ち着く。とは言つても私はクリスチヤンではないが。

お祖父さまも信仰があつてここへ来ていたのではない。

古くからの友人がこここの神父で懐かしい昔話をするために足を運んでいた。その友人である神父もずいぶん前に他界したと聞いているから、今は誰が務めているのか知らなかつた。

お祖父さまが亡くなつた後、この教会との繋がりは途絶え私自身の記憶からも薄れていた。だが別荘に移り住んではしばらくすると過

去のことが徐々に思い出されてきた。この教会も訪ねたいと思つて
いたが今の体ではそうすることが難しいだろつと諦めていた。

何気なく言つた一言を貴史さんは聞き逃さなかつた。まさか現実
になるとは思つておらず、今朝出かけようと言われたときは驚いた。

しばらく無言でマリア像を眺めていると扉のほうでコシンシと響
く音がした。振り返ると誰かが立つていた。が、逆光のため顔はは
つきりと見えなかつた。

それでも服装から察することはでき、それが神父だとわかるまで
そう時間はかからなかつた。足音が近づいてくる中、貴史さんは立
ち上がり会釈した。

「こんな山奥の教会に訪問者など…珍しいこともあるもんだ。初めて見る顔、ですか？」

「はい、来栖と申します。こちらは恋人と結華です。えつと、こちらの神父さまよろしいですか？」

「ええそうです。やまなみ山南と言います。そちらのお嬢さまは…おや？」

山南と名乗つた神父は私の顔を見ると首を傾げた。だが一瞬で何か察したのか、状況を把握したようで笑みを浮かべた。私が誰だかわかつたようだつた。あいにく私のほうは目の前の老人に覚えがない。

「ユ力さん…ああ、長谷家のお嬢さまですな。いやういぶん大きくなられて…ここへ来ていた頃はあんなに小さかつたのに。時が経つのは早いものですね。ではあなたは貴史坊ちゃんですか？ 成長したお一人に会えるなんて先代が引き合わせてくれたんでしょうねあ」

古い記憶を辿つてゐるのだろうが、神父は目を細めながら嬉しそ

うに頷いていた。私のことはともかく彼のことまで知つていいことに驚いた。やはり幼い頃に来たことがあるのだろう。

神父は先代、つまりお祖父さまの友人の弟だと語った。幼い頃の私を覚えていたようでお祖父さまに連れられて来ていたのを知っていた。彼も幼い頃に三度ほど来たことがあるらしいが当の本人は記憶になかったようだ。よく覚えてなくて、と謝つていたが神父は笑顔で応えていた。

「せつかくお越しいただいたんだ、お茶でもどうですか？ 教会の裏手に小さいですが私の家があるんですよ。家内が焼き菓子を作つていたので、『ご案内しますよ』

「ありがとうございます。結華さん、『ご馳走にならつか？』

神父の申し出に快諾した彼は私の顔を覗き込んだ。

行けばきっと懐かしい話がたくさん聞けるだろう。だが、その前にここへ来た目的を果たさなければならない。ここへは懐かしさから訪問しただけではなく、私の今の本心を彼に聞いてもらつたため、そして第三者に証人になつてもらえればと思つて連れてきてもらつたのだから。

黙つたままの私を心配そうに見つめていた。一瞬考え方をしていたことに気が付いた私はすぐに笑顔を作り口を開いた。

「ありがとうございます。でも…その前に、しておきたいことがあります。もしよければ神父さまにもいて欲しいのですが…ご迷惑じゃないでしょうか？」

「私は一向に構いませんよ」

彼は不思議そうな顔をしていた。無理もない、前もつて何も言つていなかつたから、これから私が何をしようとしているのかわからぬはずだ。

あまり力の入らない腕で車椅子を動かそうとした。途端に彼が手を差しだし後ろから押そうとする。いつもなら受け入れる行為も今だけは振りほどいた。

「貴史さんはそこに座つてください。私ひとりで祭壇の前に行きたいんです」

たった数歩、それだけ動くのにずいぶん時間がかかった気がする。慣れない動きで腕はパンパンになっていたが自力で祭壇の前にたどり着いた。

一息吐いてマリア像を眺める。そしてそのまま目を閉じて気持ちを落ち着かせた。

とても静かだった。

ステンドグラスから射し込む優しい光に包まれながら今までの人生を振り返った。と言つても二十数年、そのほとんどは記憶も曖昧な幼少期と自分を偽つた思春期だ。

何度も振り返つても後悔ばかりの日々。それでも僅かな希望を手にした今の私は間違いなく「幸せ」と答えることができる。愛する人に支えられ彼のそばにいられることへの充実感が私を覆いつくしていた。でもその間、何度も考えたことがある。私を見守ってくれる彼にたいして私ができること。何度も考えても答えは「何もできない」だった。だったら、せめて未来は返そう、そう思った。

「マリアさま、私には愛する人がいます。今、その人と一緒にいるで本当に幸せです。できることならこの幸せが永遠に続けばいいのにと願ってしまいます。でも…それは叶いません。今がどんなに幸せでもいつか終わりがきてしまう。それは、そう遠くない未来です。マリアさまならご存知ですよね？ 私はもう長く生きられません。でも、その最後に私は幸せを知りました。だから…それをくれた彼に感謝しています」

私の声は静かな教会の中で響き渡っていた。神父は目を閉じて私の言つことに耳を傾けていた。きつと今まで何人もの告白や懺悔を聞いてきたのだろう。その中に私も入るのだ。

背後の彼がどんな表情で聞いているのかはわからなかつた。それでも私が話し終わるまでは立ち上がり話をかけたりしないだろうと、妙に自信があつた。

「私は…後悔しています。今まで自分を偽つてきたことを、本心を

さらけ出しが恐くて隠し続けたことを。そして生きることを放棄してしまったことを。私という人間が生きていても生きていなくて世界はそう変わりません。でも…私の周りの、ほんの小さな世界は変わってしまうんだと初めて知りました。一度生きることを放棄したのに、今はもっと生きたいと願ってしまいます。愛する人を悲しませたくない、そればかり考えてしまうんです

泣かないと決めていたのに私の涙腺はいとも簡単に決壊した。溢れてくる涙を押さえながら呼吸を整え話をうつす。それでもうまく声にならなくてしばらく黙つたまま顔拭いていた。

私の意志を尊重して声をかけない彼に救われた。今手を差し伸べられたらきっと何も言えなくなってしまう。それでは意味がないのだ。

彼に言つておきたかったこと。

それを告げるのはもつと先でもいいかと思っていた。でも、必ず明日が来るとは限らない。

「彼の未来が…幸せで満ち溢れていることを願います。だから、貴史さん」

振り返つて彼の名前を呼んだ。突然だつたからだろうか、彼は少し驚いた表情で私をじっと見ていた。間があつてから「何?」と聞き返された。

「私の最期のときは、笑つていて欲しいんです。貴方の悲しい顔を見たまいまいきたくないんです。わがままを言つてるとわかっています、でも…それでも泣いて欲しくないんです」

できることならその悲しささえも早く消えてしまえばいいと思う。

彼には未来が待っている、そこに私はいないのだから。

形だけの婚約者のままなら決して思わなかつた。でも今は「愛されていゐ」という実感があるから、それを願つ。

「結華さん…それは約束できないよ。それにそんな先のこと、言って欲しくない。今は生きてるんだからその時間を大切にしよう? ほら、もう泣かないで」

「約束してくれなくてもいいんです。ただ、これが私の願いだつて知つておいて欲しいんですよ」

「うん、わかつた。わかつたから、もういいよ」

泣きじゃくる私をそつと抱きしめてくれた。

悲しませたくないという思いと、一緒にいたいという願い。矛盾していることはわかつてゐる。それでも私は彼から離れられない。暖かい彼の腕の中で、時間が止まつてしまえばいいのに、と叶うはずのない願いを唱えた。

気分が落ち着くと彼はその腕から開放してくれた。
もうひとつ、願いがある。それは彼とそして神父に聞いてもらいたい。

「貴史さん、そして神父さま…もうひとつだけ聞いて欲しいことがあるんですよ」

それが叶うかどうかはわからな」。

叶つたかどうかを確かめることもできない。

それでも神父は「確かに聞き入れました」と証明してくれた。それが私のたつたひとつの中の遺言となる。

「さあ、お茶を用意しますよ。」ひらへりついで

神父に促され教会の裏手に回った。

木造の平屋からは紅茶のいい香りが漂っていた。ふと見ると庭園に向日葵の花が咲いていて思わず足が止まつた。いつもの向日葵畑の花とは違ひ花も小さいし背丈も低い。

それでも風に揺れながら太陽を日指していた。その花を見ていたいと申し出ると庭でお茶が飲めるようにセッティングしてくれた。

輝く太陽の下、揺れる向日葵とともにほんの少しだけ現実を忘れて未来に想いを馳せた。

私の人生は人から見れば短いのかもしれない。それでも、最後だけは幸せだったと胸を張れる。だからもう後悔はしていない。

あの向日葵と同じように、太陽に恋をしてただ前だけを向いて生きていい。つ。

それがきっと私を愛してくれた彼の「願い」だろうから

「ここからはひとりで向かう。君はここで待つてくれ」

湖の辺に車を止めると、ひとり歩き出した。

この道をふたりで歩いたことが昨日のことのように思い出される。笑顔で思い出を話す彼女の後ろで自分はどうだけの幸せをもらつたのか計り知れなかつた。

あれから一年。

自分の心の整理がつかないままこの一年はあつといつ間に過ぎてしまった。

彼女は自分の未来が幸せに満ちているよう願つた。周りから見れば自分は「恵まれている」のだろう。だが彼女がいなくなつた今、それは本当の意味で「幸せ」ではない。

彼女が願つた未来を報告することはできない。それでも、今日といつ日はどうしてもこの場所へ足を運びたかった。

教会の前で神父は自分の訪問を待つていたかのように立つていた。ここへ来ることは事前に伝えていない。にも関わらずああして立つていてるところを見ると、彼もまた彼女の願いを聞き届けた証人なのだ。

「お待ちしましたよ、来栖さま。ああ、どうぞ」

神父とふたり、聖堂内には入らずそのまま裏手に回つた。庭に現れたのはあの日と同じテーブルセットだった。そのイスに座つて笑顔を向けている彼女が見えそうな気がした。時間があの日

に戻った気がして懐かしい気持ちが溢れてきた。

「この庭には彼女の好きだつたひまわりの花が咲いていた。彼女とよく散歩に行つたひまわり畑は、今年はもう花はなかつた。あの夏だけ特別に用意された場所だつたのだ。

ひまわりの正面のイスに座ると、神父は用意していたものを持って庭に出てきた。

「よくあの宗仁さんが許してくれましたね」

「そうですな、しかしこれが本人の希望ですから無下に断れなかつたんでしきう」

そう言つと小さなガラス瓶を自分の前に置いた。
彼女に会えた気がして涙が出そうになつた。

彼女は遺言として遺骨の一部を散骨して欲しいと言つた。
葬儀は長谷家本家で行われ埋葬も本家のしきたりにそつて行われるだろうと言つていた。だが「それじゃあ窮屈でしょ？」と一部でいいから好きな場所に葬つて欲しいと願つたのだ。

元々この地ならどこでもいいと言つていたのだが、この教会の裏手にひまわりが咲いていると知つた彼女は神父に申し出た。迷惑でなければこのひまわりの咲く場所に散骨して欲しい、と。

神父は一つ返事で承諾した。一周忌に本家から遺骨を分けてもらいたそれを散布する、それが彼女の遺言となり神父は証人となつた。
長谷家の当主がそれを簡単に許すだろうかと思つて危惧していたが取り越し苦労だつたようだ。

ビンのふたを開けると白く輝く粉が風に乗つて舞い散つた。

これで彼女は満足したのだろうか。だが、自分の心には引っかか

「結婚さん、約束を守れなくて」めん

「結婚さん、約束を守れなくて」めん

最期のとき、自分は泣きながら無理に笑顔を作っていた。

苦しそうに息をする彼女はそんな自分を見て微かに口を動かした。うつすらと田を開けながら確かに「ありがとう」と言つた彼女の最期は満足そうだった。

そして、どうしても彼女に言えなかつたことがある。父から出された条件についてだ。

「最後まで言えなくてごめん。でも、結華さん……僕はずつと君の事を……」

言おうとしたその瞬間、強い風が吹いて視界を遮られた。そつと田を開けるとひまわりの花がゆらゆらと動いていた。そして……

『いいの、貴方はこれからこの未来を生きて……』

彼女の言葉が聞こえた気がした。

さつとこれからもひまわりの花を見るたびに君の事を思い出すだる。

ほんのひと時、君と過ごした幸せな日々を決して忘れることはない。

愛している、今もたつたひとり、君だけを

【向日葵は太陽に魅せら

れて・完結】

Hプローグ（後書き）

本編はこれで完結になります。
最後まで読んでいただきありがとうございました。

『私、大きくなつたらあなたの奥さんになるのよ、よろしくね』

幼い頃、父に言われたことを鵜呑みにして決定したわけでもないのに相手にそう告げた。

彼は「何言つてるんだ?」と言わんばかりに怪訝な表情をしていたが特に気にならなかつた。栗色の髪に緑色の瞳。ただ見ているだけで私は幸せだつた。だから婚約者候補に挙がつたと聞いたときは有頂天になつていた。

それなのに、父が会社に残したのは多額の負債だつた。

その瞬間、私の環境は百八十度変わり、もちろん彼との縁談話も頓挫した。何でも叶えてくれた父は株主総会を前に失踪した。残された母とふたりの兄、そして私は家も財産も奪われた。辛うじて成人していった上の兄は会社に残ることができたが、新入社員同然の扱いだつた。私たちを養うために必死に働いてくれた。

自立して兄をサポートできるよつと国立大学の薬学部を卒業し、新薬開発部門に配属された私はただただ会社を取り戻すためだけに働いた。それが彼を取り戻す一番の近道だと信じていたから。

もちろん彼にはもう決まつた婚約者がいることは知つていた。それでも、そんなことで諦められるわけがなかつた。婚約中ならどういどもある、それを糧に彼との接点を探し続けた。

「ねえ、知つてる? 来栖さんつて婚約解消したんだって

「え? 今、何て…?」

「だからあ、来栖さん、下の貴史さんよ。何でも相手方から解消したいつて言つてきたらしいわよ? 詳しい理由まではわからないみ

たいだけど、噂はかなり広がってるわよ。それにすでに後釜を狙つてる人もいるんだって。なんだ、やっぱり由紀恵、知らなかつたのね？ 系列の会社だからてつきり耳に入つてるとと思つてた

はつきり言つて寝耳に水だつた。

来栖グループの傘下に入つてるとはいえ、彼の情報はなかなか入つてこない。兄の裕臣さんのことなら何かと話題にも上がるが、次男の先行きなど興味のない人間のほうが多いのだ。

だからなかなか接点を見出せないでいた。一人の兄は幹部にまで昇格していたが、私は未だに一研究員に過ぎなかつた。だが、このとき確かに野心に火がついた。

「全然知らなかつたわ… それにしても相変わらず湊は情報が早いわね、何？ もしかして狙つてるの？」

「まさかあ、うちはライバル会社よ？」 いくら相手が魅力的でもさすがに許してはもらえないわ。それにあの家つて上の裕臣さんもまだ結婚していないんでしょ？ 相手に悪いとか思わないのかしらね、言いたくはないけど貴史さんのことだつて実際のところはどうちが悪いのかわからないでしょ？ あたしならもつと妥当なところで手を打つわ」

湊の実家は総合病院を経営している。確かにライバルと言えばそうだ。だがその規模の違いから彼女が相手に指名されることはないだろう。来栖家はライバル会社だろうが利益が見込めそんなら取り込むくらいのこととする。

彼女は眼中にないとして、当面彼の候補に挙がりそうな令嬢たちの状況を把握しなければならないと思つた。いや、その前に私の立場を考えなければならない。

彼女はその後、まったく違う話を始めたが私はそれどころではな

かつた。彼女の話に相槌を打つてはいたものの、会話のほとんどは記憶に残っていない。ただただ彼のことだけを考えていた。一度は閉ざされた道、今度こそ彼にたどり着いてみせる。それも自分の力で。

「かず兄？ 話があるんだけど…今いい？」

自宅に戻ると休日ということもあって上の兄、一樹は自分の書斎にいた。仕事をしているのかと思いドア越しに声をかけてみたが、珍しく中には下の兄、尚樹もいてふたりで何か話しているようだつた。

私が入つても問題ないのだろうか、と思いながら待つていると尚樹がドアを開けてくれた。

「珍しいね、由紀恵が訪ねてくるなんて。まあちょっと良かつた、話したいことがあつたんだ。座つて」

「私に話し？ 何、仕事のこと？」

「相変わらず仕事にしか興味ないんだな、まあ由紀恵らしいけど」

クスクスと笑いながら尚樹が横から口を挟んだ。一人の話が終わつたから私は招き入れられたと思っていたがそうではないのだろうか。それとも尚樹にも関係ある話なのだろうか。

先に私の用件を聞かれたが後でいいと伝えると途端にふたりの表情が変わった。

「由紀恵…お前、今欲しいものがあるだろ？」「

とつさには理解できなかつた。

何のことを言つてゐるのだろう、今まで兄に何かを強請つたことはないように思う。が、自分がここに何をしにきたのか思い出した

時点での検討がついた。

実はそのことで来たと伝えると「やっぱりな」と尚樹が納得していた。と、いうことは湊から聞いた情報はまだ新しいものなのだ。兄たちの情報ルートは定かではないが、湊の言っていたことが嘘ではなかつたと証明されたようなものだった。

「そろそろいい時期だろ?... タキザワ製薬は来栖グループから独立するつもりだ」

現在、タキザワ製薬は来栖グループの傘下にある。

二十年以上前、父が負債を出して傾いていた会社の救済を申し出たのが来栖コーポレーションだった。まだ幼かつた私はその意味すらわからなかつたが、吸収合併を条件に資金援助を申し出してくれたそうだが自力で立て直したかった叔父は譲らなかつたという。それで折れた先方は傘下に入ることを提示したらしい。そこまでしてタキザワ製薬が欲しかつたのかと疑問だつたが、自分が研究者となつてそれも納得できた。

父の理念だつたのか新薬開発には特別に力を入れていた。当然、その設備も膨大なものだ。当時、ここまで設備が整つた会社はなかつたそうだから、おそらくは来栖コーポレーションもそこに目をつけたのだろう。後で知つた話だが、当時はタキザワ製薬を吸収しようという働きは他の会社でもあつたそうだ。

「叔父さんが、そう言つてるの？」

「いや、役員会で持ち上がつた話だ。叔父はもつと早くに独立を希望していたが、いろいろ面倒でね。先方に世話になつてはいる分、そつう簡単に提案できる問題でもない。だから時期を待つていたんだ」「今がその時期なの？」

なぜ「今」なのか検討がつかなかつた。

新薬の開発についてはかなり前から業績は上げているし、経営状態だつて悪くないはずだ。確かに叔父が早くから独立したいと言つていたのも頷ける。でも先送りにされた、では今回は誰に決定権があるのだろう？

そこまで考えて、ある結論に到達した。まさか、とは思つがそれ以外に考えられない。

「かず兄、まさか…」

「さすがに由紀恵は察しがいいね、そのまさか、だ」

「世代交代、といえばそれまでなのかもしれない。」

叔父は父の後を引き継ぎ会社を立て直すことに尽力した。その功績は称えられるものだらう。だが一方で叔父がいるがために来栖グループから抜けられないのも事実なのだ。

トップが替われば当然考え方も変わる。独立を提示するのに舞台を整えたいと「うわけだ。

「じゃあ、次の代表取締役は誰が…？」まさかとは思つけど、「そうだよ、兄さんがその座につくことになりそうだ。まだ決定じゃないけどな」

「ああ、次の役員会で叔父には退任してもうう予定だ。他の役員たちも同意見だから反対数は出ないだらう。株主からも委任状をもらつてゐるから、総会では独立に関する話を進めていく。だから由紀恵にもそのつもりでいてほしいんだ」

そこまで話が進んでいたことに驚いた。

兄ふたりはそういう場所に立つてゐるのだ。自分とは全然違う世界にいるような気がして寂しくなつた。兄を、会社を少しでも支えられるようにと研究に取り組んできたのに。

「やうでだ…由紀恵、お前上に立つ覚悟はあるか？」

予想外の台詞に思考がついていかなかつた。

ただの研究員である私が上に立つ？ それはどういふ立場なんだろ？

だが、迷いはなかつた。湊から彼の破談を聞いた時点でそれは必

然的だつた気がするからだ。

「…はい。兄さんたちの役に立てるなら」

「そうか、まあそれが「欲しいもの」を手に入れる最善策だろうからね。次の役員会、由紀恵にも参加してもらつからそのつもりでいてくれ。俺からの話はこれだけだ」

そう言って解散となつた。

突然自分の置かれている状況が変わつたことに驚いたが、二十年前の、あの日に比べれば良い変化だ。彼に近づいた気がして嬉しかった。

翌週。

最上階の会議室で行われた役員会に私も出席した。初めてのことでも不安だつたが尚樹が隣に座つてくれたこともあり緊張は次第にほぐれた。

叔父の退任話が持ち上がると場の雰囲気が変わつたが、叔父は特に表情を崩さず事務的に「次の世代に期待している」と語つた。会社のために尽くした叔父は、やはり会社のことを考えて去つていくのだと思うと言葉では足りないほど感謝していた。

会長には現副社長の大石氏が、社長に一樹が任命された。尚樹は常務に昇格し私は研究開発本部の部長に任命された。他の部署も新しい人事が任命され新しいスタートが切られた。

後は来栖グループから独立するだけだ。一企業として成せば彼と同じ場所に立てる。彼が他に相手を決めてしまう前に何としてでも自分がその座に着かなければ、そう考えていた。

それから間もなくして、私は意外な人物から呼び出しを受けた。

それは一樹の耳にも入つてゐるらしく、戸惑つてゐる私に「仕事

の話だ」と背中を押してくれた。

タキザワ製薬とは比べ物にならないほど立派なビル。その最上階にほどなく近い場所に案内された。ここが来栖コーポレーションの中心、いわば核の部分かと思いながら足を踏み入れた。

中には彼によく似た、だが彼よりも冷たい表情をした男性が人形のように隙のない笑顔で待っていた。子供の頃に何度も会っているが、相変わらず完璧すぎて恐い。

「よく来てくれたね、まあ立つてないでどうぞ」

来栖家の次期当主、裕臣だ。立場の違いからもう会うことはないだろうと思っていた人。この人に会えたということは、私は確実に彼に近づいていると確信が持てた。

「はい？ エット…それはどういう意味でしょ？」

裕臣との対面はまったく予期していなかつた話題を中心で、話を理解するのに少々手間取つた。

どうやら貴史の元婚約者である長谷結華は末期のガンらしい。本人は治療を拒んでいるらしいがそんなことは許されるはずもなく、長谷家の当主は頭を悩ませているらしい。

そんな中当の本人は別荘で残りの人生を過ごしたいと提案したそうだ。当主としては来栖コーポレーションが経営する総合病院に入院させるつもりが娘のわがままに振り回された。なんとか治療を条件に別荘行きを承諾したものの、さて治療をどうするかといった問題が浮上した。

そこでまたまた来栖コーポレーションの出番だ。

医師と看護師、そして医療道具一式を別荘へ設置し治療できるようセッティングした。すべての準備が整い彼女はいよいよ家を出るらしいのだ。

そこまでの話は自分には関係のない話だと思い聞いていた。だが、彼は私に担当してもらいたいと申し出たのだ。

「そのまま、なんだけどね。彼女は治療する条件をのんだが、本当に応じるかどうかはわからないそうだ。抗がん剤の副作用は強く出るものがあるから本人が拒否すれば投与し続けることは難しいだろう？ だからなるべく副作用の少ない薬を使って欲しいというのが当主の言い分だ。それに、彼女が末期ガン患者だというのを隠しておきたいらしい。そういう意味で彼女を担当する人間は信頼できる者に、こういうのもあつてね。君なら薬の知識も豊富だし、口は堅い

だから安心して任せられると思つたんだ

どうして私が、と思つたが表情には出さないようこした。

彼女には何の非がないのはわかっている。が、彼の婚約者だった
というだけで嫌悪感が増す。それなのに担当になれという裕臣の考
えがわからない。それなら口の堅い営業担当をつけさせる。

その思惑が読み取られたのか、裕臣は冷ややかな笑みを浮かべて
「断る権利はないと思うが」と言い放つた。

「…どういうことですか？」

「…いろいろ聞いてはいるが、タキザワ製薬はまだ来栖グループの傘
下にある。だからこれは命令だと思つてくれて構わないよ？ それ
にこのことに関しては一樹社長にはもう通してある。君の一存では
どうにもならないよ。ああ、それと…貴史に会つ機会だと思つてく
れでいい」

思いがけず彼の名前が出てきて明らかに動搖した。

これが彼に会う機会とはどういうことなんだらうへ。元婚約者の
担当をすることと彼にどんな接点があるんだろう、もしかして彼も
その別荘とやらで出向くのだろうか。だったら余計に断りたい。

「あの…貴史さんも、その別荘へ行かれるんですか？ 破談になつ
たというのに？」

「いや、あいつはまだ何も知らない。行くことになるかもしれない
が、今のところはなんとも言えないんだ。そもそも貴史は彼女が末
期ガンだということすら知らないからね

意外だった。

彼が知らないことを裕臣が知っているということにも驚いたが、
彼はそもそも破談の理由すら聞かされていないらしい。そもそもが

形だけの婚約者であつたため、そこまで関心がないのだという。

私の記憶にある彼とはかなり違つていた。ここまで相手に関心の持てない人ではなかつたはずだし、いくら家同士で決められた相手だからと言つて、そこまで嫌う必要があるとは思えなかつたからだ。

何かあるのか、それが結論だつた。

だが、それ以上踏み入つことは聞きだせず、疑問が残るままビルを後にした。

彼女の担当に指名されたと報告すると、一樹はただ頷いて聞いているだけだつた。知つていたのだから反応がないのも無理はない。今後のスケジュールを確認していると不意に質問された。

「由紀恵…お前、愛がなくても結婚できるか？」

「かず兄？ 何、急に…」

「ああ、違うか…相手にお前を想つ愛情がなくても、と言つたほうが正しいかもしないね。どうなんだ？ 一方的に想いを寄せているだけの相手と結婚できるのか？」

それが彼のことを探してゐるのだとすぐにわかつた。

何を今さら、というのが素直な感想だ。子供の頃、彼の婚約者候補に挙がつたときから相手の気持ちなんて期待していなかつた。本人の意思是聞き入れられない世界、親の、家の都合で婚姻が結ばれていく閉鎖的な環境の中で、相手に愛情など期待してはいけなかつた。

自分が想いを寄せているだけで十分幸せだつた。私は自分の愛する人と一緒にいられるのだからそれ以上何を望むことがあるのか。自分本意で相手のことを考えていないと言われればそれまでだが、まわりにはどちらにも愛情のない婚約が成された例も聞かされていたから、それに比べればまだ恵まれたほうだと言い聞かせていました。

「私…もつ愛だの恋だの、そんなものに夢見る歳じゃないわよ？
ただ彼を手に入れたいだけ。そのためならどんなことでもするわ」

彼が誰を想つていようが、誰も想つていなかろうが関係ない。

ただ私のそばにいてくれればそれでいい。一度は切れたと思った
ふたりの糸は、今度は強引にでも結んでみせる。それが彼の本意で
はなくとも。

彼との再会を果たしたのは皮肉にも彼女の別荘でだった。まさか私に会うと思っていなかつた彼はずいぶん驚いていたが、さらつと受け流していた。彼はまだ知らないことが多すぎる。すべては仕組まれた上のことだというのに、それすら気が付いていないのだから。

警告のつもりだった。彼女を引き合いで出せばここから去るという選択をしてくれないだろうかと、淡い期待を寄せた。だが、逆効果だつたようで再会したあの日以来、彼が実家に戻つたと知らされるることはなかつた。

そのときに覚悟した。彼の心は決して自分のものになることはないと。

「なかなか、話が進まないな」

「無理もないだろう? 二十年以上融資し続けてきた会社だ、そう簡単に手放すようなことはしないだろう。焦ることはない、そのうち突破口が見つかるわ」

「兄さんは呑気なんだよ、今のところ向こうの条件といつちの条件が合わないじゃないか。せつかく新体制になつたのに…それに、美咲さんのところだつていつまでも黙つていらないだろ?」

来栖グループからの独立は思つたよりも時間がかかつっていた。一樹の言つとおり、そう簡単に手放せるくらいならとつぐに見限られているだろう。今まで、いや今でも傘下に置いているということはグループにとつて利益があるということなのだ。

そして尚樹の言つ「美咲さんのところ」とは一樹の妻・美咲の実家である。旧姓、今泉美咲は旧財閥系の家系の令嬢で、独立した後の資金面は彼女の実家が全面的にサポートしてくれるらしい。新体

制、そして今泉家のバックアップがあるからこそ、今独立を目指しているのだ。

「まあ、こざとなれば由紀恵がいる」

その言葉の意味を、私は数日後に知ることになる。

しばらくして、動きがあった。来栖コーポレーション側から条件の提示があり一樹に呼び出された。どうやら会社を通してではなく、来栖家から直に申し出が来たらしく、内容を聞かされて驚いたが、私が最後の手段と言った一樹の言葉の意味が納得できた。

「近々、先方がお前に会いたいと言つてくるだろ？ 頭合わせだと思つていい、ただ本人は来ないようだ。まだ知らせていないということらしいからね」

「何も知らないってこと？ そつ… 今度も彼は親の言つこと逆行られないのね」

「ああ、でもそれを由紀恵が気にすることはない。かえつて好都合だろう？ しつかり頼むね」

やつと、彼に繋がる糸を掴んだ気がして嬉しかつた。彼の意思是尊重されないことになるのだろうがそれでも構わなかつた。どんなに嫌われてもどんなに無関心でも、私は彼のそばにいられる。それだけで十分、欲しいものは手に入つたも同然なのだから。

きつと私は結華に敵わない。死んでいく人間に勝てるものなんているはずもない。きれいな思い出だけを残して去つていくのだから。彼は一生、彼女との幸せだった日々だけを胸に刻んで生きていくのだと思う。他の誰にも心を開かずに、そのうち何に対しても想いを寄せていたのかもあやふやになる記憶だけを頼りに。

それでも。

彼の隣に立っているのは私。

この先も生きて、彼の未来を見ることができ。それだけが唯一の優越感だ。

来栖家の当主との対面は翌々日に場が設けられた。

そこにいたのは彼の両親と裕臣、そしてこちら側は私とふたりの兄。一般的には主役が抜けている奇妙な集会に違和感を感じながら一樹は話し始めた。

「わざわざお越しのうえありがとうございます。ところで…肝心の『ご本人』がいらっしゃらないようですが、話を進めさせていただいてもよろしいのですか？」

「ええ、構いませんよ。弟には事後報告でも問題ありませんから。今日は由紀恵さんの意思を伺いに来たんですから、『ご心配なく』

「それはよかったです。そう聞いてうちの由紀恵も安心しますよ」

一樹と裕臣は似たような、冷たい笑顔で話し始めた。どちらも腹の探り合い、といったところだろうか。うかつなことを言って揚げ足を取られても元も子もない。私は黙つてそのやり取りを聞いていた。

本来ならこれは「政略結婚」というものだ。タキザワ製薬を来栖グループから独立させることを条件に私は「人質」として来栖家に嫁ぐ。血縁関係を結んでしまえば下手なことはしないだろう、というのが先方の読みだ。

経営陣が変わればそれも意味を成さなくなるが、現段階ではそれは考え難いことなのだろう。だからこそ先方は条件として掲示してきたのだ。

そしてこれを「政略結婚」と認識するのは彼、貴史だけなのだ。

私は合意の上、もつと言えば自ら望んだ」とと言える。先方もそんなことは百も承知なのだろう。

私の意見を聞かれた。迷うことなく答えることができる。

「私に異議はありません」

彼はこの話をどのように聞かされるのだろうか。
きっと今の彼にはそれを判断する思考力はないだろう。それでも構わない。

こうして私は、彼の「一番目の婚約者」となった。
彼の心は手に入らない、それを不幸だと言う人もいる。だが私にとっては幸せ以外の何物でもない。彼が他の人との思い出に浸つても、そのすべてを私は愛していく。

もう、誰にも邪魔はさせない

私が愛した人は、私ではない別の人を見ていた。

最初から手に入らない彼の心。それなら誰にも心を開いて欲しくなかつた。それなのに彼はある少女にあっけなく心を奪われた。その日から私の心に何かが棲みついた。

それは、もしかしたら嫉妬という名の悪意、だつたのかかもしれない……

＊＊＊

「聞きましたよ、また結婚式が延期になつたそうですね？ 汐梨さま」

彼の専務就任パーティーと、言つてもごく身内での食事会だけに出かけるため馴染みの美容室で髪をセットしてもらつているときのこと。どこから仕入れた情報なのか、彼女は半分は興味本位に、そして半分は心配を匂わせる言い方で聞いてきた。本当のことだし隠すことでもないので「そうよ」と軽く答えてみた。

あつさり認めたことが意外だったのか、鏡に映つた彼女は「あれ？」というような表情をした。私にとつてはたいして気にならない事実でも、他の人にとってはそうではないのかもしれない。

「何？ 私、変なこと言った？」

「いえ… 気にされてないんですか？ これで二回目ですよ？」

「いいのよ、結婚式の時期なんて気にしてないわ。それに彼は忙しいんだもの、待つてあげることも大切でしょ。彼を相手にいちいちそんなことで沈んでいるほど暇じやないわ」

彼女の言つとおり、結婚式が延期になつたのは一回田。一回田は私から延期を申し出た。理由はなんてことない、私の子供っぽいわがままが原因だ。彼があの少女に心を奪われたと知り彼を困らせたかったのだ。あの時は私も大学を卒業したばかりで、大騒ぎするところじゃないと思っていた。

両親には理由を告げることなく「今はイヤ」と駄々を捏ねた。子供の頃から甘やかされて育つた私のわがままであっさり承諾され、思惑通り結婚式を延期することに成功した。但し、彼の家にどう説明したかまでは知らないけれど。

そして今回。

私の年齢を考えて、子供を作るならそろそろ式を挙げて一緒に暮らしたほうがいいのでは、と両家から提案されこの春、挙式をする予定だつた。けれど彼が専務に昇格することになり膨大な業務に追われる中まとまた休みが取れないという理由で、彼のほうから延期を申し出されたのだ。

たぶん本当の理由は他にある。それでも聞き出すよつなことはせず黙つて承諾した。一回田のことがあつたためか両親も渋々了承した。

「次のご予定は？ もうお決まりですか？」

「一応ね、秋になつたら仕事が落ち着くだらうからその予定よ。日程が決まれば連絡するわ。私の希望は変わらないからそのつもりでいて」

彼女は「わかりました」と短く答え、セットを仕上げると外まで私を見送つた。

外で待機していた車に乗り込むと行き先を告げるまでもなく、運転手は黙つて領き車を走らせた。

パーティー会場は来栖家の別邸で行われる予定になっていた。

エントランスを抜け大広間へ向かうと予想以上に人が集まつて驚いた。けれどこんなことでいちいち困惑していられない。元々は少数で行うはずだったものでも、話は広がりそれなりのパーティーになることなど決して珍しくないからだ。

広間の入り口付近で周りを見渡していると、すぐに彼が気が付きエスコートしてくれた。その隣を優雅に歩いていく。これが偽りの笑顔だなんて気が付く人はいないだろう。そう、彼ですら。

「遅かったね、道路が混んでたのかな？ もう少し待つて来ないようだったら連絡しようと思つてたんだ」

「ええ、美容院から来たからちょっと混んでたわ。おじさま達は？ ご挨拶しなくっちゃ」

「向こうで会長たちと話しているよ、行こうか」

会長は彼の祖父に当たるが、彼は一度として「祖父」という代名詞は使わない。それは父親に対してもそうで会社での立場が優先されるためか役職名を口にすることが当たり前になっていた。その流れか、まだ入籍をしていないためか、私も「義父」とはなかなか呼び未だにおじさまとしか呼べないでいる。

近づいた一族の中に彼の弟がつまらなそうな顔をして立っていた。話に加わるわけでもなく離れるわけでもなくだ。いつもは隣に婚約者がいたが今日はひとりで立っていた。

どうしたのだろう？ そう思つたが先に挨拶する人間がいる。そ

う考え義弟の前を通り過ぎ頭を下げた。

「おじさま、遅くなりました。本当ならわたくしがお迎えしなければならない立場なのに、申し訳ないですわ」

「ああ、汐梨さん。いやいや今日は私が開催したものだからね、ゆっくり楽しんでくれていいいんだよ。裕臣が不甲斐ないばかりに汐

梨さんには迷惑をかけるね

「いえ、わたしは裕臣さんについていくだけですから、ねえ？」

表面上の挨拶を黙つて聞いていた彼は、私に同意を求められても顔色ひとつ変えずにっこりと微笑んだ。すべてが虚構の上に成り立つてゐる関係だ、誰もが本心を隠している。溜め息が出そうになるのを抑えてその場を立ち去ろうとした。他にも挨拶をする人は数え切れないほどいる。

だが、ふと視界に入った義弟の態度に不自然さを感じ、思わず口走つた。

「裕臣さん、今日は貴史さんのお相手…なんて言つたかしら、ユカ、さん？ 彼女は来ていなかっしゃる」

「ああ…彼女か。汐梨には言つていなかつたかな、貴史のことは、破談になつたんだ」

「…え？」

まさかそんなことがあるはずがないと思つていたからだろうか。一瞬彼の言つていることが現実ではないような気がした。

「どうして言つてくれなかつたの？」

パーティーが終わつた後、すぐに彼とふたりきりになつた私は攻め立てるようくに問いただした。実のところ、そのことが気になつていてパーティーの間も心ここに在らずだつたのだ。

他の誰が破談になるうが興味はないし関係のない話で片付けられるが、今回ばかりはそうもいかない。義弟だから、ではない。長谷結華という女性がフリーになつたことが腹立たしいのだ。自分たちよりも先に入籍してもらいたかつたといふのに一体何があつたのと、いつのだろう。どんな事情があるにせよこんな形で報告されたことに苛立つていた。

「すまない、折を見て話そうと思つていたんだ。良い話ならまだしも悪い話だからね、言つのが遅くなつて本当に悪いと思つてゐる」

「もう少しで本人に尋ねるとこひだつたのよ？ ほんと、恥かくところだつたわ」

ハつ当たりもいいくことだ。それでも彼は黙つて私の言い分を聞いていた。

彼が彼女、結華に心を奪われたと知つたのは割と早い時期だつたよづに思う。当時高等部に上がる頃だつたと思うが珍しく彼が弟の話をしていた。何かいいことでもあつたの、と聞くと許婚が決まつたのだと答えた。噂では滝澤家の末娘が候補に上がつていると聞いていたためそこに落ちついたのかと思つていたが、会社云々の件で流れたらしい。

家柄だけで嫁ぐ私にはその辺りの情報に疎い。良かつたわねと話

を切り上げようとしたとき、彼が写真を見せたことで驚いた。

はっきり言って彼は人に興味を持たない。もつと言えばその人個人には関心がないのだ。彼にとつて肝心なのは自分にとつてその人がどのくらいの価値を持っているのか、それに限る。嫌な言い方をするべきどのくらい利用価値があるのか、それが基準になっているのだ。

だから、そんな彼が弟の相手に関心を持っていると知つて意外な感じがした。自分の義妹となると話は別なのだろうかと、一瞬彼の人間性に期待した。

だが、その写真を見ている彼の顔は今まで私が見たことのないような表情をしていた。私にも向けない優しい笑顔、そして時折悲しそうな、苦しそうな表情を見せた。

もしかして、彼女に恋をしているの…？

それが私の直感だつた。いや、まさかと否定してみたもの一度持つた疑問はそう簡単に消えてはくれなかつた。それからというものの、彼は時折嬉しそうな顔をして彼女の写真を見ていた。いくら私が世間知らずでも彼の心境の変化に気が付かないほど鈍感ではない。ほどなくして彼の本心を知つてしまつた私は、彼を愛せなくなつた。

「それで？ 破談だなんて、よくおじさまが許したわね。まさか貴史さんに落ち度があつたのかしら？」

「いや、そういう訳じゃないんだ。まあ縁がなかつたつてことだよ」

「なにそれ、ずいぶん勝手な理由ね。だつたら私たちもとつくに破談になつていいくはずよ？ 二回も結婚式を延期してんだから」

「なに言つてるんだ。それとこれとは話が違うだろ？ さあそんな顔しないで…せつかくのキレイな顔が台無しだよ」

そう言つて彼は頬に手を添えキスをしてきた。

もう何も言わさないつもりなんだろう。まあ、いい。破談になつた理由はどこからでも収集できるだろう。彼が言わないなら自分で調べるまでだ。そんなことを考えながらその夜は彼に抱かれた。

* * *

数日後、友人とランチをしているとニーチコリ笑つて頭を下げる女性と目が合つた。誰だつたか思い出そつと記憶を巡らせていると、隣に座つていた香純のほうが私よりも早く気が付いた。

「長谷先輩、お久しぶりです。いつ戻つてきたんですか？」

「もつ、「長谷」じゃないわ、昔のクセが抜けないのね。先週ねこつちに戻つてきたの。今日は時間があつたから久しぶりに来てみたのよ。ふたりとも元気そうね」

香純は「そうでしたね」と言いながら近況を聞いていた。

結華の姉、長谷京華今は鷹取京華だが、は私たちの先輩だつた人で今はロスに住んでいるらしい。学生時代は交流があつたが卒業後は疎遠になつていた。といつても、香純はたまに連絡を取つてゐるようだ。彼女の妹が私の義妹になつていたというのに疎遠だなんて奇妙な話だが。

「一うちに戻つてくるなんて珍しいですよね？ 何かあつたんですか？ ああ、もしかして妹さんの結婚式とか？」

「それならいいんだけど…残念ながら別の用なの。まあ妹のことは変わりないけど」

一瞬、彼女の表情が曇つたのを見逃さなかつた。

ちらつと私の顔を見て「あなたは知つてるわよね」と言われた氣

がした。気が付かないフリをしてやり過げたが、彼女が去った後もそれがずっと頭に残っていた。

おそらく破談の理由は結婚のほうにあるのだ。わざわざ嫁いだ姉が帰つてくる理由、それを考えていたが思い当たるようなことは浮かんでこなかつた。

「やつぱつあの尊、本当なのね」

そんなことをぽんやり考へて居るとき、香純が不意に尋ねてきた。だが、その意味が理解できず何の話をしているのだろうと首を傾げるといつまかしてもダメよ」と言われた。そして彼女は私の知らない事実を淡々と話し始めた。

「香純、それどこから聞いた話なの？」

「え？ 結構噂になつてゐるわよ、なんでもタキザワ製薬と口裏合わせて治療してゐつて話じやない？」

どうやらそのタキザワ製薬に勤めている友人の情報だといつからただの噂とは言い難い。長谷家の末娘の治療状況など、一介の社員に伝わるはずもないのだから。

彼が言葉を濁した理由がわかつた気がした。さすがに思いを寄せる女性が「末期がん」だなんて言いたくなかったのだろう。彼はこの事実をどう受け止めたのだろうか。弟のものにならない安堵か、それとも彼女がいなくなることへの絶望か。

どちらにしても私には関係のない話だつた。

義妹になつていれば知らん顔もできないが、婚約中でしかもそれが破談になつたというのなら接点がないにも等しい。

彼の心にはまだ結華が棲みついているいるだろうが、一人であつたり、嬉しそうに彼女の話をする彼の姿を見なくてよくなるのかと思うと、かえつて気分は良いほうだつた。

* * *

「申し訳ございません、只今専務は来客中でして…お会いいただくことはできません」

挙式の日程と会場の確認をするために彼と会う約束をしていた。そのために会社まで來たというのに会えないと言われ「はい、そうですか」と帰るわけにはいかない。

他に予定はいれないでと念を押していたし、急な会議なら秘書がこんな言い方をするはずがない。もしかして、と思うより早く、秘書の制止も聞かず専務室へ繋がる扉に手をかけていた。

「あら、失礼」

「し、汐梨：ノックもなしで入ってくるなんて非常識じゃないか」

「そう？ したつもりだったけど、お話に夢中で聞こえなかつただけじやないかしら」

彼の前に座つて『彼女』にちらつと視線を向けた。居心地の悪そうな顔をして座つて『彼女』は「お久しぶりです」と優げな笑顔を見せながら頭を下げた。

その姿が妙に腹立たしく感じる。彼女は枯れることなく、美しいまま落ちるのかと思うとひとときわ苛立ちが募つてきた。けれどそんな思いは微塵も見せずニコニコりと笑つてやり過ごす。

「お久しぶりね、結華さん。急用だつたのかしら？ 今日は裕臣さんと約束していたの、よろしければ席を外してくださいないかしら？」

「汐梨、そんな言い方ないだろ？」

「…いえ、いいんです。裕臣さん、お忙しいのにありがとうございました」

彼女は深々と頭を下げるといつた。

そんな彼女を外まで見送りに行つた彼のことが気に入らず、ソファで待つていてる間もイライラしていた。大人げないことをしているのは百も承知だ。だが、そんな理性が利かないほど私の心には黒い渦が巻いていた。

しばらくして戻ってきた彼の顔は「いつも通り」完璧に作られた表情だった。何を考えているのか読み取れない、相手の警戒心を解

く微笑みで私に近づいてきた。

「悪かったね、汐梨。先に君と約束していたといふのに、気を悪くしないでくれ」

「…いいのよ」

「どうか、じゃあ行こうか」

そのさわやかな笑顔とは裏腹に、瞳は鋭く光っていた。どうやら私は彼の機嫌を損ねたらしい。何も言えないまま披露宴会場となるロイヤルホテルへと連れて行かれた。

彼は滅多に感情をあらわにしないが、私の前では別だ。いや、本心を隠したままだから本当の意味での感情かどうかは怪しいが、それなりに喜怒哀楽を表現する。その中でも手が付けられないのが「怒」だ。彼の場合、静かに感情を震わせているため治まるタイミングがつかみづらい。

こうして瞳の奥が鋭く刺さるような視線を送っている間は逆らわないほうが身のためだ。ただ彼の怒りの感情が消化されることを待つことが最善の選択だ。

でも、つまらない。

ホテルの総支配人と何人かのスタッフが会場を案内している間、彼は私に冷たい視線を向けたままだった。周りから見ればごく普通のカッフルに見えるかもしれない。でも本人たちの間には見えない壁がある。それはこの先も超えることはできない。

でもそれは何も私だけに限った話ではないと思っていた。所詮は両家の間で取り決められた縁談、相思相愛を求めるほうが困難だろう。そんなことを考えながら偽の笑顔を浮かべながら彼の後ろをついて歩いた。

「日取りはいかがなさいますか？ 十月下旬か十一月上旬でしたらこちらの会場でご用意できますが」

「ああ、そうだね。そのくらいだと都合がつけやすいかな、汐梨のほうはどうだ？」

「え？ ええ、わたくしは構いませんわ。あなたの予定にあわせますから決めていただいてよろしくてよ」

「そういうことだ、支配人。よろしく頼むよ」

私の返答はぱざり満点だったようで彼の表情も幾分か和らいでいた。

今度こそ何があつても挙式は決行されるだろう。それまでに彼の心から「結華」を追い出さなくては。そうでなければ私は彼を愛せない。

予定された日時を確認しながらよほど花嫁の思考とは程遠い、黒い渦の深くに呑みこまれていった。

挙式、披露宴の日時を決めてからと言つもの、何かと邪魔が入り彼と会えない日々が続いていた。

と言つても、あれから結華が彼に会いに来たという話は聞いていないし多忙な彼がわざわざ彼女に会いに行っている可能性も少ないだろう。ただ、それに反して弟の貴史と会う回数が増えているのがなんとなく気になる。ふたりで何を話しているのだろう、情報が欲しいがふたりの会話が漏れてくるはずもなく苛立ちばかりが募つていた。

そろそろ披露宴の招待者を決めてもらわないと。

一度目、そして二度目は招待状を出す前に延期が決定した。そのため招待者リストの最終確認をするのは今回が初めてだ。私が確認できるのは自分の友人だけ、こちら側からの招待のうち半数以上は父の知り合いと言つてもいいだろう。

リストを持つて父の書斎に向かうことに決めた。だが、なんとかその足は重い。きっとまた、早く花嫁姿を見たいだの、孫の顔を見るのが先送りになつただのと小言を聞かされることになるに違いない。はあ、と溜め息を吐きながら長い廊下を歩いた。

「お父さま、今よろしいですか?」

「ああ、入ります」

「あら、お仕事中だつたんですね。お邪魔してよろしいのですか?」

「構わないよ、たいした仕事じゃない。今は汐梨の話のほうが重要だろう、披露宴の日時が決まつたそうじゃないか。いや結構、結構」

父はいつになく上機嫌だつた。これで招待者リストの確認をお願

いすればさりに機嫌は良くなるだろ？。だが、それに反して私の心は重い。いつも彼との婚約を破棄したいと言えればどんなに楽だろうか。今の彼は私が「愛した彼」とは遠くかけ離れている。なら私が変わらなければいけないのだろうか。

いつまで経つても、答えは出ない。

「それってさ、マジックブルーじゃない？」

香純にそれらしいことを話すと特に驚いた様子もなくあっけらかんと答えた。

相談する相手を間違えたかとも思ったが、友人の中でも一番近況を知っているし何より話しやすい。学生時代からずっと私と彼のこの成り行きを見てきたから、もっと違う反応があるかと期待したが見当外れだったようだ。

「そういうことじや、ないのよ」

「そうね、私もそう思つてたわ。拳式が近くなると、この人でいいのかなあつて思つちゃうわけ。ほら、自分の意思とは別に周りが動いたりするじゃない？ 段取りばつかり決まつていつちゃつてこつちは全然ついていけないのよ。それに相手は結構無関心だつたりするでしょ？だから余計に不安になつたりするのよね。でも大丈夫、そんなのすぐに忘れちゃうから

「香純、あんなに幸せそうな顔してたのにそんなこと思つた時期があつたの？ なんだか意外ね」

「まあ花嫁なら誰でも通る道ね」

そう言つて香純はクスクスと笑つた。

彼女はもちろん親の決めた相手と結婚したわけだが、どういうわ

けかお互いに恋愛感情を抱き、おまけに子供ができると予定より早く挙式に至った。

私たちと同じように不満を抱えながら結婚するものだと思い込んでいたためかなり意表をつかれたが、それも香純らしいと心から祝福した。

「汐梨の場合、昔から片想いだもんね。あたしなんかよりずっと不安が大きいかもしないわね」

「まあ、そうね」

「でも結婚して何年か経つと、大恋愛した夫婦ですら冷めちゃうんだから割り切っちゃったほうが気が楽かもしないわよ？ 最初っから冷静なほうが穩便に過ごせるかもしないでしょ」

「何？ 経験談なの？」

「まさかあ、聞いた話よ。あたしたちはまだラブラブなんだから」

すっかり惚氣られて反論するのがバカバカしくなってきた。

香純の言つとおり、私はずっと彼に片想いをしてきた。それはもう過去形であつて現在進行形ではない。それでも彼女はまだそう思つていいようだが。

学生時代のまま片想いのほうがずっと楽だったように思う。それなら自分の気持ちだけで相手と一緒にいられるし、あの頃の気持ちのままなら彼の心なんて気にならないからだ。でも、だからといってあの頃に戻ることはできない。

香純たちのように、何でも打ち明けることができれば状況は変わるかもしれないが、彼は決して本心を口にしない。だから自分だけが取り乱しているようで余計に気分が悪くなる。

はあ、と溜め息を吐くと「元気出して」と励まされてしまった。仕方がないのでその場は無理やり笑顔を作つて話を切り替えることにした。

店を出て歩いていると見覚えのある車にすれ違った。

あれは確か貴史の愛車だつた気がする。平日のこんな時間にすれ違うのは不自然な気がした。気のせいかと首を傾げたが、数メートル後方で停車し中からしてきたのは紛れもなく貴史本人だった。

こんなところで何してゐるのかしら…？

仕事中に外出してきた、という感じでもなさそうでびむらかと言ふとオフのような格好だ。そのまま見ていたが私のことには気が付かずビルの中へと消えていった。

しばらく監視してみようと思ったが一緒にいる香純がそれを許すはずもなく、ほどなくしてその場から離れることになった。だがその後も何かが引っかかるって彼と貴史の顔がぐるぐると頭の中を回っていた。

「どうしたんだい？ ほんやりして。何か考え方でも？」

そう言われてハッと我に返った。

食事中にも関わらず意識は別のところに向いていて、気が付けばずいぶんナイフとフォークを持ったまま微動だにしていなかつたらしい。彼の声で呼び戻されたはいいが、言い訳が思いつかない。ひとまず笑顔を作つて「いえ、なんでも」とじりおかしてみたが、果たしてうまくいったかどうかは不明だ。

「披露宴のことは全部汐梨に任せきりだからね、疲れてるんだろう。もう少しで仕事のほうも落ち着くだろうから、それまで我慢してほしい。時間が取れるようになれば俺も手伝つよ」

「ええ、でも無理しないで。いいのよ、どうせ私は特にすることもないんだし。自分の挙式だもの、毎日楽しくて仕方ないからこよ。そつそつ、今日は衣装合わせのときの写真を見てもらおうと思つて……これなんだけど」

「それなら後でゆっくり見せてもらひつよ。ほり、料理が冷めてしまふよ」

珍しく仕事終わりに食事をしようと誘われた。着いた場所はいつも通りロイヤルホテルの最上階にあるレストラン「ラ・ルナルージュ」だ。何も言わなくともワインと料理が運ばれてきて食事が終わればロイヤルスイートルームへ戻る。もう何度も繰り返したいつのパターンだった。

彼から誘われることは滅多にない。今日はいつもと違つた彼の姿が見られるかと期待して来たがどうやら見当違いに終わりそうだ。披露宴の話にしても表面上取り繕つた感じで、本心では興味がない

のだろう。食事を楽しむ気分になれず結局ほとんど残してしまった。

部屋に戻つて夜景を眺めているとバスルームから無防備な格好で出てくる彼の姿が目に入った。上半身は裸で髪もまだ濡れている。私がベッドルームにいるのが意外だったのか、すぐに表情を変えて柔らかい笑顔を向けた。

相変わらず卑怯だな…。

たぶん彼に言い寄られて落ちない女性はいないだろう。それほど彼は完璧で隙がない。無造作に揺れる濡れた髪さえも彼の美しさを引き立てる。デスクワーク中心なのに引き締まつた体はどうで手に入れるのだろうか。それでも「美しい」という感想と「愛しい」という感情は結びつかない。

「向こうで待ってるよ」

扉の向こうにあるリビングルームに向かう彼の背中を確認して、バスルームへと入つていった。

ひとりでウイスキーを飲みながら何を考えているのだろう。私のことではないのは確かだろう。いつか、いつの日か私のことを思つて考えてくれるのだろうか。そんな期待をした自分の想いを払拭しようと頭からシャワーを浴びた。

「そういえば、この間…貴史さんを見たわ」

「…どこで?」

「中央通りで。珍しくラフな格好だったから見間違えたかと思ったけど、確かに貴史さんだったわ」

ワインを飲んでいた彼の表情がほんの少し曇つたのを見逃さなかつた。

もしかするとまざいことを言つたのだろうか。そう思い様子を窺

つていて、「人違ひだろう」と短い返事が聞こえてきた。見間違いでないことは私が一番知っている。だが、彼が違うと言つならそういうことにしておかないといけないのだろう。

「それより、さつき言つていた写真見させてくれないのか？」

「あ、そうね。ちょっと待つてて」

この話は終わりだと言わんばかりに切り替えられた。

仕方なくかばんに入っているデジカメを持つて彼の隣に座る。ふたりきりのときにこうやって並んで座ることが少ないため距離感に困る。ぴったり引っ付くわけでもなく、半身程度の間を空けてしまった。

不自然だな…。

そう思いながら距離を詰めることもできず、衣装合わせで着た着物やドレスの写真を見せた。感想は聞くまでもない、きっとありきたりな「キレイ」とか「似合つている」とかそんなところだろう。

「いいんじゃないかな」

「あなたの衣装のこともあるから、そろそろ決めないといけないわね。衣装合わせには行けそうかしら?」

「俺の分は汐梨が合わせて選んでくれていい」

「そうはいかないわ、サイズは合わせてもらわないと。ある程度は用意しておくから、ね?」

「…そうだな。スケジュールを調整するよ」

期待はできないと思いながらカメラをテーブルの上に置いた。

彼と目が合つた次の瞬間、抱きかかえられてベッドへと運ばれる。特に驚きもしなければ抵抗もしない。横たわった私のバスローブを剥がすと首筋にキスされた。

冷たい視線。それを見るのがイヤで目を閉じた。そしてそのまま

夜が過ぎるのを待つた。

朝、目が覚めるとベッドに彼の姿はなかつた。

時刻は九時を少しまわっている、もう出社したのだらう。起こしてくれてもいいのに、そう思いながらバスルームに向かつた。起きすも何も、夫となる彼より先に起きて見送らなければならない立場になるといふに情けない話だ。きっとまだ彼の妻になるという自覚が足りないのだろう。

シャワーを頭から浴びながらぼんやりしていると涙が溢れてきた。

こんなところで泣いても仕方ないのに。

もう愛していないと思っていた。

私を見てくれない彼に慕る想いは断ち切れたんだと思い込んでいた。

でも違っていた。私の心の奥底には彼を慕う愛情と言う重い感情が根強く残つていた。簡単に消し去ることはできず、光の当たらない闇の中でじつと静かに留まつていた。

それなのにもう我慢できなくなつて溢れ出てきてしまつた。鏡に映る自分の顔は別人のように冷静さを失つている。

「こんなことでしか意思表示できないなんて…。

致命傷にならないことは十分承知している。ただこいつあることですか自分を保てなかつたんだとも思つ。しばらくシャワーに滲む血を見ていたが、ゆっくりと目を閉じた。

目を開けると白い天井が見えた。まだ頭がぼんやりしていてここがどこだか理解するのに時間がかかった。部屋の中がやけに明るい、もう一度目を閉じて整理しようとしたとき、誰かが覗き込んだ。

「お田覚めですか？ 汐梨お嬢さま」

燕尾服に身を包んだ男性は飽きたほど見た自分の執事だった。と、いつことはここは自分の部屋か。いつの間に戻ってきたのだ。そもそもロイヤルホテルにいたはずの私は確かバスルームで…。

ああ、そうだ。思い出した。

何かとても投げやりな気分になつて思わず手首にカミソリを当てたのだ。あれくらいで気を失うと思っていなかつたが甘く見ていたらしい。執事に気付かれないよう手首に触れると包帯を巻いた感触が確認された。幸い傷口は痛むことなく軽症だつたことを示している。

おそらくホテル従業員が家の者が発見したのだろう。だとすれば彼の耳に入つただろうか。こんなバカなことをする女だと思つていなかつたと幻滅されるのではないだろうか。

それでもいいと思つたはずだ。

きっと彼が望むような完璧な女性を演じていて人に疲れてしまつたのだと思う。どうすれば本当の自分を見てもらえるのかわからず出口のない迷路をずっとグルグル回っていたのだ。

「…児嶋、いつからここに？」

「お嬢さまが十時ごろお戻りになられましたのでその後です。しか

し、体調が優れないのでしたらお呼びいただければいものを… 裕臣さまがそばにいらつしゃったから良かつたようなものです。あまり無理はなさらないでくださいませ」

「…え？ 何の話？」

「覚えてらつしゃらないんですか？ バスルームで倒れられていたんですよ、軽い貧血だそうですが。倒れた拍子に手首を切られたそうですが大事に至らなくてよづ」しゃいました。後で裕臣さまにお礼を申し上げなければなりませんね」

どういうこと…？

倒れた私を発見したのは彼だと叫ぶのだろうか。でも確かに彼は出社していくはず、あれは私の思い違いだったのだろうか。少し部屋から出ていただけでシャワーをしている最中に戻ってきたのだろうか。

それにしても発見したのが彼だとして、どうして自ら手首を切ったことは伏せられているのだろう。家の者に心配させないため？ それとも自分の立場を守るため？

「さあ、もう少し休みくださいませ。今はお体を大事にしていただきないといけませんからね。後で奥さまがいらつしゃいますからそれまでゆっくりなさいてください」

「お母さまが？ どうして？」

「奥さまからお話をあるとしか聞いておりません。では」

濁した言い方が気になつたが聞いたりす前に執事は部屋を後にした。

母が私の部屋を訪ねるのは珍しいことだ。話があるときは私が呼ばれる立場にあるためこの部屋を訪れるのは執事かメイドかのどちらかだ。彼だつてここに来たことはない。嫌な予感がする…。

そう思うと同時に彼の顔が浮かんだ。児嶋が知らないだけで、もしくは隠している可能性も否定できないが、彼は両親には話したのかもしれない。となると母は説教に来るのか。彼はこんな私にはもう用がないのかもしれない。予想していたこととはいえ現実味を帯びてくると急に恐くなつた。

すべて忘れてしまいたいとベッドに潜る。静かな部屋でいつしか眠りについた。

目が覚めたとき泣いていたことに気が付いた。夢を見て泣くなんて初めてのことだらうしていいのかわからない。あまりに懐かしい夢を見たから余計に動搖したのかもしれない。

幼い頃の彼と私。今と違つて純粹で相手のことを疑うなど知らなかつた無垢な時代。あの頃に戻れたなら、私は幼い私になんて言うのだろう。きっと未来が決まっていても告げることはできないだろう。結局「今」という未来を選択したのは自分なのだから。

「…マリッジブルーにしては重症だわ」

ベッドから起き上がろうとしたが眩暈がして再び横になった。

軽い貧血だと言つていたが本当にそうなのだろうか。まさか何か重い病気にかかつたという可能性があるのだろうか。そこまで思つて結婚のことが思い出された。

自分だけは大丈夫だと、誰もが漠然と自信を持つている中彼女は病に侵された。私も心のどこかで自分には関係のない話だと信じていた。でも今はその自信が揺らぐ。

不安に押し潰されそうになり体を抱え込んだ。その時、扉をノックする音が聞こえてきて体がビクツと揺れた。

「汐梨、入るわよ」

「…お母さま、今起きます」

「いいのよ、そのままで。無理に起きる必要はないわ。それにしてもあなたには驚かされてばかりね。結婚したいと言つてみたかと思えば延期したいと言つて、日時が決まったかと思えば今回のこと。あまり私たちを困らせないでちょうだい」

返事はできなかつた。

やはり彼から母の耳に入つたのだろう。今回ばかりは底つてしまふないだろう。それでも言い訳をする気にはなれなかつた。黙つて母の説教を聞くつもりだった。だが、母の口からは予想していなかつたことを告げられた。

「でも今回はおめでたいほうだから責められないわ。お父さまは怒つていたけど産まれてくる子どもに罪はないものね、じばらくは安静にしておくのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965v/>

向日葵は太陽に魅せられて

2011年11月21日12時43分発行